
真・恋姫†無双 ～鬼の一刀～

戒人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 ～鬼の一刀～

【Nコード】

N7386M

【作者名】

戒人

【あらすじ】

聖フランチェスカ学園二年生の北郷一刀は北郷家の本家、島津家の武將、島津義弘またの名を鬼島津と呼ばれた彼から力を受け継ぎ、なぜか正史とは異なる三國志の外史に飛ばされる

彼は何故力を受け継ぎ、乱世に身を投じなければならぬのか。そして、夢に現れる黒き者とは一体………

現在ルートに悩んでおります。意見のある方は感想に記入して頂け

れば検討いたします。

何分未熟者ゆえ、ご指摘のほどよろしくお願いいたします。

自己満足の外史なので嫌いな方は戻るをプッシュしてください

白の空間、異変の前兆

これは真・恋姫十無双と戦国BASARA2・3のクロスオーバー作品です。

主人公は北郷一刀、BASARAは技だけです。

オリジナル武器や技もあるかもです。

投稿者は恋姫未経験（プレイ動画鑑賞有）です。

何か間違いあれば指摘お願いします。では

「ようこそ新たなる外史へ」

「ここは、どこだ？」

そう呟いたのは“北郷一刀”

聖フランチェスカ学園二年生の剣道部「副将」で全国二位の実力者であり示現流の使い手（祖父には劣る）である。

因みに大将は三年生の不動先輩（女子）である。

辺りを見渡しても真っ白の空間で物陰一つと無い。

「え」と確か部活を終えて、皆が帰るまで不動先輩と手合わせして、
一対二で負けて、暗くなるまで素振りと示現流の鍛練をして、家に
帰って寝たから」

思考をフル回転させ結論に至った。

「ああ、夢かこれ。」

さて解ったなら話が早い、
早く起きるだけだが

ドシユッ

「？」

背後から何かが刺さる音、振り向いたそこには……

「？、日本刀？」

何故か蒼白い光を放つ刀があった。

白の空間、異変の前兆（後書き）

一刀は一体何の夢を見ているのか？

新たなる外史の扉が今、開かれた。

指摘など頂けると嬉しい

現れし乱世の鬼

「なんでこんなところに刀が？さっきは無かったのに……」

一刀はそう言いながら。刀に近づき、刀を掴んだ

「!？」

瞬間、一刀の周りに蒼白い光が吹き出した。

何事かと警戒しているうちに、蒼白い光は吹き出しながら一刀の前に集まり

「がーはっはっはっ!!」

と頭に響く程の笑い声の様な轟音を出しながら光は少しずつ消えていき、少し大きな人影が見え

「次の後継者候補はんはおまはんかいな!？ええ面構えしちよるの」

と方便丸出しのゴリマッチョの年寄りとは言えぬ体躯のお爺さんがいた。

「（ポカーン）」

「刀は動揺を隠せず、口を開けつぱなしにしながら放心していた。

「ん？どしたね？」

「へ？ああすいません。少し驚いて。え〜とあなたは？」

「おお、わるいーのオイは島津義弘「鬼島津」とはオイのことじゃ」

「（ポカーン）」

「刀はまた動揺し口を空け放心して。」

「（え？なんと言いましたか？島津義弘って昔の北郷家の本家だったよな？・・・）」

「さつきからどしたね？オイは名乗ったんにおまはんは名乗らんのは筋違いやろ。名乗らんね。」

「す、すいません。俺・・・・・・・・僕の名前は一刀・・・・・・・・北郷一刀と言います。」

「ん？北郷？……おお！おまはん北郷どんの血筋のもんかいな！？」

「へえあ？た、たぶんそうかと《グイッ、ガシッ》うおっ！？」

「ほーか、ほーか、確かに顔つきも似ちよるねー、いやー懐かしいのおー。」

そう言いながら肩を引き寄せられ、首に腕を引っ掛けられた。

「（うおっ！酒くさっ！！）」

瞬間、アルコールのツンとする匂いが鼻を刺激してきた。

「（さ、さすがは鬼。酒好きなんだな。）」

そんな些細なことを考えていたら、唐突に。

「うっし！性格も体つきも申し分無し！！今回の候補はんはどうか、見せてもらいます！」

「へっ？」

そう言うと背中から自分より大きな大刀を出し

「さあ、おまはんの力、見せてみなはれ！」

その言葉が聞こえた瞬間、目に見えたのは

鬼の
一太刀
だった

鬼の手解き、島津の技

「っ!？」

いきなり眼前に迫る、死への恐怖を後ろに大きく跳び、なんとか紙一重で避けれたが、前髪が少し斬られた。

「いきなり何するんですか!！」

一刀の反応は至極当然、しかし島津は

「がーはっはっはっ!！よう避けれたのうー天晴れ!！しかしまだ終わりやないど？」

そう言うとき最初に刺さっていた刀を握り

「ほれっ」

「トスッ」

一刀の目の前に放り投げ、地面に刺さったそれを

「抜け、おまはんも示現流の使い手なんやろ？自分の意地、見せてみなはれ」

「くっ!」

殺らなければ

殺られる。

そう思い、覚悟を決め、刀を握る。

「ふはははは！！まず第一関門は合格じゃのう」

「はい？」

（第一？なんのことだ？）

「なあに、オイの一撃を見て、逃げ出さず、対峙することが出来る者が第一の条件だけじゃ。」

「試練は第一を合わせて後二つ、戦いながら見極めてみせい！」

そして島津は疾駆する。

「ふっ！」

それに合わせて一刀も疾駆

そして

《ガキイン！！》

二人はつばぜり合いに発展し、力の押し合いになり

「がーはっはっはっ！！オイに力勝負かね！いいど、押し返してみなはれ！」

「はああああ！！！」

《ガリガリツガツガツ》

しかし流石に力も得物の大きさも歴然の差があり、勝負は見え

「せいやあー!!」

たと思われたが一刀は重心を変え、刀を島津の大刀の刀身に滑らせ島津の頬に軽い切り傷を与えた

「っ!!」

が滑らせたとき、肩に島津の大刀の棘状の刀身に引つ掛け小さな穴が出来てしまった。

「」
「」

二人とも睨み合い

「ふはははは、がーはっはっはっ!!誠、天晴れ!!これが今の示現流の使い手か!!!」

島津は喜びのあまり盛大に笑い、一刀を讃えた。

「これが第二の条件ですか？」

一刀は冷静に、だがどこかうれしそうだった

「おお！確かに合格じゃ！オイの一撃を受け止め、さらに一太刀浴びせるとは夢にも思わなかったぞ！！」

「それは光栄ですね。では最後ですね？」

一刀は誇らしげに言う。

「だが、最後の条件はキツイぞ」

今までの陽気な口調もなりを隠し、真面目な顔つきになり、最後の条件が明かされた。

「オイが放つ島津の技、受け止めることじゃ」

「技？」

一刀は疑問に思った。

(技を放つのに何故、離れるのか?)

その疑問は次の瞬間、寒気に変わる。

「いぐど？」

島津から足が震えるほどの凄まじい殺気が放たれ

《バリバリツジリツジツ》

大刀に電撃が纏わり

『示現流・来迅』

島津がそう一言放った瞬間

「っ!!!」

「

一刀は電撃の渦に巻き込まれ

真っ白な大地へ叩きつけられた。

鬼の手解き、島津の技（後書き）

鬼の試練は終盤へ

しかし地に伏せるのは一刀のみ

だが彼の中の鬼は目覚めの時を迎える

次回

鬼の覚醒

鬼の覚醒、受け継がれる記憶と技

島津 side

「……………《わしゃわしゃ》」

島津は一刀が地面に叩きつけられたのを見て、髭を搔いていた。

「しまった、加減、わすれてまった。」

島津は『来迅』を三段階溜めて放ってしまったのを嘆いていた。

「普通の来迅は今までの候補はん等に放って起き上がった者は、居らんかったからのお」

そう言いながら一刀に近づき異変に気付く

「？」

刀がさらに光を放ちだし、刀身の根元に何かの印が浮かび上がった
いた

「……………！！！」

瞬間、声にならない程の光景を見た。

それは

さらに蒼白い光と電撃を放ち、
家紋の十文字が浮かび上がった刀を携えた

【蒼白の鬼神の姿だった】

一刀side

「《目覚めの時だ》」

誰かが呟いた、瞬間、頭の中に映像が流れ込んできた

「!?!? がああああー!?!?!」

戦いの痛み、仲間の死、島津の技が頭に流れ込み、それを頭の中に
刻み込まれていく

「あああああ……はあはあ……ふうふう」

痛みは治まりつたが

「う、ぐおええー!?!」

人の死に様、さつきまで生きていた仲間の無惨な死の記憶が振り返られ

「《スツーー》」

頬を伝う、小さな雫、悲しい気分が一気に溢れ、思った。

「（これは島津義弘の記憶）」

今まで見ていたのは彼の記憶の一部、そして何かの存在に気付く。

「これは!?!」

一刀の手には蒼白い光と電撃を放ち、刀身の根元に十文字が浮かび上がった刀があった。

取り敢えず立ち上がったところに

「がーはっはっはっ!?!」

聞いたことがある。

轟音の笑い声が聞こえた。

そこには歓喜に目を輝かせた鬼がいた。

一刀、島津side

「まさかその刀がそげな反応を示すとは、愉快、愉快!!よか!—
刀どん、もういっちょ受けてみなはれ!」

「ええ!?!ま、またあれを受けるんですか?ていつかさっき受け
れずに失格になったんじゃ」

「たしかに受けきれずだったがおまはんはまだ立ち上がれる。それ
に体になにか変化はないかい?」

「えっ………な、なんじゃこりゃー!?!」

体を見てみると淡い蒼白い光が迸る右手があつた

「それはオイの力の一部を身に付けた証。オイと同じ構えをすれば
よか!いぐどー!?!?!覚悟ばきめえい!?!?!」

「(やるしかない!)

覚悟を決め、島津と同じ構えを

「!?!」

した瞬間、次の行動が自然とわかり

『『示現流・来迅』』

そう同時に言葉を発し

《ゴロツゴロゴロゴロ!?!バリツバリバリバリ!?!》

同時に技を放った

《ヒーーーーーン、カッ》

《ゴアーーーーーン!!》

白い空間に稲妻の轟音が鳴り響き、爆発した

「
」

煙が晴れ、見えたのは

勇ましい、次代の蒼白く光る鬼神の姿だった

鬼の覚醒、受け継がれる記憶と技（後書き）

島津の記憶

仲間の無惨な死

受け継がれし技

光る刀

今、一刀は力と戦国の世の悲しみを知る

次回

刀の正体、島津の目的

受け継ぐ流派、鬼の顔

「がーはっはっはっはっはっ！見事！！これにて試練を終わりと
しもす」

島津はそう言いながら一刀に近づいてきた。

「今のは一体何だったんだ？」

ただ単に島津の言う通りにしただけで彼の技が使えた、それが最大の疑問として一刀の胸に残った。

「（彼に聞けば解るだろうからいいか。）」

そう思い、前を向いた

「ぶあつぷっ！！」

「がーはっはっはっ！！合格見事！」

瞬間、また肩を引き寄せられ酒臭い匂いが来た、と思えば腰に付けていた十文字の印が付いた大きな徳利とこれまた大きな赤い杯を渡され、それに酒がトクトクと注がれた。

「さあ！これを試練の締めとせい、飲め！！」

「ええ！？こんなに！？む、む、む、無理無理！！一気にこんなに飲んだら倒れるって！！」

「おつと間違つてもうた、大丈夫だて、これは酒であり、示現流の源、飲むでなしにその刀に吹きかけるんじゃ」

源？一刀は問う、彼曰くこの酒は島津の秘酒で示現流の技を受け継ぐ者のみが口にするのを許されたものだと言った。刀も同様な物だ

「とつ、その前に言つとかないかの」

「えっ？」

島津はおもむろに大刀を地面に突き刺し、片膝をつき

「我、示現流の化身、汝に我が示現流の後継者になって頂きたく此処に参上した次第、汝はそれを望むか？受け継げば先程の痛みより上の苦痛を受ける、だが汝はこれから更なる苦悩にぶつかるかもしれぬ。」

一刀は最初、嫌だと思つたが、島津の話聞いていたら

「（この人は俺のことを選んでくれたうえに心配をしてくれている）

」

島津の目が希望と心配の色になっている様に見えた一刀は

「我、北郷一刀、汝の願い、示現流を受け継ぎたく思います」

言った瞬間、島津の目は輝き

「では、後継の儀に移ります」

ガシツと刀と杯を掴み、酒を含み

《プウーーーーー!!》

刀に吹きかけ、一刀に刀の柄を向け

「さあ、汝の番じゃ」

そう言われ、一刀も酒を含み、刀に

《プウーーーーー!!》

吹きかけ刀を地面に突き刺し

「汝、示現流の全てを受け継ぐ者なり」

島津はそう言いながら一刀の頭に手を置き

【示現流の真髄、此処に極まれり】

呟いた瞬間、一刀は

「!!!!!!!!!!!!!!」

言葉を発することも出来ず、気を失った。

瞬間、見えたのは

《ニッコリ》

鬼とは程遠い和やかな笑顔だった

主人公設定

名前：北郷一刀

見た目、性格は原作と同じ、剣道部副将、全国二位、恋姫の世界では五虎将並みだがまだ示現流を使いこなせていないため完全ではない。

あとあとさらに強くなると思われる。

聖フランチェスカに通うため一人暮らしをしており、主夫化している。

勉強は上の下、運動は上の中。

鈍感のため周りの好意に気付かない。

因みに好意を寄せている人数は：・・・・・・・・今まで食べたパンを数えているか？

流派：示現流（戦国BASARA仕様）を使うがまだ本領を發揮できない。

武器：日本刀

銘：示現一刀（記憶の受け継ぎの時に判明）

【刀身は普通より長く、根元から太くなっており、鍔と同じくらい鍔は十文字の型を丸い鍔に彫ってある。

鞘と柄は白でシンプルな作り、柄には示現一刀と彫った黒鉄が埋め込まれ黒の縄で菱形の一つごとに・示・現・一・刀・と見える様になっている。

示現流の技を使うと鍔に十文字の形に光が浮かび上がる。常に蒼白く光り、電撃を放つ。

鞘に手を差し込む（メリケンサックを太くしたような）取っ手がつ

いている。

形は継承時に人ごとになる】

次回から恋姫の世界に行きますが、島津と、ある漢女との会話から入ります。

不可解な世界、徳高き三姉妹

「これでよかったとか？」

貂蝉どん

そういうと島津の後ろに大きな光の塊が現れ

「ええ、ご主人様が生き残るため、元から強いけどそれだけじゃダメ。

あなたの剣技を身につければさらに生き残れる確率は上がる。

ありがとね、眠ってたのにわざわざ起こしてしまつて。」

「気にせんでええど、おまはんのようなつわものが助けたいちゆう男に興味があつたでの。」

島津と貂蝉は一度、手合わせをして互角まで渡り合つた経歴があり、貂蝉に頼まれ、次の後継者を一刀として試し、認めたのである。

「じゃあ、私はご主人様を送るわね。」

また来る時があれば手合わせなり酒なりしましょう。」

「おお、オイもええもんを見せてもろうたでの、おまはんが来るのを楽しみにしておくわい。」

「ええ、じゃあおやすみなさい。」

貂蝉がそういうと島津のからだは蒼く光、多くの小さな螢火となつて天高く舞い上がり消えた。

「じゃあ準備しないとねえん」

貂蝉は手の中から二つの蒼い光る宝石のようなものを取り出し

「ぶう~~~~るうああ！」

すると宝石のひとつは一刀の防具入れになり、もうひとつは聖フラ
ンチエスカの制服と白の胴着、黒の袴になった。

因みに防具入れには防具ではなく先ほどの服を入れるためだ。

「さあ、新たな外史の扉を開きましょう。」

一刀の傍に防具入れと刀【示現一刀】を置き一刀を光の穴へと落と
した。

「がんばってね、ご主人様。」

その瞬間の漢女の顔は子の成長を見守る親のような顔だった

一刀side

ああ、なんだか今、俺が思っていることはつい最近言った気がする
がそつも言ってもらえないな。

「ううは、どこだ？」

そう俺は今、鬱蒼と生い茂る森の中で目を覚ました。

「彼が言っていた苦悩っていうのはこのことか。」

彼には感謝してもしきれないな〜と思いつつもとりあえず周りのことを調べだし

「?なんで俺は剣道着に着替えてるんだろ。」

いまの一刀の装備は

服装：白の胴着、黒の袴

武器：示現一刀

持ち物：カバン【防具入れ】制服、タオル、携帯【太陽電池】

とりあえずここがどこかを調べるために歩き出し

数分後、森の中から出られず空腹にて倒れていた。

.....

??? ? side

「今日は結構、あつめたねえ」

桃色の髪のほわほわした雰囲気の子が言う。

「はい、宿に帰ったら早く草履にしなければいけませんね。」

黒髪のキリツとした雰囲気の子がまじめに答える。

「にゃ、おなかすいたのだ。」

赤髪の小さな女の子が言う。

「そうだねえ、私もおなかぺこぺこだよ。うひゃあ!?!?」
シューーン!
べ

「桃香様!?!?」「お姉ちゃん!?!?」

桃香と呼ばれた彼女はなにかに躓き、盛大にこけた。

「もあ~~~~う! 一体なに.....」

「?どうかしました.....」

「にゃ？」

躓いたところを見れば、黒い入れ物のようなものと白と黒の上下の服をきた自分と同じ位の年の男の子が倒れていた。

「大丈夫ですか!？」

「桃香様!危険です。

お下がりにください!」

「でも愛紗ちゃん!」

「私が見てきます。鈴々、桃香様を頼む。」

「わかったのだ!」

そついいどこからか青龍偃月刀を構えながら男の子に近づき

ポ〜

彼女の顔は真つ赤に燃えた

「?愛紗ちゃん?」

「はいっ!」

不思議に思った桃香は愛紗に呼びかけたが帰ってきたのは驚きに満ちた裏声だった。

「わあ、カッコいい人だね。」

「にゃ？ほんとなのだ。

だけどなんでこんなところに倒れてるのだ？」

「さ、さあ何故だろうな？」

三人とも異なる反応を示す中

「ん、ああ……、は」

「「「は？……」「」

一刀が喘ぎ声をあげ、三人が注目するなか、

「腹……へったあ……」

「「「ぶぷっ！」」

一刀の言葉をきいた瞬間、三人とも吹き出した。

「かつ、かわいい人だね」

「はっ、はい、ふふっ確かに愛らしい。」

「鈴々達と同じ腹ぺこなのだ！」

「じゃあ、とりあえず村に運ばっか？」

「はい、ですが何かおかしな行動をすれば。」

「鈴々が叩きのめすのだっ！」

じゃあ、と桃香は集めた藁を、愛紗は一刀の背中を背負い、鈴々は足とカバンをどこからか出した蛇矛に引っかけ、片手で運び村にいた。

「ただいま〜。」

「只今戻りました。」

「ただいまなのだ！」

「お帰り、三人とも。」

と村に入り出迎えてくれたのは三人を住み込みで働かせてくれる、宿屋のおかみさんだった。

「あら？ どうしたのその子」

「森で倒れてたのだ！」

「それを桃香様がたすけたいと申しまして。」

「あ〜！！私だけのせいにして愛紗ちゃんひど〜い！！」

「相変わらずだねえ。まあ起きたら働いてもらおうかね」

そんな平和な話しをしていた。 だが誰も知らない。

この平和を破壊せんとする軍団が迫っていることを

貫く信念、刻む覚悟、天の御遣い

一刀side

「ぐあああああゝ!!!!」

「だ、だすげっ、だすげで

「ぎゃああああー!!!!」

」

「や、やめでぐれえゝゝゝ!!!!」

“憎イ憎イ憎イ憎イ憎イ憎イ憎イ憎イ憎伊呪ってやる、呪ってやる、呪ってやる、呪ってやる、呪ってやる、呪ってやる、呪ってやる、呪ってやる、呪ってやる、呪ってやる、呪ってやる”

「こ・の・恨・み・必・ず・や・ゝ・晴・ら・し・て・や・る・!!
「!!!!!!」

「しゅわああああ!!!!」《ぐうがばあ!!!!》

「しゅひやあああ!!!!」

「きゅあっ!?!」

「うにゃ~~~~っ!?!」

「ここは何処だ？」

「いやそれよりさっきの一体？」

「ここは家か？」

「あ、あの~~~~?」

「へっ?」

誰から声が聞こえたので振り向くと、桃色、黒髪、赤髪の女の子達
が心配そうな目で見つめていた。

「ご、ごめん。少し嫌な夢を見ただけだよ。ありがとう。心配して
くれて。」

「本当に大丈夫?ならいいけど・・・」

「お兄ちゃん、泣いてるのか?」

「え?《サワッ》うわあっ!?!」

赤髪の少女に言われ、目の下を触ったら確かに涙を流していた。
服で拭おうとしたら

《スッ》

「えっ？《フキフキ》あ、あの？」

「大丈夫ですよ。ここは宿です。貴方は森の出口付近で倒れてしまったので私達がここに運んだ次第です。」

「そ、そうだったんですか？ありが《グウ~~~~》……《力ア~~~~》」

顔が熱くなるのを感じた。

だって腹ペコで鳴るなんて恥ずかしさで死にそうだ~~~~!!!!

「ふふつ、やはり空腹だったのですね。まっけてください。今、おかみさんから食事を貰ってきますから。」

「や、やはりとは？」

「お兄ちゃん、腹……へったあ。って言ったのだ。」

えっ、気絶した理由が空腹だったからってうわ言でも腹ペコを主張してた？

「ただ腹ペコなんだよ!!!人生初の体験だよ!!!」

「そう言えばお兄さんの名前は？あ、私の名前は姓は劉、名は備、字は玄德。よろしくね。」

「鈴々は姓が張、名が飛、字は翼徳なのだ!よろしくなのだ!」

「あ、ああ俺の名前は北郷一刀……って……りゅ、劉……備?……張飛?」

えっ？何言ってるんだ？

なんで三國志の英雄がこんなかわいい女の子達なんだ？

「えっと、もしかしてさっきの黒髪の女の子は關羽って名前じゃ？」

「ええ！？なんで愛紗ちゃんの名前を知ってるの？」

「え〜とそのあいしや？ってなんなの？」

あだ名か何かかな？

でもどこに要素が？

「なにつて、真名だよ？しらないの？」

彼女がいうには真名とはその人の生き様を表し、許されなければ言うてはいけない神聖なものだそうだ。

「じゃあ次はこっちの番ね？なんで愛紗ちゃんの名前を知ってるの？」

「それは俺ががっ《ガチャ》」

「食事を持ってきましたよ・・・どうしたのですか？」

「あのね愛紗ちゃん！このお兄さん、愛紗ちゃんの名前を《グウ〜》
《〜〜！》・・・」

やっと治まった腹鳴りが吹き返し、顔が灼熱するのを感じた。

なんなんだこの腹は！！なんでこんな超絶にいいタイミングで鳴るねん！！つい関西弁になってもうたがな！！

「ふふっ、やっぱりご飯食べてからにしようか？」

「はい……本当に申し訳ない……」

「にはははっ！お兄ちゃん、鈴々みたいなのだ。」

「お前と違って遠慮を弁えておられるがな。」

「にゃ~~~~~、痛いところを突かれたのだ……」

「うふふっ！」「ははっ！」

なんだか居心地のいい子達だなあ〜と思いつつながら食事を頂き、黒髪の女の子と自己紹介をして、こんな話を聞いた。

【この乱れた世界に天より遣わされた、この世を導く白く輝く服と、蒼白く光る剣を携えた『天の御遣い』が現れる】

と言つ予言があるらしい。

(もしかしたら俺がそれなのかもしれないな)

多分、島津さんはこれを見越して力を授けてくれたんだな。ならばまだ言わない方がいいだろうな。

混乱されたり、警戒されるだろうし。と考えていたら

「賊だああ！！賊が来たぞおお！！」

宿の外から村人が悲痛の叫びが聞こえた。

「「「「「！！！！！！！！！！」」」」」

聞こえた瞬間、俺達は驚きに包まれ

「行くぞ！鈴々！！」

「了解なのだ！！！！」

二人はどこからか青龍偃月刀と蛇矛を出し

「桃香様と一刀殿はここにいて下さい！！！！」

「行つてきますなのだ！！」

と言い出ていった。

残された俺達は

「《カタカタツ》」

「りゅ、劉備？」

彼女が震えているのを気付き……

「お、お兄さん……私……。」

瞬間、俺の心は彼女を守りたいと思った

「大丈夫、落ち着いて。
君のしたいと思うことをすればいい。」

彼女を抱きしめながら言う。これは俺の祖父であり、師匠である人からの受け売りで、俺の信念だ。

「そ……そうかな？
私、二人みたいに強くないよ？」

「強いとか弱いとか関係ない。守りたいって思いは一つなんだから。戦えないなら応援すればいい。」

だから言ってる。
優しい口調で強さは武だけじゃないとすると

「そうだよね、そうだよね！！ありがとうお兄さん！！」
といい急いで部屋から出ていった。

俺は覚悟を決めていた。

【命を奪う覚悟を、失う覚悟を、そして

自分の命を賭けて護る覚悟を
】

「
ッ！！！」

ダントと立ち上がり、カバンを開け、刀と制服をだし

《バスッ！ジーーーー！》

制服に着替え、チャックを締め

《チキッ、スーーーーッ》

刀を抜き、両手で握り、天に掲げる様に突き立て

【今こそ武を示すとき！】

と叫んだ、刀の根元に十字の印が浮かび上がっていた

「いくかつ！！」

一刀は部屋から飛び出し、宿を出て村人達が見守る門に近づき、見張り台を駆け上がり、状況をみる。

「やはり数では負けているか!!」

門の手前に二人と村人達が抑え込まれ

「もう、やめて!!」

たと思つた瞬間、劉備が立ちはだかる

「桃香様!？」 「お姉ちゃん!？」 「劉備ちゃん!？」

全員が驚愕し、賊達は下卑た笑い声を出す。

「へっ、嬢ちゃん。邪魔はいけないな。もったいねえが死ねえ!
」

賊は剣を振り上げた

「ふっ!!」

俺は空を飛びながら刀を抜き、技を使う準備をし

『示現流・撃昌』

前回りを一回転し、賊を剣もろとも叩き斬った

《バリバリバリバリッ！！》

劉備 side

守ろうとした。

助けたいと思った。

力が無いとか関係ない。

この心は私の物なんだから。

でも力が必要なだ。

力が無いから今、私は死んでしまう。

ああ、こんなことが来るなら鍛えておけばよかった。

皆、ごめんね。私、皆を守れなかった。

賊の剣が頭に振り落とされた。

でも、これで良かったんだよね。
お兄さん

《バリバリバリバリバリッ！！》

頭に響く轟音、だけど痛みはない。

不思議に思い、目を開けた。

そこには

「遠からん者は音にも聞け！ 近からん者は目にも見よ！ 我は北郷
一刀！ 天の御遣い！ この村には指一本触れさせはしない！ 我が蒼白
の雷刃にて汝等を討つ！！」

天の御遣いを名乗る、私達の為に賊を倒そうとする

白く煌めく服と蒼白く光り、電撃を迸らせる変わった剣を携えた

優しいお兄さんが私達を背に立ちはだかっていた

貫く信念、刻む覚悟、天の御遣い（後書き）

命を奪う覚悟、護る覚悟

胸に刻み北郷一刀は天の御遣いとして一步を踏み出した。

書いたのをまた書き換えて投稿することが多いのでややこしいです。

ご容赦を

御遣いの護剣、少女の心、護れた命

関羽 side

「一刀・・・殿？」 「お兄・・・ちゃん？」 「あの兄ちゃんが・・・天の御遣い？」

私達は抑え込まれ、 終わりかと思った。

桃香様が私達を守ろうと、 立ちはだかり、 賊が桃香様を殺そうとした。

「はぁー！ー！ー！っ！ー！！！」

それをあの白く煌めく服を身に付け、 あの蒼白く光る剣を振るっている、 一刀殿が蒼雷を繰り出し一刀両断し、 私達を守っている。

「関羽！張飛！村人達を安全な所に！」

「は、はいっ！！」 「わ、わかったのだ！」

私達は命令された通り、 村人達を誘導し、 桃香様を一刀殿が膝と背中
中に手を当て、 抱き抱えながら運んでくる。

「門を閉じる！」

「で、でもこんな門、 あの数じゃあひとたまりもないぞ！？」

「大丈夫、俺に任せろ！早くっ！」

そう指示しながら私に桃香様を預けてきた。

桃香様はそんな一刀殿をただ無言で見つめていた。一刀殿は私達に背を向け、閉まりゆく門に駆けて行く。

「お兄さん！」「一刀殿！」

「おにいちゃん！」

私達が同時に呼び掛ける。すると一刀殿は振り向き

「関羽、張飛！俺と一緒に戦ってくれるか？」

と真剣な眼差しで言ってくれる。桃香様はひどく不満げだが。

「劉備は村人達を助けてやってくれ！君なら村人達を落ち着かせるだろうから！」

それを聞くと桃香様は顔を輝かせ、

「桃香だよ！お兄さん、私の真名をお兄さんに預ける！！」

それを聞いて驚いたが・・・ふむ、確かに私達を守ろうとしてくれているのに信頼しないのはおかしいな。

あの武、人柄、それにあの笑顔。

すべてが信頼にあたいする。
ならば

「一刀殿！私の真名は愛紗です！」

「にゃ！？おにいちゃん！鈴々も預けたいのだ！鈴々って呼んで！？」

それを聞いた一刀殿は少し驚いた素振りを見せた後、あの笑顔で

「行くぞ！桃香、愛紗、鈴々、！！」

「はい（なのだ）！！！！」

私達は追いかけたあの背中を、あの暖かく大きな背中を

一刀side

『示現流・喝破』

「喝っ！！！！」

「ひい！！！！」

「っ

！」

「に、逃げるー！！！！」

「！」

だたの喝だが気の弱いやつらは逃げ出し、まだ強いやつらは踏み止まってはいるが足が固まっている。

「行くぞ！愛紗！鈴々！村には誰一人近づけるな！！」

「はっ！」 「はいなのだ!!」

愛紗と俺は前に出て、鈴々が中ごろで討ち漏らしたものを討つという陣形。

そこらの雑魚でも十分な物だ。 抜けようとしてもまた喝破で止めれるが、抜けるのもいるので鈴々に任せている。

しかし数は多い、何か纏めて叩く技を……

《ピンッ!》

閃いた、俺の技で範囲が広く、

一番強いものを

「愛紗！鈴々！少し時間を稼いでくれ！いい考えが浮かんだ!!」

「本当ですか!?!」 「本当なのか!?!」

無言で頷き、鈴々と替わり、俺は刀を右脇に柄を置き、刀に電撃を溜める。

「おめえら！御遣いが下がった今が好機だ！数で叩き潰せ!!」

「……………うおおー！！！！」「……………」

愛紗と鈴々に賊が殺到する。　早く、早く、もっと早く溜まれ！！

《キーン》二段階目が溜まった。

愛紗達はなんとか武器を大きく掲げ、賊達の武器を止めていた。

「ぐあっ！？」「にゃ？愛っ！？にゃああーっ！？」「

だが横から拳を受け、愛紗は飛ばされ、鈴々は愛紗に気をとられ、蹴り飛ばされた。

「（くそっ早く溜まれよ！！このままじゃっ）」

「おめえら御遣いは身動きできぬえ！先に仕留めろ！そいつらは後回しだ！！」

「……………うおおー……………！！」「……………」

賊達は標的を俺に変え、斬りかかってきた。

「！？」「

そして賊達の凶刃は

《ガキーン！》

「一刀殿は！」 「お兄ちゃんは！」

「「傷つけさせ（んぞ、ないのだ）！！！！！！」」

二人の交差した刃で受け止められた

「《キーン》二人共！！下がれっ！！」

「はっ！」 「はいなのだ！！」

「示現流・来迅！！！！」

賊達の凶刃と肉体は

《ゴロゴロ………カッ！バリバリバリバリッ！！》

電撃の大渦に飲み込まれ

「「「「「「「」」」」」」

！！！！！！「「「「「」」」」

悲鳴にもならぬ声が轟音に飲まれ、塵となり、この世から消え失せ
た

桃香 s i d e

私は祈っていた、三人の無事を。

厳しくも優しい妹。

食いしん坊で元気な妹。

そして

ついさつき会った、優しく、強くて、かっこいいお兄さん。

私に力を教えてくれた。

私を心配してくれた。

私を助けてくれた。

あの笑顔が忘れられない。

あの暖かさが忘れられない。

あの強さが忘れられない。

心が、胸が、彼のことでいっぱいになる程に。

そして

《ゴロゴロ……カッ！バリバリバリッ！！》

門の向こうから轟音が聞こえた、そして

《ギーーーーー》

門が開き、見えたのは

愛紗ちゃんをさっきの私の様に抱き抱え、鈴々ちゃんを背中に抱えた

変わらずの暖かい笑顔で
こちらを見る、優しいお兄さんがいた

宵闇の月光、御使いの憂い、そして旅立ち

一刀side

『わあああああー！！！！』

村に戻ったら村全体が沸いていた。

村長のようなおじいさんから「ありがとうございます。あなたはわしらの恩人じゃ」と言われ

親父さんは「見た目通り、まさに御遣い様って感じがしたぜ！ほんとにありがとよ！！」

宿屋のおかみさんは俺を中々立派な胸の中に埋めながら「可愛らしい男の子だと思ったら中々勇ましい方じゃないか！私があと二十年若ければ、嫁ぐとこだかねえ」

ってなんか上等文句を言いながら俺の額に口付けをってちょっと待って！？

おかみさん！？

中々の問題発言してるよ！？

それに今でも十分、魅力的ですよ！？

あ

「い、嫌だねえ。お世辞を言っても何も出ないよ？でもありがとね」

と顔を真っ赤にして返事して、俺も真っ赤になりながらその感謝を受け止めた。

周りの村人は何か穏やかな目で見てくる。

「と、取り敢えず愛紗と鈴々を宿に連れていこう。」

村の皆も手伝ってくれ、二人を寝かした所におかみさんが「村を守ってくれた御礼に宴をしないかい？」と提案。

皆も賛同して夜に開催することになった。

愛紗達は医師がいたので診てもらったら「げんきになれえー！
！！」と何処かで聞いた事のある勇者ボイスの「華陀」という男の
人が鍼で治療を・・・つて!?

「華陀!？あの五斗米道の!？」

「違う!!!」「へっ?」

「ゴツドヴェ」

中々長い話になるので割愛しよう。

なんやかんやで宴までに二人は目覚め、華陀はまた旅に出た。

「宴に参加しないのか?」と聞くと

「俺の来訪をまつている病魔に苦しんでいる人がいるのだ!！」
と風のように去って行った。

取り敢えず俺達は主賓として歓迎された。

料理を振る舞い、踊りを舞い、歌を歌う、そんなどんちゃん騒ぎが
開かれる中、俺は見張り台に登り、漆黒の闇を照らす、三日月を眺
めながら、月光を浴びていた。

「《コキユ》この世界でも、月は変わらないんだな。」

酒を飲みながら呟く。
因みにあっちの世界の酒である。
カバンの中に入っていたそれは島津さんが持っていた大きな徳利と
小さな同じ柄の徳利、作り方は記憶の引き継ぎの時、頭にしみつい
ていた。

あっちの世界はどうなっているんだろう？

父さんは？

母さんは？

不動先輩は？

及川は？

じいちゃんは？

帰れるのだろうか？

あちらの世界の時間は動いているのだろうか？

動いていたら帰れたら俺は【北郷一刀】と認められるんだろうか？
そんなことを考えていたら

《ギシギシ》

下から誰かが登ってくる。

「見つけたのだ！」

「ああ〜！主賓が何一人でこんなところにいるの!?!」

「一刀殿、探しましたよ」

登って来たのは鈴々、桃香、愛紗だった。

「いや、月が見たくてね。天の酒なんだけど三人も飲む?」

三人は興味津々な表情を浮かべ、頷いたので三人の目の前に杯を並べ、小さな徳利から酒を注ぐ

「頂きます」 「ありがとうございます。」 「頂きますなのだ!」

三人一緒に飲み干し驚愕の表情を浮かべた

「お兄ちゃん!こんな美味しいお酒初めてなのだ!」

「すっごく美味しいよ!」

「この喉越し、至高の逸品です!」

「ははっ、ありがと。そう言ってくれと作った先祖様も報われるよ。」

《ビシィッ》

言った瞬間固まる桃香と愛紗。 鈴々はそんな二人をポケットと見ていた。はて?

「あ、あの一刀殿? まさかこれは貴方のご先祖様の……?」

「??そうだけど?」

「!」 「ごめんなさい!」

「申し訳ございません！ その様な大事な品を私達が、ほら鈴々も！」

「《グイッ》にや！？ご、ごめんなさいなのだ？」

あゝなんか誤解されたらしい。んゝ……………あ

「じゃあ一つお願い。」

「はいっ、何なりと！」

そう言われたので。

三人の杯に酒を再び注ぎ、自分にも注ぐ。

三人は疑問の色を浮かべる。

そして

「この杯に誓う！また会うことができ、志を同じくとするのならば、共に戦うことを！！」

三人は驚きの表情を浮かべる。

「今の誓いに賛同してくれるならその酒を飲み干してくれ。」

三人は驚きの表情を浮かべたが

「その誓い、受け入れます。」

「はいはい、賛成！」

「なのだ!!」

《ゴクツ!》

三人一緒に飲み干してくれた。

「ありがとう。三人共」

笑顔で返す。すると

「『《カア~~~~!》』」

桃香と愛紗は顔を真っ赤にして俯く。

「にゃ?また会って何なのだ!??」

と鈴々が俺の発言に疑問を投げ掛けて来た。二人もこちらを見て疑問の色を浮かべる。

「明日、この村から出て行くことと思ってね。」

「そ、そんな」

「も、もう行ってしまつのですか?」

「にゃ~~~~!!いやなのだ!~!一緒にいたいのだ!~!
!《ガバツ》」

「《ガシツ》とつと!??り、鈴々つ、危ない!~!」

いきなり鈴々が抱き付いて来た。
なんだかくすぐつたい気分だ。

「ごめんな鈴々、でも、もっと世界を見て回りたいんだ。」

「じ、じゃあ私達も旅の途中だし、見終わって、また会えたら」

「そうなのだ！ていうか明日、鈴々達と一緒に来るの《バシィ》に
や！？」

「無茶を言うな鈴々！一刀殿は天の御使い様。世界を知らなければ
いけないお方なのだ。我慢しろ！」

にやあくど頂垂れ鈴々の頭を撫であやしていく。
すると《コテリ》

「す〜っ、す〜っ」

「ははっ寝ちゃったか。お休み鈴々。」

鈴々を膝の上に寝かせ、撫でていく。
視線を感じ見てみれば

「《じーっ》」

二人も寝たそうにこちらを見ていたので手招きして胡座の右側と左
側の太ももに頭を置かせ、鈴々を胡座の上に寄せ、四人一緒に夜を
過ごした。頭を撫でながら酒のお陰ですつと夢に落ちていった。

その光景を見た村人達はこう語る。

四人共に幸せな寝顔だったと。

門前

「じゃあ、お世話になりました。」

「いやわしらの方がお世話になりました。また立ち寄ってください。」

「またね、御使い様。」

「御使い様、また会いましょうぜ。」

一刀は道着を着て、お別れをしていた。

「お兄さ〜ん！」 「一刀殿ー！」 「おにいちゃ〜ん！」

「三人共、また何処かで会おうな〜！」

「さようなら〜！」 「また、お会いしたしょう！」 「バイ
バ〜〜イなのだー！」

一刃達は別れを交わし、
世界を知る旅に出た。

だが四人はまた会うだろう。だって

彼らは仲間なのだから

街を守る龍と二人の策士、幼い龍と鳳、蒼雷の鬼神

一刀side

旅に出て初めに気付いたこと、それは

「どこに行けばいいんだろう」

だ。今、俺は村で何故道や街などの場所を聞かなかつたんだ！

と叫んだ、さつき。

今は少し草が繁っている平原を歩いている。

食料は村から少し分けてもらい、なんとか腹減りでまた倒れることはしていない。

ただとぼとぼと歩いているだけだ。

「おい兄ちゃん、こんな道で佇んでどうしたんだ？」

ふと話しかけられた。

どうやら無心で歩き続け、街道にでたようだ。

ラッキー

「あのこの近くに街か村はありませんか？ 道が解らなくて。」

「今から俺の街に帰る所だが乗るかい？」

と商人の親父さんが自分の馬で引いている荷台に親指でさす。

「あ、ありがとうございます！連れて行ってください！...」

「おうともよ！さつさと乗りな！！」

どうやら気前のいい人のようだな。 と荷台に乗ると、

「『ポーーーーッ』」

黄色い髪をショートヘアに頭に帽子を乗せた少女と水色の髪をツインテールに魔法使い帽子は被った少女が仄かに顔を赤らめ、俺を見ていた。

「こんにちは。」

「はわっ！？こ、こっ、こんにちは！」

「あわっ！？こ・・・こんにちは」

なんかすごい驚かれた。はて？

取り敢えず自己紹介を

「俺の名前は北郷一刀、お恥ずかしながら道に迷った旅人だ。君達は？」

「はわっ！？しよっ、姓が諸葛、名は亮、字が孔明でしゅっ」

「あわわ・・・ほ、ほほ、姓が鳳、名が統、字は土元でひゅ・・・」

「・・・へ？」

今なんと？諸葛亮？鳳統？この二人があのか？
じゃあやつぱりこの世界は将が全員女の子の世界！？

「（な、なんだってー！？）」

「君達はなんでこの荷台に乗せてもらってるのかな？」

少し動揺を抑えきれずに引きつった顔で言ってしまったが二人は気にすることなく言う。

「この商人さんの行く所に買いたい書が有ったので連れていってもらった帰りなんですっ」

「でしゅ・・・」

どうやら勉強熱心のようだ。

少しだが心を開いてくれたらしく腰に差している示現一刀について聞いてきたので「俺は倭から来たんだ、これは倭の伝統の剣、『刀』

『倭刀』 『日本刀』 などと言われているんだよ。」

と一応日本の昔、倭国から来たことにした。

二人はやはり勉強熱心で聞いた事を紙に書いていた。

《ガタタン！》

「はわっ！？」 「あわっ！？」

「っと、大丈夫？二人共」

「は、はいっ、ありがとっございます一刀さんっ。」

「あ……ありがとうございます。」

「嬢ちゃん達！やばいぞ、街が！！」

何かにぶつかった音がし

、荷台が揺れたため二人が飛ばされそうになったのを抱き止めた。

瞬間、親父さんが慌てた表情でこちらに言葉を投げ掛けて来た。

街の方を見れば黄色い布を身に付けた賊に襲われていた。

「はわっ！？ま、街が！？」

「あわっ！？せ、先生達は大丈夫かな！？」

「やべえな。街には少しの兵しかいない上に指揮官なんていやしねえ！！」

「いや、どうやら指揮官は二人、しかも中々強い将が一人、前線で兵達と一緒に賊を食い止めている」

街の周りは水が引いており、正面以外からは攻めれないらしく泳いで登ろうとすると指揮官の二人が弓兵に指示して撃ち落としている。

「だが、前線がそろそろ危険だな 兵達が負傷して下がって行って、数で押しきれられそうだ」

「はわわっ！？どうすれば！？」「あわわわわっ！？」

仕方ない……か。

制服に手を伸ばし……着替えている暇はないか。

「二人共！ここから絶対出るなよ！！荷物を頼む！《タンツ》」

「はわっ！？、一刀さん！？」

「あわっ！？ど、どこに行くんですか！？」

「まさか兄ちゃん！加勢しに行く気か！？やめとけ、一人で何が」

「じゃあ、ただ黙って見とけって言うのか？」

「くっ」

三人共心配した表情で言うてくる。

「大丈夫、三人の街は絶対守って見せるから！！」

努めて笑顔で、言う二人が

「「一刀さんっ、街を、皆を助けてください！！！！」」

泣き顔で懇願された。

笑顔で頷き、親父さんに二人を安心な所に運ぶように言い、荷台から飛び降り、街に駆けて行く。

諸葛亮 side

一刀さんが黄色い海に駆けて行く。

突然、荷台に乗ってきたかっこいい人。

倭から来たという彼は私達に話しかけてくれた。

彼は私達の質問に丁寧に答えてくれる。

「はわっ、しゅ、朱里ちゃんこれ!？」

雛里ちゃんが何故か驚いた声で呼び掛けてくる。

そこには 白く煌めく服が一刀さんの荷物から出てきた。

白く煌めく服・・・まさか!？

《ドゴオ~~~~ン!!》

気付いた瞬間、街の方から轟音が聞こえた。

そこには蒼白く輝く刀を天に掲げる様に構える一刀さんがいた。

それを見た瞬間、私はこう呟いた。

「天の御遣い様

」

????side

たまたま立ち寄った街で食事を三人で摂っていると街が黄色い布を身に付けた賊に襲われた。

私が前線に兵達を連れ、稟と風が弓兵達を指揮し、街への侵攻を阻止している。

だが前線は兵達の負傷により不利になっている。

「くっ、やはり多勢に無勢だったか？」

私以外には兵は負傷者ばかり、そろそろ私の命運も尽きたかな？

「へへっ、そこの嬢ちゃんだけなら俺等がかわいがってやんぜ？」

賊が下卑たセリフを言う。

兵達は私に視線を集める。

それを私は

「ふっ、私を可愛がる？馬鹿も休み休み言え貴様らに可愛がられるぐらいなら、一時でも死線にくぐり抜けたこやつらと死ぬ道を選ぶわ!!!!」

薄汚い下衆どもが、汚らしい言葉をほざくな!!!」

「てめえ！人が下手にでてりゃ付け上がりやがって！！てめえらやつちまえ！！」

『うおおおおおおお！！！！！！』

ふっ、私も大概の愚か者だな。

その道を選べば生き残れるというのに。
だが悔いはない。

「喰らえ！！趙子龍の一撃を！！！！！！」

賊が突っ込んで来ると同時に駆け

「星雲神妙撃！！！！！！」

私の奥義を放つ、すると

《ドガツ 《バリバリバリーー！！！！！！》》

私の奥義の音をかき消す雷鳴が鳴り響いた。

だが私の奥義も効いたらしく前方の敵は後ろへ吹き飛んだが、後方は土煙で見えなかった。

《スッ》

土煙の中に人影が見え、

《ブワァッ！！！！》

煙が晴れたそこには

白の胴着、黒の袴を身に付け、蒼白く輝き、蒼雷を迸らせる変わった剣を胸の前に両手で持ち、顔を二つに分けるように構えた

賊共を稲妻で消し炭にした、蒼雷の鬼神がいた

龍牙神速、鬼刃蒼雷、鬼と龍、共闘す、新たな二つ名

一刀side

俺はあの賊、黄巾党だったかな？

黄巾党の最後尾に突撃している。

「んあ？ なんだあの男？ 突っ込んでくるぞ？」 「なんの真似だ？ まさか俺達に仕掛けて来たんじゃないやねえだろうな。」

黄巾党の奴等は俺の行動に疑問を漏らしている。俺は刀を抜きながら

『示現流の粹、此处に極まれり』

そう唱えると刀の電撃も光も更に激しさを増し、鏢から十文字の蒼い光が俺の眼前に移り、俺はそれを通り抜けた。

「おい！ やつぱりあいつ、俺等と戦う気だぜ！」 「本当かよ！？」
「なんだよあの剣と光は！？」

十文字の紋様を通り抜けた瞬間、俺の目は蒼白く輝き、髪と体は蒼白い電撃を迸らせた。

刀は刀身を覆う蒼雷を纏い、島津さんの大刀と同じ形状になっている。

それを上段に

構え、賊の後方に突撃した。

「ぎゃああああ・・・」 「に、逃げ

かはっ！」

「助太刀感謝する！我が名は趙雲子龍。細かい紹介は出来ないがすまん。貴公の名は？」

背中合わせで自己紹介をしてくる。

やはり名のある武将だと思っていたがあの常山の昇り龍とは、伏龍、鳳雛といい蜀勢と何かあるのだろうか？
取り敢えず

「俺の名前は北郷一刀、あの街の住人に頼まれた。助太刀する。しかしいいのか？ 手薄になったとはいえ、門前に賊はいるぞ？」

それを聞いた趙雲は驚きの表情を一瞬、ほんの一瞬見せたが淡々と話す。

「あの街は周りが水で囲まれており、門は橋が架かっていなければ通ることは出来ぬ。その門も橋も閉じさせた。万一、登ろうする者がいても弓兵に撃ち落とされるのが関の山だろう。」

それってつまり、

「街を襲う奴等は皆こっちに流れてくると言うことか。」

「そういうことになるでしょうな。 だがいけますでしょうか？ 天の御遣い殿？」

やはり驚いた理由はそれか。

「ああ、やってやるさ。二人の為にも、街の人達の為にも、でも君はいいのか？ 一人で戦わないといけないぞ？」

そう趙雲にいうと彼女は

「ふっ、確かに先程は苦戦しておったが兵達が邪魔で大振りの技が出せなかった。それが原因の一つ他はやはり腹ごしらえを途中でやめたのと酒、そして何より……」

「何より？」

「メンマが足りない！！《バァーーン！！！！》」

「は？」

聞いた途端ずっこけそうになったが何とか堪えた。なんだか某兄貴が頭をよぎったが……気のせいだろう。趙雲は未だにメンマと酒との相性を語っていた。早く切り上げる為にこう言う。

「なら、俺が改良したメンマと天の酒を一緒にどうだ？」

「天の酒と天の手法で改良したメンマですと！？」

て叫びながら目を輝かせ、槍を胸に抱えながらこちらを向き詰め寄ってくる。

あれ？ここって戦場だよな？なんだこの空間、ここだけ時間が止

まっつてないか？……気のせいだろう。

「そう、俺の先祖様が酒好きで作り方も作った酒もある。メンマは前の街の職人さんから一壺もらって改良した。それを食いたいなら死ぬなよ？俺もメンマ好きだし酒も好き、メンマもそろそろ良い時期だ。同志に会えたんだ、一緒に楽しく飲もうよ。」

笑顔で言う、趙雲は嬉しさで顔を赤らめ、震えている。

「同志よ！！北郷殿、その約束、必ず守りましょう！！！」

趙雲は俺の手を握り、守ってくれと言ってくれた。

そこに賊達が雄叫びを挙げながら一斉に斬りかかってくる。握られている手を優しくほどこき、耳元で

「君に、神の御加護のあらんことを」

と囁き、眼前に迫り来る賊達を睨みながら

「行くぞ趙雲！！俺達は必ず、約束を果たす！共に酒を交わすために！！！」

「その約束、必ず果たしましょう！！御武運を！趙雲子龍、いざ参る！！！」

俺達は駆けた。

同志との誓いの為、少女二人の願いの為、多くの命がある街の為に

黄巾党頭 side

これは夢だ。

だってあり得ねえだろうが。

でさえ街があった。

情報だと少しの兵、指揮官不在のでけえカモだった。

それなのに街には指揮官二人につええ武将一人、城壁からは指揮官二人の指示で矢の雨が降り、門の前には女の武将が神速の槍をお見舞いしてくる。

兵どもは負傷して大半が下がった。

あと少しの兵と女しか居なかった。

女が最後の悪あがきをしたと思えば、後方から雷みてえな轟音がした。

そっちを見てみりゃ華奢な男が妙な剣を振るい、仲間達が消し炭になっっていた。

ほかの奴等の話じゃ蒼雷を身に纏い、吹き飛ばしたと言っていた。

街より危険だったからそっちを優勢させ、囲ませた途端あの女がその男と合流し、背中合わせになり話している。

街を見れば橋も門も閉じられていた。

男と女がでけえ声で話していたのに仲間達は黙ってみていた。

「なにやってやがるてめえら!!!二人纏めて潰してしまえ!!!」

その一言で全員が斬りかかる。

敵も気付いて仲間達に駆けていく。

だが力の差は大きかった。

女はさつきより動きが良くなり、神速の直槍を仲間達に叩き込んでいく。

男の方は蒼雷を天が割れる程操り、仲間達を次々に灰に、肉塊に変えていく。

頭に血がのぼる、仲間達はもう半分以下になっていた。

「お前が頭だな？我が龍牙の鏑になれ！」

女が俺に挑んできた。

頭を潰し、戦意を消す気だ。

「なめんじゃねえぞ!!!クソアマがぁー!!!」

青竜刀を掴み女に斬りかかる。

女は槍で俺の攻撃を軽くいなしている。

余裕綽々としているが、今に見てる。

仲間達が女の死角に入り矢をつがえる。

《ガキイン!!!》

俺の青竜刀と女の槍がせめぎあう。

仲間達に矢を放つ指示を出した、俺は大きく後ろに飛び、女は自

分の状態を見て、驚きの顔をする。

《ヒュヒュヒュヒュヒュヒュ》

矢が女目掛けて飛んでいき。

「ざまあ、見やがれ!!」

俺は勝利を確信した。

そして矢は

《バリバリバリヤー!!!》

当たる直前、蒼雷に吞まれ灰になった。

「!!!!????」

男が女の背中において、矢を掻き消した。

男がこつちに歩いて来る。

足が自分のものじゃない様に動かない。

(動け動け動け動け動け動け動け動け!!)

男は腰から酒瓶を一つ取りだし、口に含み、剣に吹き掛け、上段に構え、近づいて来る。

やがて男は俺の目の前に立ち、剣を掲げる。

「わるかった!俺達が間違ってた頼む助けてくれ!!!」

命乞いをする。

男はそれを見て言葉を投げ掛けてくる。

「その言葉は今まで何度聞いてきた？ それを聞いてお前はやめたか？」

「っ!?!」

「その様子だと何回も言われ、止めなかったようだな。 貴様のよ
うな屑は俺が裁く。」

「く、くそがぁー!?!」

俺は青竜刀を男に振るった。

『示現流・断岩』

《ドガアアアアン!!!》

青竜刀は男の豪撃で叩き折られ、男の剣は目の前の地面にめり込み動かない。

好機と思い、立ち上がろうとした。

「貴様はその世で今まで殺してきた人達に詫び続ける!!!」

そう男が言った瞬間、めり込んでいた剣の跡から蒼白く光るものが

見えた。

《ピシャーーン!!!》

蒼雷が跡から稲妻が落ちるのを逆にしたように飛び出し、俺を消し炭にかえた。

一刀side

「か、頭が殺られた!!!逃げろ!!!!!!」

賊の頭を灰塵にし、頭を失った黄巾党達は逃げていく。

「やりましたな、北郷殿」

趙雲が話し掛けて来た。俺は

《パアッン!》

趙雲の頬をはたいた。

趙雲は呆然とこちらを見た。

「バカヤロー!なにがやりましたなだ!俺が助けられなけりや君は死んでたんだぞ!? 君は同志の約束を裏切る気か!? 自分は奴等に劣っていないと慢心しているのならそれは大きな間違いだ!!! 人は安心した時が一番隙だらけになる! その証拠があの時だ!」

そう叫ぶと趙雲は俯き、

「も・・・申し訳ありませんでした・・・」

小さく震え、涙目になりながら謝罪の言葉を述べた。
俺は、

《ギョツ》

「北郷・・・殿？」

「もうあんな無茶はしないでくれ。俺は君を失いたくはない。
だから頼む、生きてくれ。」

その震える体を抱きしめ、願いを言い放った。
それを趙雲は、

《ギョツ》

涙を溢しながら、俺に抱き返してきた。

「北郷・・・殿、私の真名は星と言いますっ。星と・・・お呼びっ、
ください。」

嗚咽混じりに真名を預けてくれた。

俺は彼女の顔をこっちに向けさせ涙を拭い、呼んだ。

「これからも、どうか生きてくれ。『星』」

いうと星は返事の変わりに更に抱きしめ俺の胸の中で叫びながら今

までの恐怖を吐き出す様に泣き出した。

俺はそれを無言で、星の頭を子供をあやす様に撫で続けた。

黄巾党には恐れられる噂がたっていた。

蒼雷を操り、電撃を纏った変わった剣を持ち、天を割る技を持つ、
黄巾党一の大男を灰塵にした

蒼雷の鬼神の噂が

暫しの休息、二人の策士、龍と鳳の願い

諸葛亮 side

私達は未だに信じられなかった。

街が守られた。

たった一人が参戦しただけで。

あの千は下らない数の賊達が我先にと逃げ出した事を。

雛里ちゃんも商人のおじさんも驚愕している。

「と、とりあえず嬢ちゃん達。街に戻ろう。皆が心配だ。」

そう言いながらおじさんは馬を村に走らせた。

「・・・・・・・・・・」

私達は不安だった。

あの優しい一刀さんが人を・・・賊だと言っても同じ人を殺める事を出来るのか。

殺めた後、一刀さんは普通でいられるのか。

一刀さん位の年齢の人がやれば、快楽に堕ちる、我を失う、などが多い。

馬が一刀さんがいる門前に近づく。

「あ、三人共、無事だった？」

でも私達に気付いた一刀さんは先ほどと変わらない笑顔を私達に見

せてくれた。

腕の中に街を守っていた武人さんを抱きしめながら・・・抱きしめながら？

「あによ、一刀さん？ なぜしょの人を抱きしめてりゅんでしゅか？」

「諸葛亮噛みすぎだつてば、えくと、簡単に言えば《ギユツ》星？ どうした？」

「北郷殿つ、後生の頼みですつ。 私の失態をあの様な幼子くおさなごくに露呈しないでください。 あなたは私を恥ずかしさで殺す気ですかつ？ 《ヒソヒソ》」

「あゝ、確かに。 《ヒソヒソ》 ごめん諸葛亮、星の頼みなんだ。 言えないよ。」

「あによ・・・星というのは真名でしょうか？」

後ろから雛里ちゃんが一刀さんに質問した。 確かに一文字で名前なのは真名だけだからでしょう。

「ああ、ごめん。 この娘は趙雲子龍。 偶々、寄った街に賊が来たから街を守ってくれていた人だよ。 後二人連れがいるらしい。」

「そうだったんですか。 ありがとうございます。 趙雲さん。」

「・・・・・・ありがとうございました。」

私達はお礼を言いましたが趙雲さんは手をヒラヒラさせて「気にす

るな」と言っている様でした。

「あによ、一刀さん……」

「ん？　なんだ鳳統？」

「？」

雛里ちゃんが何か一刀さんに言いたそうです。
どうしたんでしょう？

「街を守っていただいてありがとうございます。　お礼として私の真名を預かってくれませんか？」

「「え？」」

私と一刀さんの声が重なった瞬間でした。

一刀side

鳳統が真名を預かってくれと言ってきた。

諸葛亮は俺と同じく驚いていた。

でも少ししか話さなかったが、彼女は内気なのは嫌でもわかった。そんな彼女が俺に真名を預かってと言ってくれた。

あまり慌てた様子ではないが内心慌てているのは目を見たらわかった。

ならば彼女のその誠意を無下にするのは酷い。
だから一度確認を

「鳳統。 いいのか？」

「ひゃい！私の真名は雛里でしゅ。 そう呼んでくだしやい！」

力強く、期待の目で言ってくれた。

だから俺は

「ありがとう、大切に呼ばせて貰うよ。 よろしく、雛里。」

「ひゃい！ よろしくお願いしましゅ」

「ちょ、ちょっと待ってくだしやい！」

「「へ？」」

突然、諸葛亮が声をあげて待ったを言うてきた。

目を潤ませ、顔を赤くして。

はて？

「ひ、雛里ちゃんずるいでしゅっ、わ、私も一乃さんに真名をあじゆけたいです！ 私の真名は朱里です！ そう呼んでくださいっ」

なんと諸葛亮までもあずけてくれた。

彼女も雛里よりは積極的だが、噛みすぎるぐらい人見知りだ。

しかし彼女も勇気を出して預かってくれと言ってくれた。

だから雛里の時のことはせずに言った、や・・・だってさ、呼ばなかつたら今にも泣き出しそうなんだぞ？

そりゃ呼ばなきゃいけなさそうじゃないか。

「うん、大切に呼ばせて貰うよ。ありがとう、朱里。」

「《パアツ》ひゃい！」

「（うお！ いい笑顔）」

諸葛りよ・・・朱里は輝く笑顔で受け取ってくれた。
雛里も共感しているのだろう、笑顔だった。

《ガツコン！ギギギギギギギ》

話のきりのいいところで街の橋と門が開き、入り口に街の人達が歓声をあげながらこちらに「さあ、どうぞ」と言わんばかりの手招きをしている。

とりあえず商人の親父さんを先に行かせ、星を腕の中から解放を・

「すうー、すうー」

寝ておられた。

えくと、まさか泣き疲れたのか？

・・・起こすのも可哀想なので背中と膝裏に手をかけ、所謂お姫様抱っこで運ぶ。

胸が強調される格好なので視線は前に向けて。

・・・星は何故か笑んでいたが。

朱里と雛里はその様子を何故か羨ましそうに見ながら後ろをついてきた。

一乃 side in 街

街に入ったら歓声と畏敬の視線が注がれた。

やはり桃香達の街と同じで俺を迎えてくれた。

だがおかみさんの様な行動をする人は《グイツ》

「あ、あの〜？」

「天の御使い様、街を救っていただきありがとうございます。

私は水鏡、朱里と雛里が通う私塾の教師です。疲れている様なので私の私塾の空き部屋を使ってくれませんか？ 朱里と雛里が話がある様なので」

いきなり腕を胸に埋められ、困惑したが水鏡と聞いて驚いた。

だがその申し出は願ってもいなかったのでありがたく頷いた。

え？星をお姫様抱っこしているのに腕を胸に埋められるのって？

街に入って聞こえてきた歓声に目を覚まし、連れの二人を迎えに行きましたか？

「でもいいんですか？ 天の御使いだと言っても白い煌めく服は着てませんよ？」

「朱里と雛里があなたの荷物の中に白い煌めく服を見たらしいので大丈夫です。それに街を救っていただいた方を疑うのは失礼ですよ？」

ああ、確かにと思っていると、二人で荷物をパタパタと走って持ってきてくれている朱里と雛里が視界に入った。

水鏡さんに腕を解いてもらい、二人に近づきスツと荷物をとり肩にかけ、二人の頭を優しく撫でた。

二人はくすぐったそうに笑顔を見せてくれた。

そうこうしているとまたもやお礼に宴の話が上がったが「皆、疲れしているようだし怪我人もいる。また今度にしなにか？ 俺はこの街に少しの間留まるから」というと街の皆は俺のここに留まるという言葉に喜び、了承してくれた。

水鏡さんと朱里、雛里に案内してもらい部屋に入り「食事を持ってきますので少し待っててください」と三人共出ていった。

「さて、とりあえず服を着替えようか」

と呟き、制服を出し、着替えて待っていると

「北郷殿、少しお話があります。入ってよろしいか？」

と星の声がしたので扉を開け、星が入り、後ろに連れの二人を連れてきた。

入ってきたのは

ノースリーブに眼鏡のキリツとした女性と頭に変わった人形を乗せ、
飴をくわえた少女がいた。

「はじめまして天の御使い殿、私は郭嘉、兵を指揮していた一人です。そしてこつちが」

「・・・グウ」

「寝るな！」

なんだか漫才みたいだな。

「おお、おはようなのですよ。私は程イク、兵を指揮していたもう一人なのですよ」

やはりこの世界の有名な将は皆、女性なんだなと改めて感じた。
自己紹介してくれたのでこちらも

「はじめまして、こつちの世界の言い方では、姓が北郷、名が一刀、字と真名は無いから好きな様に呼んでくれ。」

「そうなのですか？ では一刀殿、私達を助けて頂きありがとうございます。ございました。お礼と信頼の証に私達二人の真名を受け取って頂けませんか？」

またもお礼に真名を・・・か。

なんだか簡単だな、だけど俺に真名があつたら許すだろうな、しかも信頼の証とは、と思ったので俺からも確認を

「いいのか？ もしかしたら天の御使いっていうのは嘘で、賊と変

わからない悪人の化け物かもよ？」

「そうだったら私達の目が節穴だっただけでしょ？」

「ですね〜」

な、なんと潔い、しかしそこまでいうのなら

「わかった、二人の目が節穴じゃあないってところ、証明してやる」

「ほお、ならば私達もその言葉を信頼しましょう。私の真名は稟
です。一刀殿」

「風は風なのですよ〜、お兄さん」

「ありがとう、少しの間、よろしくな、稟、風」

「こちらこそよろしくお願いいたします。一刀殿」

「よろしくなのですよ〜」

「よろしく頼むぜ、兄ちゃん」
ふ、腹話術かよ！と思っていると三人が俺の分だけの食事を持って
きた。

先に食べてもらい話が終わってから食うらしい。
とりあえず食事を

「《もしやもしや、んぐんぐぐくっ》う、うまい！」

「「ほんとでしゅか!?!」」

「うん、うまいよ。ご馳走様でした。もしかして二人が作ってくれたのか？」

「は、はい……」

「ありがとう、美味しかったよ」

二人の頭を撫でた。

水鏡さんと星はなぜかニヤニヤ、稟と風は仕方なさそうに見ている。

「で？ 話って？」

「二人が御使い様の役にたちたいらしいんです」

「俺の役に？」

「あによ、一刀さんはこの世界に来て、なにか困ったことがあればと思ひましてっ」

「《コクツコクツ》」

心が暖かくなった。

真名を預けたからと言ってもまだ時間はたっていないのに俺のことを気にかけてくれていることに。

困ったこと……か……あ、じゃあ

「二人は文字は書ける？」

「はいっ、できましゅっ」

「じゃあ、ここにいる間、字を覚えてくれないか？」

「字をですか？」

「うん、天でも勉強はしてたんだけど、この世界の字はわからないんだ、いいかな？」

「はい、私達が一生懸命教えます」

「ありがとう、じゃあ明日からお願い。そろそろ寝るな？」

「」「」「お休みなさい」「」「」

五人共出ていったので俺も、明日の為に休もう。

「北郷殿、酒は？」

「また今度にな、星も早く寝なよ」

夢の中に、さあ行こう!!!

「では私も寝かせていただきます。北郷殿、失礼」

「あいや待たれい、なぜ俺の寝台に？ 自分の寝台に行きなさい」

「私はまだ北郷殿の胸の中で寝たいのですが、同志の願いを受け入れてくれませぬかな？」

俺を自分の方に向け、寂しそうな目を向けてくる。

なんだろう、最初の印象が大分違うな。
しかし彼女も恐怖し、俺の胸で泣いたのだからまだ拭えていないの
だろう。
なら

「はあ、わかった。今回だけだぞ」

「恩にきます」

そう言い、俺の胸に顔を埋め、少ししたら寝音が聞こえてきた。
そんな彼女の頭を撫でながら俺も夢の中に落ちた

さて明日から頑張ろう。

暫しの休息、二人の策士、龍と鳳の願い（後書き）

バサラの島津を究極でクリアしたし、技も覚えたので投稿しました。

次回は拠点です。

お待ちください。

拠点・巻（前書き）

他作者様方と違いキャラごとに分けずに書いています。

拠点・壱

朱里と雛里は今、一刀の部屋の前にいる。

少し恥ずかしくもあり、一緒に勉強するといふことと嬉しくもあり、顔を赤くしながら。

「ひ、雛里ちゃんっ、い……行くよ!?!」

「うん……頑張ろっつ、朱里ちゃん!」

意を決し、扉を二度叩く。

「「?????」」

だが返事はない、おかしく思い扉を押すと簡単に開き、中を覗くと寝台に膨らみがあった。

「か……一刀さくん?」

呼び掛けたがやはり返事がない、よく見てみると水色の髪が見えた。

「はわっ!?! せ……星さん!?!」

「あわわ!?!」

「ん……ふわぁ……ひゅひゅひゅ……おおっ二人とも、どうした?」

「な、何で星さんが一刀さんの寝台に寝てりゅんでしゅか!?!」

「そ……そうですね、なんで」

「ふふっなに、北郷殿に頼み込んで寝かせて頂いただけだ。なあ北郷ど……の？」

「？ どうしたんですか？」

「？」

星が隣を見るとそこには呼んだ人は居らず、制服だけがあった。因みに星達五人は真名を許しあっている。

「はわっ？ 一刀さんはどこに？」

「わからぬ、だが剣も胴着もないところを見ると鍛練か町に出掛けられたのだろう」

「じゃあ、捜しに行こう朱里ちゃん」

「うん、そうだね雛里ちゃん。星さんはどうしますか？」

「私はまだ眠らせてもらおう、ではな」

そう言いながらまた蒲団を被り、静かになった。

二人は静かに部屋を出た。

星は蒲団の中で制服を抱き締めていた。

顔が完全に破顔するほどに。

だが制服が汗でビシヤビシヤなのが違和感だった。

「はっ！ やっ！ せいっ！」

一刀は今、町外れの川岸に来ている。
そこで型を合わせながら一心不乱に刀を振っている。

「また・・・あの夢か」

一刀は桃香達の村で見た夢をまた見てしまい、汗でビシャビシャだったのでどうせなら鍛練をしてから川で汗を流そうと思い、川に来ている。

「そついえばじいちゃんが言ってたな」

祖父が言っていたことを思い出した。

『いいか一刀、もし人を殺したりしたら必ずぶつかる壁が現れる。僕は戦争に出ている時、先日敵を殺した仲間が叫びながら起き上がって震えていたんじゃ。あとで聞いたら昨日殺した奴が俺を殺す夢を見たらしい。僕も敵を殺した次の日の夢に相手が現れ同じ事が起こった。それは容易く克服できるものではない、もし一刀がその夢を見たら僕と同じように頑張れ。まあお前が人を殺したりはせんと思うがな』

「じゃああれはこの世界で殺した奴らの怨みか」

じいちゃんに申し訳がたたないなと思いながら、刀を布で拭い、川に入ろうとした

「あら？ 御遣い様、どう致しましたのですか？」

「？ ああ水鏡さん、いえただ鍛練を終えて汗を流そうかと」

努めて普通に返したのだが水鏡さんは険しい顔をして

「なにかお悩みでもあるのですか？ 顔に元気がありませんよ？」

「いえ・・・何もありませんよ？」

「御遣い様、あまり一人で抱え込まないでください。私達は貴方の味方です、どうか頼ってください」

流石は水鏡、全てお見透しか。

確かに頼つてと言うのに頼らないのは信頼していないと言っているものだ。
なら

「実は・・・」

俺は全てを話した。

夢を、自分の悩みを、すると水鏡さんは

「確かにそれは容易く克服できるものではないでしょう。しかし貴方は彼らを殺めたことを悔いていますか？」

「・・・いえ、彼らを殺めなければ街は守れなかった。殺めたのは俺の意思、そして俺の信条の“やりたいと思った事をやる”というものを貫いた。悔いはありません」

そう言つと水鏡さんは穏やかな顔を向け

「ならば貴方の心を、信条を貫き通してください。私達はあなたを信じます」

言いながら俺を胸に埋め、頭を撫でてくる。

少し恥ずかしくなったが母の様な行動に安心して少しだけ甘えさせてもらった。

「あら、汗でビシヤビシヤ。早く流さないといけませんね」

「え？」

水鏡さんが言った瞬間、嫌な予感がしたが時既に遅し、胴着は脱がされ袴を・・・ってちよつとちよつと!?

「水鏡さん!?! いいですって自分でしますから つてなんで服脱いでるんですか!」

「あら、汗を流すのを手伝う為ですよ?」

「いいですって!?! ちょっと早く服着てください! 後ろ向いときますからっ」

そう言いながら後ろを向く、だが

「えいつ」

「え？ キャーーーーー！！！！？？？」

袴を乱暴に脱がされ、女性の様な悲鳴をあげてしまった。
パンツ死守している

「わ・・・わかりました、よろしくお願いします・・・」

「はい では流させて頂きますね」

そう言いながら川に一緒に入り、汗を、体を洗われ子供に戻った気になった。

・・・恥ずかしい

これを読んで変な想像をした奴は今すぐ窓かベランダもしくは屋上から飛び降りろ、今すぐだ！

『サラダバー！』

・・・なんか誰かが飛び降りた気がしたか気にしたら負けだな、
うん・・・

洗ってもらい「私も流してもらえますか？」と言われ仕方なく洗い
返し、服を取りに行ったが制服は星が抱き締めており、持ってきた
服を着ることにした。

「御遣い様ー！」 「御遣いのにいちゃ〜ん！ 遊ぼ〜！」

「御遣い様！ ご飯食つてきませんか!？」

今、町に出てきており昨日の商人のおやじさん、遊んでいる子供達、
飯屋のおふくろさんなど、 おやじさんとは品の売れ行きを話
し合ったり、子供達に肩車をしてあげたり、かけっこをしたり、飯
屋で天の料理を作って食べ合ったりした

「おやおやお兄さんは街の人達に大人気ですね〜」

「それほど一刀殿は街の方々に信頼されているのでしょ〜う」

「やあ、稟、風何してるの？ って風？ 君の後ろの行列はなに？」

後ろから声が聞こえ、振り向き話を始めたが風の後ろの猫の行列が
目立っていたので聞こうとしたら、猫達が目を光らせ俺、目掛けて
殺到して・・・ってうわあー！！！！？

「わわっな、なんだなんだ？」

「おやおや猫達もお兄さんに魅了されたらしいですね」

「一刀殿は生き物全てに好かれる体質なのかもしれないわね」

「好かれると言えば、昨日星ちゃんが帰って来ませんでしたがお兄さんなにかやらかしましたか？」

猫達に足のいたるところに匂いを付けられたり、登られたりしているなか風が質問してきた。

答えようとしたとき

「星殿が一刀殿に抱いてもらいたいと願い、一刀殿は星殿を抱き締め甘く囁き星殿の唇を・・・ブプププッ！」

稟がなにかブツブツ呟いていると思えばいきなり噴水の如く鼻血をだし、倒れた

「り、稟ー！ー！！??？」

「ほら稟ちゃんトントンしますよーはいトントン」

「うっずばない」

だが稟は首の後ろ辺りを叩かれただけで起き上がりフラフラだが立っている

「きやつ！?」

「稟ー！」

だが足がもつれ、こけそうになったのをお姫様抱っこで受け止めた
「稟、足が覚束ないなら余り動き回らないこと、 おふくろさん椅子貸してもらえる？」

「はいよっ」

おふくろさんに椅子を貸してもらい、 稟を座らせ、ポケットからティッシュを出し鼻を拭い、鼻に詰めさせ

「気分が戻るまで座っておくこと・・・あっ風、後頼む、用事ができた」

処置を終えた時、前の方から朱里と雛里がパタパタ駆けてきている。

「朱里、雛里ごめんな。勝手にいなくなって捜してくれてたのか？」

「ひゃいつ、 お勉強をしに行っただんですが、居なくて捜しに来ました」

「でしゅ・・・・・・・・」

「ありがとう、今から行くよ。 風、稟じゃあな」

「はい（なのですよ〜）」

二人にことわり、塾に戻った・・・・・・・・水鏡さんが妖艶な笑みを浮かべていたが無視する方向で

その日、字の書き方は漢文だったので復習だと思い、すらすらと思
い出しながら教えてもらった。

「ただいま」

「おかえりなさい北郷殿、さあ、酒を」

帰ってきて早々酒の話をされた。
まあ約束だしな

「はいはいちょっと待ってて」

「はやくして下されっ」

急かす星を抑え、酒とメンマを出し、杯を俺と星の前に並べ酒を注
ぎ、メンマを小皿に乗せ、

「乾杯」

杯を交わし飲み干す、すると

「《ポロポロ》」

「うおっ、星どうした？」

なんと星は泣き出し震えている。
ので星の肩を揺するうとしたら

「《ガシッ》うおっ！？ 星？」

「北郷殿！！ この様な酒は生まれて初めてです！ 感動致しました！」

どうやら感動の余り泣いてしまったらしい。

手を掴まれなんだがくすぐったいが悪い気にはならない

「落ち着いて星、 まだメンマ食べてないよ？ 一緒に楽しもう。な？」

「はいっ、ぐすつ頂きます」

星は皿に乗ったメンマを摘まみ、酒を飲む美味しい美味しいと言いながら俺も嬉しくなり、笑顔で飲み明かした

「私もご相伴にあずかっていいですか？」

途中から水鏡さんも混ざり酒もメンマも無くなり二人共酔っており、いきなり倒れ、眠りに

「北郷殿~~~~！！」 「御遣い様~~~~！！」

「きゃあ~~~~！！！！」

と思いきや、飛び付かれ寝台に押し倒され逃げようと思ったが二人共もう眠っていたので

「お休み二人共」

俺も眠りに就いた

翌日、起こしに来た四人が衣服が乱れている俺達を見て、朝っぱらから絶叫の嵐、鼻血の雨が降ったのは言うまでもない

悲しき別れ、龍との闘い、新しき旅（前書き）

今回の話のなかにはオリワザ、歴史改変があります“ 外史なんだから仕方ないか” という方だけ進んでください

悲しき別れ、龍との闘い、新しき旅

街での生活は一週間にわたった。

朝起きては鍛練に向かい、終えて川に入ったり（朱里と雛里に裸ハパンツははいてます）を見られ絶叫されたり）

昼には風と稟と飯を食ったり（当然、猫の行列に囲まれたり、足に匂いを付けられたり、頭に乗られながら・・・時々、稟が鼻血吹いたりしたが飯には被害無し、鼻血の処置の仕方も慣れた）、朱里と雛里にクッキーを作ってお茶をしたり。

夕方は朱里と雛里と水鏡さんと一緒に勉強（解らない所を考えていると二人はなにかポーツとしながら、水鏡さんは母の様な表情で俺を見ていたり）

夜に星と水鏡さんと少しずつ酒を飲んだり（時々、襲われそうになったがからかっていただけだった・・・よな？）
していたらあつという間に一週が過ぎた。

「じゃあ水鏡さん、お世話になりました」

俺は私塾の前に立ち、水鏡さんと教え子達、朱里と雛里と向き合
いながら頭を下げながらお礼をしている。

「はい、この一週間。私達はとても楽しく過ごさせて頂きました。
さっ、皆もお別れを言いなさい？」

水鏡さんがそう言つと教え子達は泣き出し、俺に抱きつきながら

「御遣い様〜！ 絶対・・・ぐすつ絶対また来てね！」 「お兄ちゃん！ ひつくまた、また一緒に遊んでね！」 「ぼくも・・・御遣い様みたいに、強くなる！」

などなど別れを惜しむ言葉をかけてくれた。
俺は

「《ガバツ》絶対・・・絶対また来るからな！ 皆も勉強頑張つて、病気にならずに、元気でいるんだぞ！？」

感極まり、涙を頬に流しながら、子供達に約束の言葉を言い、抱き締めた。

すると子供達は

『うえ〜〜〜〜ん！！！！』

更に泣き出し、ぎゅ〜と抱きついてきた。
俺は子供達が泣き止むまで抱き締めた。

子供達が泣き止み、 水鏡さんが連れていき、また戻ってきた。

「御遣い様、一つお願いがあります」

真剣な眼差しで言ってきた。
なので俺も

「はい、俺にできることなら言ってください」

「では・・・朱里、雛里！」

「「はいっ」」

「え？」

水鏡さんが朱里と雛里を呼んだ。

二人は真剣な顔で俺を見つめている。

「ふ・・・二人共？」

「あの・・・えっと・・・」

「その・・・でしゅね・・・」

二人はかなり言いにくそうだった。

だが水鏡さんが「ほらっ頑張っつて」と二人の背中を押し、俺の目の前に出した。

二人は俺を見上げ、何度か「はわっ」「あわっ」と目を逸らしたがなにか意を決し、俺に言った。

「わた、私達もいつ、一緒に・・・」

「その・・・一緒に・・・」

だがまだ決められていないらしく、言い止まってしまった。
それを

「二人共、深呼吸しよう。 はい吸って〜」

「す、 すーっーっ」

「吐いて〜」

「はあ〜〜〜」

「よし、 じゃあ改めて」

息を整わせ再度聞く。
すると

「私達も一刀さんの旅に連れて行ってください!!」

「・・・えっ？」

聞いて驚いた。

だって二人は文官として働く為に勉強してきたはず、なのに天の御遣いだが一国の王でも、 將軍でもない俺に連れて行ってくれと言っている。

水鏡さんを見ると

「二人は御遣い様と一緒にいたらしいのです。 どうですか？」

くすぐったい気分になった。

二人は期待の眼差しで見ている
………だけ俺は………

「二人共………ごめん。その願いは聞き入れられない」

「「え………」」

三人共固まった。

二人は今にも泣きそうだ。

「な、なんでですか！？ わ、私達のこと嫌いなんですか！？」

「一刀さん、なんで！？」

「二人共、落ち着きなさい。……御遣い様、なにか理由があるのですか？」

涙を堪えている二人を鎮め、水鏡さんが聞いてくる。

「ああ、まず俺は二人のことは好きだ。これは当然だ」

「じゃあなん」

「だからこそだ。俺の旅の理由は“この世界を知る”為だ。だから二人には危険に巻き込みたくない、巻き込んだら二人を守れる自信はないんだ」

「いいんですっ、私達はその覚悟をもつ」

「いいわけあるかっ!!」

俺は叫んだ。

三人共また固まってしまった。

「俺は二人を失いたくない。君達は軍師として働くべきだ。俺はただの旅人、二人の損にしかならない」

「でも私達は一刀さんの役に立ちたいんでしゅ」

「《コクツコクツ》」

二人は俺の為にとやってきた。ならば

「じゃあ、二人にはある人の役に立つてくれないか？」

「「えっ?」」

「その方はどなたなのですか？」

水鏡さんが聞いてきたので

「その人は劉備。俺がここにきて初めて真名を許してくれた人だ。彼女はこの世を憂い、二人の義姉妹と旅に出ているんだけど、そろそろ義勇軍を募ってると思う。二人にはその文官になってほしい」

すると二人は

「その方の役に立てば一刀さんは喜びますか？」

「ああ、もちろん。俺に付いて来るより身の安全も、生活も大丈夫だと思う。どうか？」

「一刀さんが望むのなら・・・わかりました、雛里ちゃん。いいかな？」

「・・・うん、確かに劉備って人が義勇軍を募ってるって聞いたことがあるから、いいよ朱里ちゃん」

二人は頷いてくれた。

ただ二人はなにか悲しげだった。
なので

「水鏡さん、紙を一つ取ってきてくれますか？ 推薦状を書きたいので」

「はい、では行ってきます」

水鏡さんに頼み、三人だけになった
じゃあ

《キュッ》

「はわっ？」「あわっ？」

その俯いている二人を抱き寄せ、言った

「二人共、ごめんな。まだ俺は仲間を失うことが怖い、だから二人には生きていて欲しい。だから・・・二人共・・・元気で」

そう言うと二人は俺の胸にさらに顔を埋め、泣き出した。

俺はそれを、ただただ受け止め頭を撫で続けた。

嗚咽が治まったところ、水鏡さんが戻ってきたから推薦状を書き二人に渡し、ともに街を出ることにし

「御遣い様、少し」

だが水鏡さんに呼ばれたので二人を先に街の門前に行かせた

「なんですか？」

「御遣い様、あなたはあの夢をまだ見ますか？」

「・・・はい、たまに見ます」

「あれはまだ覚悟を決めていない新兵がよく起こすものらしいのです。あなたはまだ覚悟を決めていないのでしょうか。それでも旅を続けますか？」

確かに人を殺すのは一生慣れない、いや慣れてはいけない。

まだ俺は・・・覚悟が足りないんだ、 さつき一人に言った仲間を失う覚悟とかを。 だけど

「それでも旅を続けます。 俺は天の御遣い、 人の死を、 命の儚さを知らなきゃいけない。 そして・・・」

「そして？」

「この腐った世に、 戦いに関わるために・・・覚悟を刻みます。 自分の命を、 仲間の命を失う覚悟を、 まだ俺には無理だけど必ず、 刻んでみせます!!」

決心する。

それを聞いた水鏡さんは

「それでこそ御遣い様です。 私達はあなたを信じています」

「はいっ！ 期待に添えるように頑張ります!!」

そう言うと水鏡さんは

「あなたに星々の加護のあらんことを《チュツ》」

「!!!??」

俺に軽いキスをした。
恥ずかしくなったが、俺の為に願ってくれた。
ならば

「ありがとうございます！……………さようならっ」

俺は母に別れを言う気分になり、泣きそうになったが堪えて二人を追った。

「ふふっ可愛い方。やはりもったいなかったわね」

水鏡は少し笑いながら言っていた。

「水鏡先生？ はやくお勉強……先生、泣いてるの？」

「《スツ》いいえ、大丈夫ですよ？ さあ、お勉強しましょうね」

水鏡は後ろから教え子に呼ばれた、目辺りを指で払い、振り向き、毅然に振る舞っていた。

しかし目は赤く、顔には涙の跡があった。

「二人共、お待たせ……あれ？ 星、稟、風、君達はなんでここに？」

門前に来てみれば三人がいた。

聞いてみると

「私達も路銀も貯まったのでそろそろそれ去ろうかと思いましたが」

「そうなんだ。三人はどこに行くの？」

「私は稟達と別れ、仕官先を探しに」

「私と風は曹操様のところに行こうかと」

「曹操………か」

あの霸王はこの世界ではどのようなだろう？

やはり高貴で誇り高いのだろうか？

……なんだか興味が出てきた。

「稟、風、俺も付いていっていいかな？」

「一刀殿も曹操様に仕官に？」

「いや、曹操は天では有名なんだ。だから一目見とこうかとね」

「しかし北郷殿、この様なか弱き少女らを護衛無しに送り出すと？」

確かにそれが心配なんだよなあ……あ

「星、二人を護衛してくれないか？」

「ふむ………この者らはどこに？」

「俺の仲間の所に仕官してもらいたくてさ、出来れば星にも仕官して欲しいんだけど……」

「お願いのポーズで言った。すると」

「……いいでしょう。承りました」

「本当！？ ありがとう」

「しかし一つ条件があります」

「ととつ、な、なに？」

「少し口ぐもったが聞いてみた。すると星は槍を抜き」

「私と真剣勝負していただきたい。勝ち負け関係なしにあなたと闘いたいです。よろしいかな？」

「真剣な目で、武人特有の気迫を出しながら。その目には期待と目標を見つけた色が見えた。ならば俺は」

「わかった。門の外に出よう」

俺も真剣に答え、門番の人に開けてもらい街をでた。

場所は街の少し手前

審判に稟

風、朱里、雛里は見守っている

「北郷殿、参りますぞ？」

「ああ、来い星・・・真剣勝負だ！」

「始め！！！」

稟が合図を出した
俺達は

「示現流、北郷一刀」

「趙雲子龍、いざ」

「「参るっ！！！」」

同時に疾駆し

《ガキヤアンツ！！》

《ピッ》

上段から降り下ろした刀は星の槍の突きで二股に分かれている槍に挟まり、星の頭寸前で止まっている。

槍は俺の頬を斬りつけ、顔をよこぎった。

「……ふっ!!」

星は槍を回転させ、刀ごと俺を放り飛ばした。

着地し、正面に構え、星を見た。
すると

「北郷殿、蒼雷の力を使ってください。本気のあなたと闘いたいと申したでしょう」

どうやら蒼雷を使わなかったのを怒っているらしい。
なので理由を述べた。

「あの力は使わない……いや使えないんだ。蒼雷は沢山の敵を一掃することができるが、俺が念じなければ発生しない。」

「それは北郷殿が本気で闘うまでも無いと考えてらっしゃるからでしょうっ？ それは武人への侮じよ」

「俺は自分自身の力で勝ちたい。蒼雷は俺の先祖から受け継いだ力。君が本気で勝負したいように、俺も素の力……俺の実力で勝ちたいんだ！」

俺は何かを守る時意外、力を使わない。

水鏡さんが教えてくれた覚悟の一つとして、刻んだ

「わかりました。確かに自分が努力しないで手に入れた力を我が物顔で振るうのは、愚か者の行い。では本気で参ります」

「ああ、俺も本気だ」

《ジリッ》

お互いに自分の間合いに入ろうとする。
が俺と星とではリーチが違う為入りにくい。

「（星は速さと技重視の武人。必ず入る隙を見つけないければ返り討ちは免れない。・・・駄目だ、まったく隙が無い」 「（確かに蒼雷の力を使わなくとも隙はないな。あれほどの力を使うための地力はお持ちのようだ。しかし睨み合っているのは埒があかな・・・ではっ！）」

「はぁーーーーーっ！！」

「っ!?!」

星が先手を打ってきた。

間合いに入り、構え、そして

「はいっはいっはいっはいっはいっ！！！！」

神速の連突を打ち込んできた。

それを

『示現流・連獄』

「はああああああつ!!」

《ガキインガガツギヤリヤツギイン》

《ピピッ》

星に負けない程の速さで刀を正面に連続で降り下ろし、叩き落とす。だがやはり手数では勝てず、何発か打ち漏らし、腕や太股辺りの道着が破れている。

「流石ですな。しかし速さでは私の勝ちのようだ」

「確かに速さでは敵わないな。・・・でも」

「? でも? 《ピキッ!》 痛っ!!??」 《カラントツカラン》

星は槍を握れず落とした。
なぜなら

「力では俺の勝ちだな」

「っ 確かに」

星の手は真つ赤になり、内出血が起こっている。
手のひらに赤い点々ができている。

「やれやれあの速さでこの威力。流石は鬼神といわれるだけ
ありますな」

そう言いながら槍を握るのは流石だ。
じゃあ

「次は俺の番だ！　いくぞ！！」

「応！！」

『示現流・瞬激』

俺は低く、されど長く飛び、刀を地面に叩きつけた。
しかしスツと避けられた。

「ふつ、その様な大振りな技、容易く避け」

「まだだっ！！」

『示現流・浮舟』

刀の持ち手を下に回し、持ち上げる様に振り上げ

「なにっ！？《ギャリヤツ！》くっっ！」

「はぁー！ーっ！」

右から左に横一回転し、横一文字に大きく斬り

「くあっ！？《ドカンッ》

防御を崩した星にさつきとは逆方向に払い、（因みにこの払いは『示現流・六進』という技を突進なしにしたものと同じ）星を後ろに吹き飛ばした。

「くっ《ザアーーーーッ》」

しかし星は何とか踏ん張り、止まった。

「なんとという剛撃。私ではもう受け止められませぬな。ならば！」

そう言うと星は黄巾党達を吹き飛ばしたあの技の構えをした。

「これで終わりにしましょう。では参ります！」

「応！（あの技、試してみるか）」

俺は刀を鞘に納め、左手で鞘を持ち、右手を柄に添え、右肩をつき出す。

所謂、居合いの構えだがこれは示現流のある技を改良したものだ。皆、驚いた顔をしているが星はキツと真剣な顔持ちになった。そして

「星雲神妙撃!!!」

「示現流・撃昌・真!!!」

《キィヒィー〜ン》

星の流星の様な突きと、俺の蒼い閃光の様な居合い斬りは一瞬にして交差し、俺の刀は星の首元に止まり、星の槍は根元深くまで俺の首を捉えていた。

「・・・はははっ」

「・・・ふふふっ」

「「あはっはっはっはっはっはっはっはっはっ!...!」」

自分と同じ力量の相手ができ、二人一緒に嬉しさで笑った。
空高く声が響くほどに

「じゃあな星、二人を頼む、また会おう。朱里も雛里も頑張っ
てな」

「「「はいつ！！！」「」」

「そつだ！ 星、あっちについて推薦状を渡す時、これも渡して」

「？ おお！ 天の酒ですか！？」

「そつだ。でも劉備達に渡す前に飲むなよ？」

「《ギクツ》ハハハ、ダレガソノヨウナコトヲシマスカ、ワタシヲ
シンジテクダサレ」

「・・・朱里、雛里、これを劉備に渡してくれ。絶対星に渡す
なよ？」

「「はいつ、わかりました」」

「くっ」

「じゃあ、お別れだ」

「「一刀さんっ、私達の頑張ります！」「」ああ、頑張れ」

「北郷殿、また手合わせ願います」

「応、俺も更に強くなつとくからな、がんば」

「では《チュツ》」

「くくくく!!!!????」

星に頬にキスされた。

朱里と雛里は顔を真っ赤に、風はなにか不機嫌そうに、稟はまたブツブツ吹き鼻血を　　ってギャーーーー!!??

「稟ーーーー!?　大丈夫か!? トントンするぞっ?」

「ず、ずびばぜん」

「むっーーーー!!」

風が更に不機嫌に、星達は「さようならーーーー」といつの間にか行ってしまった。

「さて、行こうか」

「はい(なのですよ)(」

俺は新しい仲間を作った。

別れ、また会う約束を交わした仲間を。
新たな旅の共に進む仲間を

悲しき別れ、龍との闘い、新しき旅（後書き）

オリワザ説明

『示現流・撃昌・真』

示現流・撃昌の居合い版

回転は横回転、蒼雷は今回は不使用、使えば早さは正にに神速、光速を超える。

だが使えば間違いなく肩が外れる、もしくは筋肉が千切れる、鞘が割れる、諸刃の剣

現在進行状況

北郷一刀

風、稟と共に曹操の元へ移動中。

追加設定

動物、子供に好かれやすい。

マダムキラー（無自覚）「凍傷さん命名」

新兵の夢（八話、十五話参照）に悩まされる

新技開発中

桃香（劉備）

桃園の誓いを済ませ、現在、公孫贄の元で愛紗（関羽）、鈴々（張飛）と共に義勇軍を募っている。

追加設定

少しだが愛紗と鈴々と鍛練しており、兵よりは実力は上

一刀に憧れを抱いている

星（趙雲）

朱里（諸葛亮）、雛里（鳳統）と共に桃香の元へ移動中。

一刀に好意、ライバル視している。

現在、天の酒を飲みたい心を日々苦しみながら抑えている。

次回で魏入りを果たすかもしれません。

だがやはり試練は付き物です。

悲痛の三羽鳥、故郷の危機、霸王への試練

「なあ稟？次の街が曹操の本拠地の一つ前なんだよな？」

「はい。そうなのですが……………」

今、俺達はいくつかの街を訪れ、働きながら旅をし、遂に曹操に会う機会が来た、のだが何故か稟は乗り気ではない。

「？　どうかしたのか何か不都合でもあるのか？」

「いえ……………その……………」

「お兄さん。稟ちゃんはお兄さんとお別れするのが嫌なのですよ」

「なあっ！？　ふっ風！？　誰もその様なことを言っていないでしょう！？　か、一刀殿っ違いますよ！？　私はそんな！」

稟は顔を真っ赤にして否定している。

風はそんな稟を口に手を当てニヤニヤしながら見ている。

「ほお〜稟ちゃんはお兄さんとお別れするのが嫌ではないと言っているのですか？　ここまで来るのに何度も賊からや鼻血から助けてくれたお兄さんなのですか？」

「ぐっ！？」

「風はお兄さんとお別れするのが嫌なのですよ。　お兄さんとい

ると安心しますし眠たくなったらおぶつてくれますし、お兄さんが作ってくれた飴はとても美味しかったです」

確かにここまで来るまでに風がいきなり寝たり、飴が無くなったとおねだりされたから簡単に砂糖と果物を混ぜた飴を試しに作ってあげたら顔を喜びの色で輝かせ美味しいと言ってくれた。

そんなことを思い出していたら風が俺の左腕にぶら下がる様に体を預けてきた……………よくあることなのであまり驚かなくなった。

「風？ 眠くなったのか？ できれば離れてほしい。 稟が今にも鼻血を吹き出しそうなんだけど」

「おやおや、稟ちゃんの頭の中はいつも桃色なのでねえ、確か曹操様は気に入った女性を閨に連れ込む百合百合しい方だと聞きましたが、そのようでは連れ込まれても曹操様を鼻血で真っ赤に染めてしまいますよ？」

「……………」

それは……………多分、打ち首になるんじゃないか？

「なあ稟？ まだわからないけど、もし曹操が閨に招いたら鼻血は我慢しなきゃいけない。だからさ鼻血を我慢する練習しないか？ 曹操のことはわからないけど打ち首にされかねないからさ」

稟にそんなことで死んでほしくない

鼻血を霸王にぶちかました罪により打ち首……………絶対嫌だ

「私もそれが気がかりなんです。私の鼻血はもはや持病の様なもの、そう簡単には……………」

「だよな……………」

やはり妄想が原因なんだろうけど……………
そんなことを考えていると

「ではお兄さんと閨を共にして鼻血の鍛練を」

「ブププププ……ッ！」

「ギヤア……！！稟……！！鼻血の量が半端ないぞ！？風！
なんてことを口走ってんだ君は……！！」

そう叫ぶがやはりニヤニヤしながら見てきた

多分狙って言ったな……………風……怖い子っ！

そんなことを考えながら稟の看病を終え、支えながら歩いていると

《バカラッバカラッバカラッ！！》

「？なんだ？」

「「？」」

なにか大量の馬が前から砂煙を上げながらこちらに走って来ている

よく見ると黄色い布が見えた

「「「!!!??」」」

こちらに何か用があるのかわからないがとりあえず二人を馬の進路方向から外させ様子を見た

《バカラツバカラツバカラツ!!!》

《ドドドドドドドドドドドド!!!》

『た……………てっ、な……………まお……………!!』

黄巾党達は俺達を無視して通り過ぎて行った

数はざつと三十人、馬は二十匹ほど、しかし先頭に輸送車があり中に十人ほど黄巾党がいた
通り過ぎた時、助けを求める声が聞こえた
そこに

「沙和——!!」

「まちい——!!!!沙和を返せ——!!」

身体中に傷痕があり、白に近い髪を後ろでみつあみにしている女の子と胸が大分大きく、薄紫の髪を左右にボンボンの様にくくった女の子が叫びながら追いかけて来た

しかし馬の速さにはかなわず一人は茫然と立ち尽くし、一人は四つ

ん這いになり黄巾党達の方を見つめている

「……………」

「一刀殿……………」

「お兄さん……………」

推測すると連れていかれた子はあの二人の仲間なのだろう

……………二人には悪いけど助けなきや

「二人共……………いいかな？」

「はい、一刀殿がやることに異論はありません。天の御遣いは民に安寧を与える者」

「風達はそんなお兄さんが好きだから今まで行動を共にしてきたのです」

二人は俺の勝手な行動を共にしてきた

これでまた借りができたな…ははっ

「ありがとう、二人共」

笑顔で返した

二人も顔を赤くしながらも笑顔で返してくれた

さて……………御遣いの役目をまっとうするか！

そう考えながら二人に歩み寄り、肩を叩いた

??? side

肩に誰かの手が置かれた
振り向いてみれば男性が一人、女性が二人いた

「誰だお前達は……？」

「………なんや兄さんら、うちらになんか用かいな。悪いけどうちらは今、腹の虫の居どころが悪いねんあっち行けや」

真桜は大分腹がたっているらしく敵意丸出しで睨んでいる
そういう私も警戒心丸出しで睨んでいる
しかし男性は真面目な顔
になり言ってきた

「今の黄巾党達は君達の友達を誘拐した。そうだね？」

「そつや。あいつら、うちらがバラバラに商売しとることにつけてんで沙和を……于禁を誘拐したんやっ！！」

「くそおっ！！」《ドオンッ！》

真桜はさっきの私達を思いだし叫んだ
私は思いだしい地面を思いつきり殴り付けた
すると男性は

「君達は……その友達を助けたいか？」

「当たり前や！！せやけど……どうにもならんねやないか！」

「あなたに私達の気持ちがわかるのか！？仲間を失った私達を！」

私達は目一杯叫んだ

それを聞いた男性は

「わからないさ、俺は仲間を失ったことがないから……でも君達の友達を助きたい気持ちはわかる。だから……俺に任せてくれな
いか？」

男性は私達に任せると言ってきた

私達は

「兄さんに何ができんねん？ うちらにもでけへんかったのに」

「あなたには助けられると言っのか？ あんな所に、あんな数に立ち向かえると？」

「覚悟を決めたんだ。誰かを助ける為に自分の命を賭ける覚悟を。だから……ここで待っててくれ。必ず助けてくるから」

彼の目には輝きが見えた

だから私は

「わかりました。私の名は楽進、于禁をよろしくお願いします」

「うちは李典、よろしゅう頼む、 兄さん」

私達は頭を下げ、頼んだ
彼は

「俺の名前は北郷一刀、必ず助けて帰ってくる」

「?!!?!?」

名前を聞いて驚いた

しかし彼は笑顔を少し私達に向け、一瞬で黄巾党達の方向に駆けて
いった

「やれやれ、お兄さんはやはりお人好しなのです」

「ええ、それも上級のお人好しね」

北郷殿の連れの二人が私達に歩み寄りながらそんな皮肉?を言っ
ていた

「あの……………彼はまさか……………」

「はい、彼は北郷一刀殿、天の御遣い様です」

やはり…と漏らしながら彼が駆けていった方向を見ると

彼はもう輸送車に追い付き、黄巾党達の目の前に立ちはだかっていた

俺は黄巾党達……賊でいいか
賊の最後尾に追いついた
その要因は

『示現流・雷火』

足に電撃を纏わせ、筋肉をフル稼働させる荒業
まだ完成していないが多少無理をすれば役に立つオリジナル、電撃
量を間違えれば足が麻痺し動かなくなる技だ

「ん？ なんだ!？」

最後尾の奴が俺に気づいた
なので最高速度で賊をかき分け、先頭を追い抜き立ち上がった

「邪魔だどけっ!！」

先頭の奴が叫んできた
だが退くわけにはいかない
馬は止まる気はないらしく、さらに速くなる
俺は

《ギンッ!》

「!?!」《ザァー!》

馬に対して殺気を込めた睨みを向けた
すると馬は野生の勘で感じとり、ブレーキをかけ、止まった
他の馬も止まり、賊達は混乱している

「てめえ！なにをしゃがった！？ 何者だ名を名乗りやがれ！！」

「悪いけど外道に名乗る名は無いんだ。見逃してやるからその子を
解放しろ」

殺気を込め、声に怒気を込め、言う

何人かは後退りするが輸送車から一人、下っぱの様な顔のバランス
がヤバい奴がなまくらと一目でわかる剣を突きつけてきた

「おい兄ちゃん。俺達の商売にケチつける気か？ ガキは母ちゃん
の所へ帰って震えてろや！！」

その下っぱは剣を俺に振り落とした

《バキーン！》

「！？」

だがなまくららは俺の拳で叩き折れ、地面に突き刺さった

「あまり凶に乗るな。雑魚は失せろ！」

『示現流・喝破』

「喝っ！！！！」

「ひええええー！！」

下っぱは仲間とは違う方向に逃げていった
他にも二、三人馬を捨て、逃げていった

「ちっ！ やるぞ野郎共！！」

『おう！！』

しかし残った奴等は輸送車から一斉に飛び出し、俺を囲んだ
頭は輸送車の馬の手綱を引きながら起こそうとしているがびくとも
しない

「おらあー！！！！」

賊の一人が槍を構え突進して来た
俺は槍を避け、賊の腕を掴み、一本背負いし、たたきつけた、賊は
気絶した

「！！！！うおっ！！！！！！！！」

次は三人一斉に剣をふりおろし、よこなぎ、突きを放ってきた
まずふりおろしを横によけ、よこなぎを地面に踏み止め、突きを片
手を添えながら避け、近づき手を掴み、折った

《ボキツ》「ぐあー！」

続いて踏んでいる剣を片方の足で踏み碎き、賊の脇腹に刀の柄で突きを入れ、倒し、避けたふりおろしの剣を賊の腕ごと切り落とした

「ぐふっ」《ドサツ》

「ギャアアアアア腕がー！！！」

一人は気絶、一人は断末魔を叫びながらふせおちた
あと二十二人

「一斉に斬りかかれ！！！」

二十二人一斉に剣、槍、戦斧、弓などを放ってきた

「ハアアアアアッ！！！」

『示現流・六進』

俺は一斉に斬りかかってきた二十二人の内、十二人を突進しながらの
右から左へのよこなぎで吹き飛ばした、蒼雷を少し発動させた示現
一刀で

「ひい！」

十二人は胴真っ二つに斬れたり、斜めから真っ二つや、縦真っ二つ
になって息絶えた

生き残った弓兵は後退りしながら逃げていった

「てめえ！ 武器を捨てて大人しくしろ！ この女がどうなってもいいのか！？」

頭が眼鏡をかけ、薄い蜜柑色の髪をつむじから編んだ女の子の喉元に小刀を突きつけながら脅してきた
生き残った賊達は下卑た笑い声をかけてくる

「……………」《カラント》

「そつだ言う通りですりゃいい。…………野郎共！やれ！！」

賊達が一斉に斬りかかってくる

「お兄さーん！」

女の子が悲痛な叫びを涙目であげた
賊達は

《ザクツドシュズバツシュビ！》

俺に覆い被さる様に攻撃してきた

于禁 side

沙和の目の前には賊達の山が出来ている
下から赤い液体が流れている

「……………ッー!!」

「へへっ一人でかつこつけて挑むからだ、おらおめえら行くぞ!!」

頭が山になっている賊達に命令する
しかし

『……………』

反応がない

何故だろうか、賊達から生きている気配がない
沙和の勘違いかな？

「てめえら俺の命令が聞こえ」

「聞こえるわけないさ。死んでるんだから」

「「!!!!???」」

背後からお兄さんの声が聞こえた
振り替えると体に淡い蒼雷を迸らせたお兄さんがいた

「てめえ!どうやって!?!」

「簡単さ、あいつらを相討にさせ、そして攻撃される前にこの“雷
火”で移動したのさ」

「まさか……………てめえ」

なぜか頭は顔を青くして沙和から離れた

「俺の名前は北郷一刀だ」

「「!？」」

名前を聞いて驚いた
たしか

「てめえが『蒼雷の鬼神』！」

そうなの、黄巾党一の大男を一瞬で灰塵にした人！

北郷一刀！

でも確か天の御遣い様でもあるんだっけ？

「その通り名は知らないが、まだその子を人質にする気なら……」

《チキツ》 《チヂツチ》

北郷さんは剣を鞘から少しだけ抜き、淡く蒼く光る刃を覗かせる
なにか電撃の迸らせた様な音を響かせながら

「わ、わかったこいつはあんたにやるよ。だから命ばかりは」

「……………失せる」

「『ゾクツ!!』」

背中に嫌な汗が流れた

これが天の御遣い様……………蒼雷の鬼神の迫力

「ひ、ひええー！ー！！」

頭は沙和を拘束から解き、他の賊が逃げた方向へ逃げていった

「大丈夫？」

北郷さんが沙和に近づき、目線を合わせるために屈みながら言ってきた

「だ、大じよ《ズキッ》痛っ！」

足に痛みが走った

そういえばまだ縄で縛られたままだった

「ちょっとまってて、すぐ解いてあげるから」

そう言いながら沙和の後ろに回り、剣を抜き、足の縄を切り、手の縄も切ってくれた

「あ、ありがとなの。なんで沙和を助けてくれたの？」

「ただ単に見過ごせなかった。それに君の友達に任せろって言ったしね」

北郷さんは笑顔で教えてくれた

……………なんだかさっきの迫力が丸つきり感じられない笑顔なの、見ているところ……………暖かくなるような

「さっ、君の友達の前に行こう。二人とも心配してたよ？」

そう言いながら手を差し伸べてくれた、あの暖かくなる笑顔を見ながら

沙和はその手を取り

「北郷さん、沙和の名前は于禁、真名は沙和だよ。そう呼んで欲しいの〜」

すると北郷さんは驚愕の顔を見せ、「いいのか？」と聞いてきたそれを無言で、笑顔で頷いた

「ありがとう、俺の名前は北郷一刀、好きな様に呼んでくれ。よろしくな、沙和、」

呼んでくれた

沙和は握った手をさらに力強く握り締め

「助けてくれてありがとう、一刀君」

沙和は引いてくれる手に身を任せ、凧ちゃん達の方に戻った

一刀side

沙和に真名を許してもらい楽進達の元に戻っている

因みに距離が遠すぎたので雷火で沙和をお姫様抱っこで運んでいる
………沙和はなぜか顔を真っ赤にさせ、俯いているが………やはり恥ずかしいのかなあ？
でも縄のせいで足が擦り切れていたから我慢してもらおう
そうこうしている内に着いた

「「沙和………!!!」」

「凧ちゃん！真桜ちゃん！ん！」

沙和は手を振りながら二人に自分の無事を知らせている

沙和を下ろし、その場から一步下がり、三人の感動の再会を見守る

「沙和！ 心配したんだぞ!？」

「無事で良かったわ〜！」

「ごめんなさいなの………!!」

三人は泣きながら抱き合っている

「お疲れ様でした、一刀殿」

「お疲れ様なのですよ〜お兄さん」

「ああ助けてよかったよ」

凜と風が俺の後ろにいた

「じゃあ水をささないように行こうかと二人に告げ、三人に気づかれない様に背を向け、その場をあとに《ガバツ》」

「うおっとー!？」

「一刀君、どこ行くの? 沙和達をほったらかして」

「「むっ」「」」

沙和が俺の背中に抱きついてきた、脇から腕を差し込み、腹の前で交差させ絞めるように

凜と風はなぜかしかめっ面になっている

「こ、こらっ沙和! 北郷殿に失礼だぞ!」

「せやかて凜? あのままほっぽってたら兄さん行ってもうてたで?」

「そうなの? 沙和は一刀君に助けてもらったからお礼がしたくてこうして止めてるの?」

「お礼なんていいよ? とりあえず沙和、離してくれなんだか二人からすっごく睨まれてるから」

沙和にそう促すが離す気はないらしくさらに背中に顔を擦り付け、腕を絞めてくる

楽進と李典は呆けにとられ、口を開け驚いている

「沙和、あんた真名を預けたん？」

「そつだよ〜だって沙和達の仲を繋ぎ止めてくれたもん。当然だよ〜」

「真名を預けたのか……………北郷殿、私の真名は凧です。預けさせてもらえませんか？」

「ちよつ凧〜うちが言おうとしとつたのにずるいわ〜、兄さん、うちの真名は真桜や。そう呼んで〜」

なんとなくそんな空気だったがまさか実現するとは……………まあいいか、信頼してくれたってことで

「ありがとう、呼ばせてもらつよ、凧、真桜、」

「はいっ」「よろしくやで〜」

二人は仄かに顔を赤らめながら返事をした

「一刀君っ、沙和達にしてほしい事があるならなんでも言つて〜」

沙和が目を輝かせながら言つてきた

凧と真桜も同じ風上で後ろから見ってくる

……………凧と風からすごい剣幕で見られてるけどなんでだろう？

「三人はあの街の人間なのか？」

見えてきた目的の街を指差す

「はい」「そやで」「なの」

「じゃあ案内頼めるか？ お腹減っちゃってさ、美味しい物、食べたいな」

そう言うと稟と風は「ほっ」と漏らし、三人はなぜかシユンとしたがすぐに顔を戻し

「はい、私達のお勧めの店を紹介します」

そう言い、五人一緒に街に向かった

そして街に入り、飯屋に入り、注文した

俺は麻婆豆腐と白米と焼売

稟は餃子と白米

風は炒飯

風は……真つ赤な麻婆豆腐や回鍋肉などの辛いものと白米……
なんだが風の見たら目が痛くなった……どんだけ唐辛子効いてんだよ

真桜と沙和はラーメンを頼んだ

「うん美味しい、流石お勧めするだけある」

「気に入ったいただいてよかったです」

「ちょ！？兄さんなにやってんの？」

「ん？」

「うわっ白米に麻婆豆腐をかけてるのー！？」

そついや麻婆丼は日本の考えだったっけ？

「これは天の食べ方でね、結構イケるよ？」

「ではお兄さん？ 風に分けてもらえませんか？」

「いいよ〜はいっ」《スツ》

「お兄さん？ これは？」

「ん？ あ、ごめん熱いよね。 フーッ、フーッ……はいどござ」

風が欲しいと言ってきたので一掬いに息を吹き掛け、風の目の前に出した

風は顔を真っ赤にしている

………はて？

「ではいただきます」

風は顔を真っ赤にしながら麻婆丼を一口すると目を輝かせ美味しいと言ってくれた

「一刀君っ」「兄さんっ」

「うおっ？ ど、どうした？」

沙和と真桜が俺に詰め寄ってきた

凧と凧は顔を赤らめ俯いている

………凧は麻婆丼を作っている

「」（沙和）（うち）にもちようだっ」「」

どうやら二人も気になるらしい、なので風にしたように二人にも食べさせた

二人も「うまっ!？」、「おいしいの〜」「と言ってくれた

「稟もどうだ？」

稟にもと思ひ、話しかけると

「はあはあはあはあ」

あ、やばい妄想モードに入りかけている

「そおーい!！」

「《スポーツ》うむっ!？」

鼻血を吹かれる前に麻婆丼を口に突っ込んだ

うまいのか何度も顎を動かし「美味です」と言ってくれた
よし回避成功!

そろそろ皆食べ終える頃、凧が麻婆丼を掻き込み終えた

「凧」

「はい?《スツ》……………?」

「ご飯粒が付いてたよ《ぱくっ》」

「「「「「!!!!!!……?……?」」」」」」

凧の口元にご飯粒があつたので取って食べた

……皆、顔を驚愕の色にしながら真っ赤になっている

「一刀殿……」 「お兄さん……」

「兄さん天然やな《ひそひそ》」 「天然なの《ひそひそ》」

凧と風は何か仕方ないものを見る目で

沙和と真桜は何か話し合っている

凧のご飯粒は一粒だったのに辛い……… どんだけだよ

まあ店を出たのだが…… 中から店主の「なんだこの美味さはー!?!?」
と聞こえたのは良い仕事をしたからだろう

「美味しい飯をありがとう、じゃあな三人共」

「……えっ!?!?」

「俺達は明日この街をたつから今から宿を探さないといけない。三人は商売があるしこれ以上、手数をかけれないからさ」

「……」

三人はそれを聞き、俯いているしまった

《ギョッ》

「……へあつ?」

「三人共ありがとう、絶対忘れないからさ、元気だな?」

三人まとめて抱き締めた

《カントッカントッカントッカント!!!!》

「「「「「「!!!!??」」」」」

すると城の方から鐘がなり響いた

「これは黄巾党の警鐘!!」

「!?!?稟、風!」

「「はい!」」

二人は瞬時に理解し、城の方に駆けていった

「三人共つ、安全な所へ避難してくれ!」

「……………いかれるのですか?」

凧が悲しそうに言ってきた

「ああ、多分あの黄巾党は俺が逃がした奴等だ。なら俺にも責任がある」

「では……………私も行きます」

凧はそう言いながら手甲をつけ始めた

真桜と沙和はドリルの様な槍と双剣を握っている

「…………やるんだな？」

「はい！」「おう！」「なの！」

「じゃあこれだけは約束しろ」

「はい、なんででしょう？」

三人共、俺に注目している

そんな中で俺は

「生きる！ 無茶をするな！ 必ずまた会い見える^{まみ}ために！！」

「……！？」「」

三人は俺の言葉を聞き、目を潤ませながら驚いている

「……はっ……！！」「」

「行くぞ……！！」

返事をしてから俺達も城に向かった

場所は城の門前に移る

「では貴殿達が各地の街を賊達から守っているという天の御遣い様の仲間なのだな？」

隊長格の男性に稟、風、凧、真桜、沙和が説明している

「それは心強い！ で御遣い様は何処に？」

「彼は」

「誰だあれは！？」

稟が話そうとした時、兵の一人が城壁の上を指差しながら叫んだ
城壁の上の人物は白く煌めく服で光を反射させながら剣を抜き、天
に突き上げ

「聞け！ 街を守りし兵達よ！ 我が名は北郷一刀、天の御遣い！
今、友のためにこの街に来た！ さあ自分達の故郷を、街を守る
覚悟があるのなら、我も力を貸そう！ 我と共に守り抜こうぞ！！」

剣が光で煌めく中、兵達に協力の意を示す

『うおおおおおー！！！！！！』

兵達の勢いは最高にまで達し、剣や槍などを掲げながら一刀に声援
を投げ掛けている

「す、すいー！」

「流石はお兄さん。兵の盛り上げはお手の物ですね」

凧と風がそう漏らす中、一刀は城壁から飛び降り、足に蒼雷を纏わ

せ、着地した

「では我が友から配置を告げる」

「はい、配置は」

賊の数は約五千

街は正門、西門、南門が主な出入口になっており

正門に「一刀」、隊長格、

西門に「風」、稟、

南門に「真桜」、沙和、風、

正門に多くの賊が来る予想がされるので一刀、槍兵、剣兵、が門前に立ちほだかり、城壁に弓兵を指示する隊長格を置いた防御体型と迎撃体型を並べた配置になっている

西門には槍兵、弓兵、弓兵が迎撃し槍兵が討ち漏らしを仕留める

弓兵を稟が指揮、劣勢になれば風が前線にでる作戦を置いた迎撃体型

南門は一刀と真桜の考えにより即興で作った投石機を中頃に配置、

前線に剣兵と沙和を配置し城壁から風が弓兵を指揮する陣形

今、故郷を守り、曹操に会うための闘いが始まる

悲痛の三羽鳥、故郷の危機、霸王への試練（後書き）

なんとか書いたけど思いの外長くなりました

皆さんも熱中症に気をつけてください

はい作者は熱中症になりました

やばいよ朝起きたら目眩がするは平衡感覚がおかしい、頭痛がやばい
ああ治るのだろうか？

次回は大分後になります

では（-|-）ノ

「確かな情報ではないが、そう呼ばれているらしいな、姉者」

金髪の少女が考えていたことを先に話した姉者と呼ばれた長髪の黒髪を後ろに流した女性は顔をニヤリとしながら

「その情報が確かならば是非とも一戦交えたいな」

「春蘭。私達は街の民達を救うために進軍しているのよ？間違っても街を守っている者を攻撃しないように」

「はっ！ わかっておりますよ華琳様！」

「（その言葉を守れていないから警告しているのよ……）」

華琳と呼ばれた少女は春蘭という女性に何度か命令無視の行動をさせていたので頭の中で溜め息をついていた
そしてもう一つ考え事をしていた

「（天の御遣い、蒼雷の鬼神……：神秘性を持ち、鬼神と呼ばれる程の力を持つ者が……：その名声と力、我が覇道の礎となるに相応しいかどうか、見極めさせてもらいましょう）」

彼女は自分が霸王となるために人材を集めている現在、天の御遣いは最も最適な人材と思い、取り入れる事を考えていた
自分の才能、名誉、人材、あらゆる力を見せつけ、頷かせる、そう考える彼女は全く断られる事を考えていなかった

場所は正門、門前に兵達を配置し城壁に弓兵が並ぶ中、一刀と隊長は話していた

「御遣い様。今、曹操様に便りを送り救援を要請したところ、承諾して頂けました」

「そうですか。これで生きる可能性が上がりましたね」

「はい、御遣い様が指示して下さいましたお陰です」

隊長が微笑みながらそう言う

だが一刀は他の事を考えていた

「（曹操……… 霸王と呼ばれた者だが、冷血ではないようでよかった。これなら稟と風が仕官しても心配ないな……… しかしこの闘い、苦戦するだろうな特に西門は……… 風、無事でいてくれよ）」

一つは曹操の事

もう一つは西門の風

なぜなら賊の進行は正門に二千五百、南門に千、西門に千五百、正門は予想通りだが南門の進行は予想より少ない、投石機があるので苦にはならないだろうが西門は兵器がなく、白兵戦が主になるだが風は「私には切り札があります」といい請け負ってくれた

《ジャーンジャーンジャーンッ！！！》

「!? 黄巾党、現れました!!!」

「弓兵! 構え!!!」

銅鑼が鳴り響き、緊張が走る。

隊長の指示で弓兵が狙いを定める

一刀は弓兵が構えると同時に門前の兵達の前に降り立ち、示現一刀を抜き、賊の部隊に向け

「黄巾党共を打ち破り、我が街を守り抜けえっ!!!」

『応!!!』

「放てえ!!!!!!」

《ヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュ!!!》

一刀が兵達にさらに激励を放ち、構えた後、隊長の指示で矢の雨が黄巾党に降り注ぎ、前衛の敵を射殺した

「槍兵、構え!!! 俺が突撃した後、続け!!! 剣兵は槍兵と連携して三対一に持ち込み、確実に仕留めろ!!! 負傷した者は無理せず下がれ! 自分の命を無駄にするな!!!」

『応っ!!!』

「家族を守れ! 友を守れ! お前らには“天”がついている!!!」

『うおおおおおー！！！！！！』

こうして正門は戦闘を開始した

南門

「どつやら正門の戦闘が始まった様ですね」

「凄い声だったの」

「やな、また兄さんが兵を盛り上げたんやろな」

そう言いながら真桜は投石機の点検を終え、大岩を装填している
沙和は剣兵を並ばせ、布陣と作戦の説明をしている
風は弓兵に弓の点検をさせている

《ジャーンジャーンジャーン！！！！》

「やっこさん来よったで、うちの兵器の恐ろしさ、思いしらしたれ！！」

『応！！』

「弓兵さん達は投石が済み次第、敵さんを射抜いてくださいな」

『はっ！！！！』

「剣兵の皆は、投石、射出が済み次第、沙和と一緒に突撃するの！」

『サーッ！イエッサー！』

三人の命令を受け、兵達も気合いをいれる

……因みに剣兵達の返事は一刀が沙和に教えた海兵訓練のプロ仕様の返事だ

沙和は兵の訓練に向いていたのか、一発で会得した

「投石開始や！！」

《ガッコン、ギギギギボウッ！！！》

真桜の指示で大量の大岩が前衛の賊に降り注ぎ、岩の下には血の池ができた

「では、弓兵さん達、構えてください」

《カチャカチャ、キリキリキリ》

「放て」

《ヒュヒュヒュヒュヒュヒュ！！！！》

風の指示で大量の矢が黄巾党に降り注がれ、もう賊の数は五百程になつた

「剣兵、抜刀！！」

「槍兵！ 構えっ！！ 一人たりとも先に行かせるな！！ 突撃いいいい！！！！」

『おおおおおおおお！！！！』

これにて全ての闘いが始まった

「華琳様っ！ 街にて戦闘が開始しました！！」

「わかったわ、我が誇り高き精鋭達よ！！ 我らが民に、地に危機が迫っている！ 一刻も早く辿り着き、民達に安寧を！！」

『応っ！！！！！！』

秋蘭が華琳に報告し、先を急いだ

南門

「くっ、予想以上に賊の数が多い、これでは前線が崩れるのも時間の問題っ……………」

「……………稟殿！ 私が出ます！！」

「風殿………無茶はしないでくださいよ？」

「はいっ！」

風は城壁を下り、槍兵達と合流した

「死ねええええー！！！」

「破あつー！！！」

斬りかかってきた賊を手に溜めていた氣を拳と共に放った

すると氣弾は賊の武器を砕き、後ろの賊達を巻き添えにして爆発した
ざつと今の一撃だけで三十人は吹き飛ばした

これが風の切り札、氣を使い、身体能力を強化、また氣弾という氣
の塊を放つ事が出来る

しかし一撃で周りから注目され、相手がいない賊は風に殺到した

「くっ！！！」

向かってくる賊は約七十人、斬りかかってくる賊を避け、蹴りで、
拳で、氣弾で撃ち落としていく

しかし氣は疲労が激しく、多用は危険、風の無手の技は威力もキレ
も格段に落ちている

「楽進様っ！ 少し時間を稼ぎます！ その間に疲れを少しでも回
復して下さい！！！」

「すまないっ！！！」

風が疲れた事を勘づいた槍兵達が風を庇うように立ちはだかり、闘う

正門

「死ねえ!!」

「うわぁっ!!」

「はぁっ!!」

「《ザンツ》ぎゃぁあ!!」

「あ、ありがとうございます御遣い様!!」

「一人で闘うな! 死にたいのか!？」

「はっ、申し訳ございません!」

現在、正門は五分五分の闘いを繰り広げている

一刀は最前線に出て、兵達と連携しながら闘っている

「(さっきの爆発、凧の切り札だろうか………なんだか嫌な予感がする)」

一刀は胸騒ぎがしていた

だが賊が束になってかかってきた

『示現流・瞬激』

「はっ!!」

『示現流・浮舟』

「せやあああああー！……！」

『があああああー！……！』

一刀の技が苦痛の悲鳴を、血の雨を作り出す
策が通じ、自分達の有利になったとき

《カンツカンツカンツカンツカンツ！……！》

「何事だっ！……！」

「はっ！ 黄巾党の背後より突撃する大量の騎兵あり！ 旗は……
……曹ですっ！……！」

「！？ 皆！ 曹操の軍が来てくれたっ！！ あと一息だ、気を引き締めていけえっ！……！」

『おおおおおー！……！……！……！』

兵達の勢いは最高に達し、全員が黄巾党を圧倒する
曹操の騎兵は黄巾党の最後尾を海のように裂きながら近づいてくる
そして先頭を走る三人の女性

「あなたが天の御遣いかしら？」

「そうだ、俺の名前は北郷一刀。君が曹操か？」

シヨートの金髪と左右にクルクル髪を作っている少女が聞いてきた

ので答えた

「ええ、私が」

「貴様っ！ 華琳様になんという口の聞き方をしているっ！！」

すると後ろにいた黒髪を後ろに流した女性が片刃の大剣を降り下ろしてきた

「！？ 《ガギヤアン！！！！》ぐっ！！」

「「「！？」「」」

それを咄嗟に受け止めた

しかし威力を殺せず、少し腕が痺れた

「貴様……………なかなか」

「春蘭！！！！ なにをやっている！早く剣をしまえっ！！」

「！？ 申し訳ありませんっ、つい……………」

「まったく、すまなかったわね……………しかし春蘭の一撃を受け止めるとは……………」

「すまない御遣い殿。うちの姉が失礼した、どうも華琳様の事になると頭に血が昇りやすくなってしまっただ」

「いえ、こちらも口が悪かったです」

「さっきのまままで良いわ。一刀？　ここは貴方だけで守っていたの？」

「いや、隊長さんと兵達と共に戦っていた」

「そう……………（どうやら周りを気にせず、一人で暴れまわる愚か者ではないようね……………それに兵達が尊敬の目を、神を見るような目で見ている……………欲しいわね）」

華琳が考えている中、一刀が

「曹操、ここを任せていいか？」

「……………なぜかしら？」

「西門の仲間が心配なんだ……………あそこは予想より敵が多い、それに……………なんだが胸騒ぎがするんだ」

「（なるほど、仲間ならば誰であろうと助ける。この考えが兵達を奮い立たせるのね）」

「貴様、なにを勝手な　」

「いいでしょう」

「華琳様！？」

春蘭が講義しようとしたが華琳はそれを遮り、許可したそれを聞いた一刀は顔を輝かせ

「すまない、恩にきる！！ 皆っ、曹操達と協力して戦ってくれ！！
俺は西門の加勢に向かう、頼んだぞっ！！」

『応っ！！』

「ふっ！《タンツ！》」

華琳に礼をした後、兵達に駆け寄り、指示し、すぐに城壁を雷火の
応用で飛び上がり、西門へと正に電撃の様に駆けていった

「なんと……………」

「この高さを一っ飛びとは……………」

春蘭、秋蘭が啞然とするなか、華琳は兵に指示しながら

「（やはり彼は我が霸道に欠かせない存在、必ず我がものに……………」
」

一刀を取り込むことを考えていた

西門

「残るはてめえだけだ！ やっちまえ！！」

『おおおおおー！！』

「そう簡単に……………殺られるものかあああ！！」

槍兵はすでに大半が下がり、凧だけが七百もの賊と戦っていた
しかし凧は氣を込めた足を振るった

「猛虎蹴撃！！！」

《ドゴアアアアアン！！！！》

『ギャアアアアアア！！！！』

凧の氣弾は百人の賊を吹き飛ばし、燃やし尽くした
しかし

「ぐっ！！《ガクツ》」

最早凧の疲労は限界
膝から崩れ落ちた凧に賊がにじり寄る

「！？ 貴様はっ！」

「よお、さつきはよくもやってくれたな？ 仲間の仇だ死ねえ！！」

「（くそっ、ここまでか……………すいません稟殿、風殿、真桜、沙和、北郷殿との約束、守れそうにない……………申し訳……………ありません、北郷殿……………」

にじり寄ってきた賊は沙和を誘拐した頭だった
そして刃は降り下ろされた

風は静かに目を閉じた

『 風いいいいいいいつ……………！』

《ガキヤイン！》

「てめえは……………」

「俺の仲間に……………手を出すなあつ！…！」

『示現流・六進・嵐』

《ビュビュー！ゴロゴロゴロゴロッピシャアーーン…！！》

「がはっあ……………！！」

しかし痛みはなく、聞こえてきたのは頭の驚愕の声と悲鳴、雷と嵐が共に来たような轟音、そして尊敬している男性の声
凧は目をゆっくり開き、その光景に目を見開いた

「凧っ！大丈夫かつ！？」

そこには淡く蒼く輝く剣を右に振り抜きながら、自分の肩越しに凧を見る一刀がいた
そしてその光景を見た凧は安堵し、意識を失った

一刀side

闘いは俺達の勝利で幕を閉じた

その後、西門に真桜達が投石機を運び、撃退してくれた
今、後処理を皆に任せ、凧の看病をしている

医師によると疲労が原因なので眠らせておけば回復するらしい
凧の額に濡れたタオル（俺の）を変えながら待っていると

「んっ……うんっ……ここは……？」

「目が覚めたか？ 凧」

「北郷殿………！？闘いはどうなり《ズキツ》ぐっ！」

「あっこら無理するな、只でさえボロボロなんだから」

「す…すいません」

目が覚めた凧は勢いよく上半身を起こしたために頭痛がしたのか頭
を抑えた

それを背中に手を当て、落ち着かせ、現状を教える

「そうですか………すいません北郷殿、私が力不足だったばかり
に《ぽふっ》ん……北郷殿？」

「なに言っただよ。ちゃんと門を守れたじゃないか。………よく
頑張ったな、凧」

「い、いえ私は」

「目を閉じた」

「!？」

やはりあの時、凧は……

「目を閉じたのは怖かったからだろうか？ いいんだ、死ぬのは誰でも怖い。俺だって怖い時だってある。だからさ……我慢しなくていいんだ、俺で良ければ受け止めてやるからさ」

「北郷殿……っ！」

凧は俺の言葉を聞き、目を潤ませながら俺に抱きついてきた
俺はそれを受け止め、頭を撫で続けた

「ありがとうございます……北郷殿」

「気にしないで、凧は一人で抱え込みすぎなんだよ。もっと周りに甘えたらいいよ」

凧は顔を赤くしながら、俺の手を握りしめている
そこに

「失礼するわよ……どうしたの、二人共」

「イヤ、ナンデモナイデスヨ。ドウシタンデスカSOSOサマ？」

霸王曹操登場、因みに上の台詞は間違いではない
咄嗟に手を離れたがやはり変に思ったのだろう疑問を投げかけてきたが、カタコトになりながらも返事をした

「……まあいいでしょう。二人に話があるわ」

「何の」

《ガチャ》

「目を覚ましましたか凧殿」

「良かったのですよ」

「無茶しよつてからに、まあ大事なくて良かったわ」

「凧ちゃん、心配したの」

話を聞こうとしたら、凧、風、真桜、沙和が入ってきた、その後ろに黒髪と水色髪の女性もいる

「まあ話しというのは、簡単に言うわね？　あなたたち、私のものになりなさい」

「……………はっ？」「……………」

曹操がいきなり言ってきた
俺含め、皆驚いている

「平たく言えば、私に仕えなさいと言っているの」

「……………ええっ！？」「……………」

皆、さらに驚いているが俺はなんとなくわかっていたので、凧と風に

「稟、風、良かったじゃないかつ、君達は曹操に仕官してきたんだしやー」

「あらそうなの？」

「は……はいそうです」

「なのですよ」

「ではあなたたちは仕官してくれるのね？」

「はい」

「あなたたちは？」

「私は構いませんが……」

「うちもええでえ」

「沙和もなの」

「あなたは？ 一刀」

「俺は……」

「曹操様、一刀殿はっ」

「黙りなさい、私は一刀に聞いているの」

「は、はっ申し訳ありません……」

「で、どうなの？」

稟が遮ったが曹操は黙らせ、話を続ける
俺は……………

「……………一つ、条件がある」

「なにかしら」

「俺はまだ旅の途中、だから君にずっと仕えることは出来ない。だから客将としてだったら構わない」

「一刀殿！？」「お兄さん！？」

「理由はそれだけかしら？」

稟と風が驚いているが曹操は続ける

「まず一つ、君は黄巾党を討とうとしているから」

「ええ確かに」

「二つ目、曹操に興味があるから」

「ふむ……………」

「最後に……………それは」

「それは……………？」

皆、固唾を飲みながら俺の言葉をまっ
そこに

「五人、俺の友達がいるから」

『……………はあっ!?!』

皆、何故かずっこけた
なぜ?

「一刀殿、あなたはどこまでお人好しなのですか?」

「? なに言ってるんだ、稟と風に言っただろう?」

「へっ?」

「二人の目は節穴じゃないってこと証明してやる」ってぞ

「……………あっ……………」

「一刀殿、まさか」

「あんな口約束を覚えていたのですか?」

「当然だろ、俺が言い出したんだから。それに何もそれだけじゃな
い」

「まず、そろそろ路銀がそこを尽く、そして俺は曹操に興味がある、さらに黄巾党が旅の障害になる。だから曹操に協力する」

「なるほど……」

「（意外に自分の事を考えているようね……まあ、ほぼ五人のためでしょうけど、しかし自分の旅より仲間と共に戦う事を優先する……やはり欲しいわね……）」

「でどうだ？曹操」

「……いいでしょう、では協力に感謝して。我が名は曹操、字は孟徳、真名は華琳よ」

「華琳様が預けるなら私も預けよう。我が名は夏侯惇、真名は春蘭だ」

「我が名は夏侯淵、真名は秋蘭だ。よろしく頼む」

そして五人が真名を預けた後、三人の名を呼ぶとどうやら俺にも真名を預けていたらしく、真名を再度呼ばせてもらった

「少しの間、どうぞよろしく“華琳”“春蘭”“秋蘭”」

「よろしく頼むわよ、一刀」

「ふん、城に着いたらいつか仕合ってもらっぞ北郷！」

「悪いが頼む北郷、姉者が一撃を受け止められてからずっとああなのだ」

「まあ、頑張るよ。秋蘭も苦勞するね」

「ふっ、まああれが可愛いのだがな」

「そ、そうか……………」

「一刀、貴方には凧、真桜、沙和を部下に警備隊の隊長をやってもらうから、天の知識を役立てなさいよ？」

「ああ、わかっ《ぼふっ》《だきっ》《がしっ》《ぎゅ》《ぎゅ》
み、皆？」

「お別れにならなくてよかったのですよ、これからもよろしくなのですよ〜お兄さん」

「よ、よろしくお願いいたします……………一刀殿」

「よろしく申し上げます……………隊長」

「よろしゅうな隊長」

「よろしくなの〜たいちよ」

風に前から腹ぐらいに顔を埋められながら抱きつかれ、稟に右手の親指以外の指を両手で弱めに握られ、凧に左手を強く両手で握られ、沙和に後ろから首に腕を絡められながら、抱きつかれ、真桜に右腕を組まれながら五人とも言ってくる

「こちらこそ、またよろしくな、皆」

こうして俺達は街を守り抜き、新たな居場所に足を運ぶため、街を後にした

三つの攻防戦、霸王との出会い、新たな居場所（後書き）

オリワザ説明

『示現流・六進・嵐』

蒼雷を使えば雷を含んだ竜巻になる、無しでも竜巻が発生する程の回転斬り、回転数で竜巻の大きさが変わる

友達の想い、一人の迷子、魏での初仕事

一刀が華琳の城に移動すると時を同じくして、場所はある陣営、この大将の天幕で二人の少女が話し合いをしていた

「愛紗ちゃん、黄巾党さん達は倒せたの？」

「はい、なんとか私と鈴々で倒せましたが何人が逃してしまいました……」

愛紗は胸元に手を当て、目を俯かせながら言う

桃香はそれを見て少し慌てた様子で

「だ、大丈夫だよ愛紗ちゃん！ 私達は黄巾党さん達を皆討伐するんじゃない撃退が主な仕事なんだからっ、それにまた現れたら私達が倒しちゃえばいいんだからさ」

桃香は胸の前で指を絡めながら笑顔で言う

愛紗は少し考えた後、微笑みながら

「そう………ですね。私達は殺戮者ではなく義勇軍。民を守れたならそれで満足です」

愛紗は笑顔で答える

桃香も笑顔で答えるが、鈴々がいないことに気づき、愛紗に聞く

「愛紗ちゃん、そういえば鈴々ちゃんは？」

「鈴々なら後ろに……どこに行ったんだあいつはあ……！」

愛紗は後ろに振り向くが目当ての人物はおらず、少し怒り出した

「おねえちゃあくん！愛紗ああああ！」

すると鈴々が天幕の入り口に突進しながら入ってきた

「どどどどうしたの!？」

「まさか黄巾党がまた来たのか!？」

しかし鈴々は首を横に振り、二人に用件を告げた

「お兄ちゃんの知り合いだって三人がお姉ちゃんに会いたいわって！」

「お兄さんの知り合い!？」

「鈴々つ、その三人はどんなやつらだ？」

「えくとねえ」

「その必要は無用だぞ張飛殿」

鈴々が答えようとした時、天幕の入り口に背をもたれかけた星が鈴々を制する

その星から見て左側に朱里と雛里が手に推薦状と酒を両手で抱えながら

その様子を見た愛紗は

「すまぬが貴公は？」

「失礼、我が名は趙雲、こっちの二人は諸葛亮と鳳統。私達は北郷殿にあなた……………劉備殿の力になって欲しいと頼まれたのだ」

星がそう言うと朱里と雛里が推薦状と酒を桃香に渡す

「この酒瓶……………それに《クンクン》この匂い……………間違いないよっ、これ天のお酒!!」

桃香が酒の話題を話している中、愛紗は推薦状を拡げながらふんふんと頷きながら読み終え

「これは本当に一刀殿が書かれたのか？」

「ひゃい！ 私達が一刀さんに教えました！」

「一刀さんは天で一度……………私達の文字の書き方を習ったらしくすぐに覚えられました……………」

朱里と雛里が一刀の学習能力を思い出していた

一緒に勉強したあの時の一刀の悩む顔を思い出し、真っ赤になりながら

「……………しかし趙雲殿、貴公のことは書かれていないがなぜだ？」

「私は北郷殿に頼まれたのは旅に出る寸前。街の門前でこの二人が立ち止まっただけで、聞いてみると北郷殿を待っていると言ったので共に待っていた時に二人の護衛兼仕官を頼まれたのだ。……………しかし北郷殿はあの力無しでも中々の強者だったな……………」

愛紗が推薦状に星の事が書かれていないのをおかしく思い聞く

星は一刀に真つ赤にされた手を見つめながら愛紗に答える

握る開くをできる様になったがまだ痺れが取れないことに顔をしかめる

だがその痛みが新しい好敵手が現れたことを思い出させ、顔を綻ばさせる

「なあ、趙雲？ お兄ちゃんはその雷みたいな力無しでも強いのか？」

「ああ、彼は私の突きを叩き落とし、この手を赤く染めるほどにな

鈴々が聞いてきたのを星が返す

その話を聞いた愛紗が

「はあっ！！」

《ガキーン！》

「ふっ、なんの真似だ関羽殿？」

「愛紗ちゃん！？ なにやってるの！？」

青龍偃月刀を星に振り下ろした

星は龍牙でそれを防ぎ、軽く挑発する

桃香は突然の行動に驚き止める

「趙雲殿の力を試したまです。私の撃を簡単にいなしたところを見るに中々の強者のようだな」

「お褒めに預かり光栄だが、あまりよい趣味ではないな」

「しかし相手の实力を知るには動きを見るのが一番だろうか？………お主程の武人と善戦を繰り広げるとは一刀殿の实力は中々のものだ」

「ああ、彼は見たこともない構えから放った閃光の様な一撃を私の奥義とぶつけ、互いに首を捉え引き分けにされた」

「お兄ちゃんはなんで雷を使わなかったのだ？」

星の話を聞いていた鈴々が疑問を投げ掛けてきた

すると星は真剣な顔をして

「彼は言った。『君が本気で勝負がしたいように俺も自分の実力で勝ちたい』と、だから彼は自分の力ではない蒼雷を使わず、自分の

剣技で立ち向かってきた。私も本気で相手したが結果は引き分け、
……いやはや彼を見ていると私が小さく見えてくる」

「おお、流石はお兄ちゃんなのだ！ 鈴々も戦いたかったな」

「お兄さんすごいな」

「正に一刀殿は天の御遣いに相応しい方ですね」

鈴々、桃香、愛紗が感慨深く思い出している

「で、私達はお主らの仲間になってよいのか？」

「もちろんだよ！ 私の真名は桃香！ よろしく！」

「我が真名は愛紗、よろしく頼む」

「鈴々は鈴々なのだっ！」

「私の真名は星だ、我が力、存分に使ってくれ」

「私の真名は朱里です、よろしく願いします」

「私の真名は雛里です………よろしく願いします」

「ところで桃香様、一つお願いが」

「なにかな星ちゃん」

星が一刀の酒に視線を向けながら桃香に尋ねる

桃香はその視線に気づき、仕方なさそうに

「うん、皆で飲むんなら構わないよ?」

「ありがとうございます……ああやっとこの時が……」

「どうしたの?」

星が至福の時と言わんばかりの顔をしているのをおかしく思い、聞いてみた

「ここにたどり着くまで私はこの酒の味を知っている身でありながら飲みたいという欲望を抑え続け、今に至りました。……ああもう我慢の限界です!!」

「わっわ、はいどうぞっ!」

桃香は用意していた杯をいち早く渡した

星はそれを神速の早さで掴み、喉を大きく鳴らしながら飲み干した

「ああ、美味しい……」

「ははっ、私達も飲もうかつ?」

「はい」「なのだ」 「はい」「ひゃい」

五人仲良く酒を飲む

桃香は助けてもらった時にされたお姫様だっこの時に見た一刀の凜々しい顔を思い出し

愛紗は最初に見た一刀の寝顔を思い出し

鈴々は撫でられながら寝た時の心地よさを思い出し

朱里と雛里は抱き締められ、一刀の胸の中で泣いた時を思い出していた

……しかし星はどうやら酒を飲めた喜びのせいか、思い出した事を口にしてしまった

「この酒を飲んでいたら、北郷殿の胸の中で夜を明かしたあの時を思い出しますな……」

「「!?」「にやっ!?!」「はわっ!?!」「あわっ!?!」

人はそれを地雷と言う
それを聞いた四人は

「へえ……お兄さんは星ちゃんにそんな事したんだあ?」

「ふふふ、まったく一刀殿と来たら……仕方ないお方だ」

「にや〜!星ずるいのだ〜、鈴々もお兄ちゃんにギョ〜ってされながら寝たいのだ〜!」

「「《ヒソヒソ》………キヤー!」「」

桃香は手を胸の前で絡めながら笑顔で言っているが目は笑っておらず、背中に黒いもやを出している

愛紗も笑顔で言っているが目は笑っておらず背中には黒いもやの中に般若を出している

鈴々はがーと両手を天に突き上げながら駄々をこねる

朱里と雛里はその夜を想像しながら小さな声で話し合い小さく黄色い声をあげている

その様子をみた星は

「（北郷殿もすみにおけませぬなあ、だがこの者達がここまで彼を想っている事も頷ける………私も負けられぬな）」

四人に負けないぐらい星も一刀に想いをはせていた

一刀side

《ゾゾゾオオオツッ!》

「うひひひひひひっ!?!?!?」

「ど、どうしたのですか、お兄さん？」

「いや……なんだか寒気が……」

な…なんだ今の寒気は？

なにやら般若に首を捕まれながら、魂を抜かれるような言葉で表すには難しすぎる感覚

その感覚に寒気を感じ、思わず変な叫び声と一緒に馬に乗っている風が尋ねてくる

何故、風が乗っているのかと言うと、華琳の連れてきた馬が全て騎兵が乗っているので、街から最小限の馬を頂き、俺の馬に風が、尻の馬に稟が、真桜の馬に沙和が、となっている

「ちよつと一刀、いきなり大きな声を出さないでちょうだい」

華琳が肩越しに注意してくる

いや、俺だってあんな声を出したくなかったんだって

「す、すまん。なんだか寒気が……」

「体調管理はちゃんとしなさいよ？ あなた達には明日から働いてもらうのだから……それと私達は街を見回りながら城に帰るわよ」

「え？ なんで？」

「忘れたの？ あなた達は警備隊として働くのだから街の構造を覚えてもらわないといけないの、大通りから城への帰り道くらい覚えてもらわないと困るから街から帰るのよ、見回りも兼ねてね」

「ああ、なるほど」

流石は曹操、抜け目ないな

そんな事を考えていたら春蘭がにやつと俺を見ながら

「案外、お前も馬鹿なのだな」

「お前も」と言うことは春蘭は馬鹿なんだよな？」

「なっ！？ う、うるさいっ！ 私も馬鹿だがお前も馬鹿なのだからその様に言われる筋合いはない！！」

「悪いけど、俺は春蘭みたいに自分のことを馬鹿なんて言ってないけど？」

「ふぐうっ！？ ち、違っ、わ、私は　　華琳様？　何故肩を震わせておられるのですか？」

「い、いえくくっ、なんでもないわ」

「……………姉者はかわいいなあ〜」

春蘭にカマかけて俺は春蘭との舌戦に勝利した

やっぱり春蘭を嵌めるのは簡単だな〜

その舌戦を聞いていた華琳はどうやらされたい放題の春蘭に笑いを抑えながら肩を震わせておられる

春蘭の慌てっぷりに秋蘭は顔を蕩けさせながら呟く

「どうやら魏勢にはSが多いようだ」

「そんなこんなでやって来ました、曹操の街」

「門前で騎兵達を先に城に帰し、門をくぐる」

「すると門の入り口近くに一人の少女」

「華琳様、春蘭様、秋蘭様あゝ、お帰りなさい」

「ただいま季衣」

「今帰った」

「おお、季衣か！ 大人しくしていたか？」

「はい春蘭様、大人しくしてました」

「うむ、よくやった」

「いやいやお前も大人しくしていて欲しかったんだが」

「と考えると季衣と呼ばれた薄い桃色の髪を春巻の様にシンメトリに編んだ少女は俺達をみている」

「華琳様、この人達は一体誰ですか？」

「彼女達は私に仕官してくれた文官の稟と風、警備隊で働いてもらう、凧、真桜、沙和、でこっちの男が黄巾党を倒すまで力を貸して」

もらう、天の御遣いの北郷一刀よ」

「そうなんですか………わかりました！」

その少女は華琳に聞くとパタパタと駆け寄ってきて

「初めましてっ、僕は許緒、真名は季衣だよ！　これからよろしくっ」

「私は郭嘉、真名は稟です。よろしくお願いします」

「風は程イク、真名は風です。よろしくなのですよ季衣ちゃん」

「私は楽進、真名は凧です。よろしくお願いします季衣様」

「うちは李典、真名は真桜や、よろしゅうなあ」

「沙和は于禁、真名は沙和！　よろしく季衣ちゃん！！」

「俺の名前は北郷一刀、真名は無いから好きな様に呼んでくれ」

「へえ、兄ちゃんが………んにゃ？　《クンクンツ》」

「ど、どうした？」

「………なんだか兄ちゃんから美味しそう匂いがする」

「つまそつな匂い？………《クンクンツ》たとえばどんな匂い？」

「えーとねえ………甘い匂いがする」

「甘い……………あ、もしかしたら」

彼女のいう匂いが確かなら、一つ心当たりがあった

俺は馬から降り、くくりつけていたカバンを開き、水鏡さんの所で朱里と雛里と作った包み紙にくるんでいたクッキーを取り出す

「もしかしてこれか？」

「《クンクン》そうそうこの匂いっ、わぁ、近くで嗅ぐとすっごく美味しそう」

キラキラした目で季衣が俺を見てくる

……………そんなきれいな目で俺を見ないでください、あげたくなってくる

「食べるか？」

「いいのっ!？」

いいのも何も飯を待つ犬の様じゃないか

尻尾があったらもう飛んでいくんじゃないかってぐらい回してるよ
これは

「いいよ、はいどうぞ」

「わぁい、ありがと兄ちゃん! いただきますーす《パクツ》」

季衣は一枚のクッキーを一口でたいたらげ、サクサクと音を鳴らしながら咀嚼する

ゴクツと飲み込むと太陽の様に顔を輝かせ、バツとこちらを見て

「すごい美味しいよ兄ちゃん!!」

「……そっか気に入ったか？」

「うんっ!!」

美味しいと言ってくれた

……何故言い止まったかというと季衣のおでこが太陽光を反射して俺の目を……目がーっ目がーあ!!にしてしまったためだ

「じゃあ、厨房を借りれるなら他の味を作ってみるか？」

「ほんとっ!?! したいしたい僕も作りたい!」

「じゃあ今度、一緒に作るっか」

「うんっ!!」

気をよくしてくれたようでよかった

その様子を見ていた華琳が興味津々に

「一刀? そのお菓子は天の食べ物なの?」

「そうだけど？」

「厨房の許可をあげるから作ってくれないかしら？」

「ああ、別に構わないよ」

「ありがとう、そういえば季衣？ 桂花はどうしているのかしら」

「桂花は仕事をすぐに終わらせて大通りに来るって言ってました」

「そう、じゃあ行きましようか」

華琳の言葉で皆、大通りを移動する

そついや季衣は歩いて帰るのかな？……………城の門が霞んで見えないんだが……………

季衣を見てみると華琳達の後ろを歩いてついていつている

「……………季衣」

「んにゃ？ なに兄ちゃ 《ガバツ》 ちょっ、兄ちゃん！？」

季衣の後ろから脇に手を入れ、担ぎ上げる……………大分驚かれたが気にせず馬に乗っている風の後ろに乗せ、馬の手綱を俺が持つ

「季衣は俺達を迎えに来てくれたんだろ？ なら俺が退くから乗っ
てて」

「僕、別に平気だよ？」

「いいからいいから、俺も街を馬に乗る目線じゃなく、俺の目線で見たいからさ」

「……わかった！　ありがとう兄ちゃん！」

その言葉を笑顔で返す

移動していると町人達が華琳に挨拶している、皆の華琳を王と認めているみたいだな

前を見てみると薄い茶髪に軽いウェーブをかけた少女が駆けてくる

どうやら彼女が桂花らしい、ふと街の裏路地に目を向けてみると、まだ幼い女の子が座り込んでいる

「風、手綱頼んだ」

「え？　お兄さん？」

「兄ちゃん？」

俺が風に手綱を渡し、少女のところに駆けて行く

後ろから俺を呼ぶ声が聞こえるが、もしかしたら迷子かもしれない、第一ここの警備隊に入るのなら迷子を見過ごす訳にはいかない

裏路地に入り、見えたのは薄紫の髪を季衣と同じ場所にくくり、下ろしている少女がいた

少女side

だれかが璃々のまえのひかりをさえぎった

ふりむいてみたら、

白く煌めくすごい綺麗な服をきた男の人が璃々を見下ろしていた

ひかりのせいで顔が見えないから怖い

するとその男の人は璃々と目線を合わせるために屈む

見えた顔はかつこいいお兄ちゃんだった

「どっしたの？」

お兄ちゃんが優しい笑顔で聞いてきた

「……お母さんと、はぐれちゃったの……」

「そうなんだ、お母さんはどんな人？」

「璃々と同じ髪の毛でおっぱいが大きいの」

「そ、そっか……あ、遅れたけど俺の名前は北郷一刀、君は？」

「璃々っていつの」

「じゃあ璃々ちゃん、君のお母さんはこの街に住んでるの?」

「うん、お母さんは遠いお城で働いてるんだけど、お休みが取れたから璃々と旅行に行くことになってここに来て、すごいたのしかつた……… だけど璃々が勝手に歩き回ったから、はぐれて……… うえ………ん!」

はなしていたら思い出して涙が溢れて止まらない

《ギョムツ》

「《なでなで》ふえっ?」

「璃々ちゃんのお母さんは俺と一緒に探してあげるから、落ち着いて」

でもそんな璃々をお兄ちゃんは抱き締めながら、頭を撫でてくれる
いいにおい……… それにあったかい、お母さんに似た安心できる感
覚に涙は止まった

「落ち着いた?」

「うんっ、ありがとうお兄ちゃん」

「じゃあ探しに行こうかっ」

そう言つとお兄ちゃんは手をさしのべてくれた

その大きな手を握り、光が差し込む大通りにでた

一丁 side

「璃々ちゃんのお母さんはいませんか……？」

「お母さあ……ん……！」

俺と璃々ちゃんはお母さんを探している

華琳達に事情を話したら「あなたがその子の母親を探し終わるまで
まってるわよ」と言い、大通りのど真ん中で佇んでいる

……因みに桂花っていう少女には「早く探さないよっ、この幼
女趣味の変態……！」と罵られた

いきなり言われてムカついたがムカつきより璃々ちゃんの耳を塞ぐ
方を重要視したのでスルーした

華琳曰く、桂花は大の男嫌いらしく、そう俺に罵つたらしい

因みに桂花には「よびたいなら呼びなさい……！」と真名を許された

しかし璃々ちゃんのお母さんはまだ見つからず、璃々ちゃんは顔を俯かせて落ち込んだ

「よっとう」

「《ひよい》ふえっ!？」

落ち込んだ顔が嫌で肩車をする

「こっすればよく見えるだろ? いやか?」

「うっん、高くて面白いし、一刀お兄ちゃんのこと好きだからいいよ」

「そっか、ありがとう」

お母さんを探す

璃々ちゃんがお母さんと叫ぶなか、俺は璃々ちゃんのお母さんと叫ぶ
するこ

「璃々!」

「あっ!?! お母さあ〜ん!」

前方から璃々ちゃんと同じ髪の毛をロングにした大人の色気満点の女性が駆けてくる

その姿は母そのもの……………揺れる魔乳が目にも毒だ

とりあえず璃々ちゃんを降ろし、一步後ろから一緒に駆ける

「璃々!!」

「おがざあ〜ん!!」

璃々ちゃんは顔をぐしゃぐしゃの泣き顔にしながらお母さんと抱き合う

その光景を見て俺は、不覚にも感動してしまい涙が溢れそうになるそれを必死にこらえ、二人に歩み寄る

「よかったね璃々ちゃん」

「ありがとうがずとお兄ちゃん!!」

「本当にありがとうございました! あなたのお名前は?」

「この街の警備隊の隊長になる北郷一刀、あなたは?」

「あ、失礼しました。私の名前を黄忠、真名は紫苑です……………もしや天の御遣い様ですか?」

「あ、はい俺が天の御遣いで……………えっ!? 今、真名を……………?」

「やはりそうでしたか。私の娘を助けていただいたのですから真名を許すのは当然ですね。それに噂に聞く天の御遣い様なら信用できますわ」

「そ、そうですね、あ、旦那さんはどちらに？」

「旦那は……………」

旅行に来たのなら父親もいると思い聞いてみる

しかし紫苑さんは顔を俯かせた、あああしまった！

「す、すすすいません！ 俺余計なことを！！」

「いいえ構いませんわ。私も旦那も望んだことでは無かったですし、旦那が戦で死ぬことなど覚悟しておりました」

紫苑さんは顔をこちらに向けて微笑みながら言うが、目は……………悲しそうだった

「でも……………」

「はい？」

「紫苑さんみたいな魅力的な方だったらいい人を見つけれますよ」

「え……………？」

だから言った

まだ幸せを掴めるのなら、探せば見つかると、俺がそう思ったから

その言葉を聞いた紫苑さんは

「ふふっ、貴方は優しい方ですね……ありがとうございます。貴方の様な殿方が旦那様なら幸せでしょうに」

「へ？……うええっ！？ あの……それはどういっ……？」

「ふふっ、そのままの意味ですよ。ありがとうございます。また会えたらお話ししましょうね？ 一刀君」

「あ、はい、また会えたならいくらでもお付き合いします、じゃさようなら」

紫苑さんは璃々ちゃんと手を握り合いながらきた道に帰っていった

しかし途中で璃々ちゃんが手を離し、俺に駆け寄ってきた

「一刀お兄ちゃんちょっとこれ見て」

「ん？ なんだ？」

璃々ちゃんは手を水を掬う様に手を膨らませ、その手を合わせ、何かを捕まえた様な手の隙間を見てと言ってきた

俺は屈み、それを覗く、すると璃々ちゃんはそれを解き

「助けてくれてありがとう！ 《チュッ！》」

「！……！？」

キスをされた

璃々ちゃんは仄かに赤くなりながら紫苑さんに駆けていった

「……………」

俺は放心している……………あれ？ 黄忠？……………アアアアアア
ツ！？

まさか紫苑さんが五虎将の内の一人、神弓の黄忠！？

「うそおおおおーっ!?」

そしてその日、大通りのど真ん中で、天に叫ぶ御遣いがいた

因みに後からきた皆に、冷たい視線を浴びさせられたのは言つまでもない

黒の空間、天の知識と一刀の主夫力、霸王の揺らぎ

皆に冷たい視線を浴びせられながら入城した俺は、まず部屋に案内され、汗だくの制服を道着に着替え、待機している

なぜかと言うと華琳達はさっきの黄巾党を少しだけ捕縛し、尋問を始めているからだ

華琳達は黄巾党の首領、張角、張宝、張梁の三人の本拠地を探しているので、黄巾党の情報は喉から手が出る程欲しいらしい

「しかし……黄巾党は簡単には口を開かないか……」

尋問を始めて三時間、もう外は夕焼けになっている

「あ……やばい……眠気が……」

外の夕焼けを見ていたら慣れない馬に乗ったせいか疲労がピークに達したようだ

「まあ……少しだけなら……」

眠気には人間は勝てない
瞼を閉じたら簡単に夢の中に落ちた

瞼が自然に開く

最初に見えたのは何処までも続く黒

音もしない暗い世界

「……………部屋じゃ……………ないよな……………」

この空間を見ていると島津さんに会った白い空間を思い出した

なんだか似た雰囲気でしたからだ

しかし違う

こんなに静かではなかった

こんなに不安にはならなかった

《ザツ》

後ろから足音がした

振り向くと

「愛紗？ 鈴々？ 星？」

大切な仲間がいた

俺は足を踏み出し、近づく

「なあ三人共、ここは何処なんだ？ なんでこんなところにいるんだ？」

しかし三人は無言

手が触れる所まで近づく

《ブウン！！》

「《ブシュ！》え……………？」

愛紗が全身真っ黒の青龍偃月刀で俺の体を斜めに斬りつけた

「がはっ！ あ……………愛紗何で…………？」

俺はたたらを踏み、後ろに下がる

しかし三人は真っ黒な武器を構え、近づいてくる

『なぜですか一刀殿』

「え……………？」

『なんでお兄ちゃんが……………』

『あなたがなぜ　　に』

「な……………なにを言っているんだ……………？」

俺の問いには答えず、三人が突進してくる

「……………一体……………なんだっていうんだよーっ！っ！」

三人の漆黒の刃は

《バキヤアインー！！》

「え？」

突如現れた黒いマントのような布を羽織った男に叩き折られた
そして男は三人に近づき

《バリヤアン！》

「がはっ 「！ 「にゃあっ 「！ 「ぐぶっ 「！

三人を黒い雷を繰り出し、塵にした

「愛紗！ 鈴々！ 星！ お前、なにをする！？」

男は振り向き、近づいてくる

握られていたのは

「……………示現一刀!？」

真っ黒な示現一刀を握っていた

『なにやってんだ、お前』

「なに……………?」

男が俺に問いかける

顔は布でぐるぐる巻きにして目以外見えない

髪は出しており、黒髪だ

目も黒だ

『お前はなんで闘わなかった』

「それは……………!」

『嫌だったんだろ？ 知り合いを傷付けるのが』

「……………っ！」

『そんなんじゃない、お前は鬼神にはなれない』

「お前は……………誰だ……………！？」

すると男は顔の布を掴み

「……………お……………てく……………！？』たい』お前』はや』は……………！」

見えたのは

『隊長……………！』

「はっ!!!?」

見えたのは寝台の上から見える天井

そして凧、真桜、沙和の三人

三人共、心配そうな目で俺を見る

「隊長、大丈夫ですか？」

「……………ああ、大丈夫だ」

「どうしたん？　なんかめっちゃ苦しそうやったで？」

「そうなの〜、ほら汗ビツシヨリ」

沙和は俺の顔をハンカチの様な布で拭ってくれる

「……………ありがとう、三人共どうしたんだ？」

「大将が、黄巾党の情報はまだ得られないから明日からうちの仕

事の内容を教えるから来てくれて」

「……………わかった、玉座だよな？」

「はい」

俺達は部屋を出た

三人は後ろからついてくる

……………俺は……………まだ覚悟が足りないのか……………？

知り合いを……………仲間を……………傷付ける覚悟が……………

考えながら歩く

「た〜いちよ！」

「《ムギユ》……………沙和？」

「そんな暗い顔しちゃ駄目なのっ、幸せが逃げちゃっつよ？ それに
隊長は笑顔の方が似合うの」

どうやら暗い顔をしていたらしく、沙和が俺の腕にしがみついてくる汗ビッシヨリの腕にしがみついてくるなんて……嫌じゃないのか？
でも……やっぱり暖かさが身に染みる

「……………ありがとな、沙和」

自然に笑顔になれた

沙和はそんな俺に気を良くしたのか更に笑顔になり、腕をさらに抱き締めた

「《にこお》 やっぱり隊長は笑顔が一番なの、ねっ凧ちゃん、真桜ちゃん？」

「わ、わたしは……………その……………」

「そやね、隊長は皆が安心できる笑顔でいてくれた方がいいやろうな。これから自分の部下になる奴等に恐がられへんようにも」

凧は赤くなりながらチラチラ俺を見てはそらすを繰り返し、真桜はニカッと笑いながら言う

警備隊の人にも挨拶しなきゃな

「……………そだな。上の奴がいつも気を張ってたら下の奴等は不安になるよな……………ありがとう三人共」

四人一緒に歩く

これからの仕事を頑張ろうと誓いながら

玉座の間に着き、ノックする

そっぴやこの世界にはノックなんての無いよな？

ほら後ろの三人も頭に？を出してるし

仕方なしに声をかける

返事がしたので入る

そこには卓とその上座に華琳、左右に春蘭、秋蘭、華琳の斜め後ろに桂花が何か大きな紙を抱えている

「やっと来たわね、早くこっちに来なさい。今からあなたたちの仕事の詳細を教えるから」

「ああ、わるい。じゃあ説明頼む」

「ちょっとあんた！ 華琳様になんて口を聞いているの！ あんたは華琳様に尽くすんだから身をわきまえなさい！」

また口調で怒られた………華琳には別にかまわないって言われたし、俺は客将で忠誠心はないんだけどなあ、聞いてないのかな？

………なんだか男つてことに気がいきすぎて話をまったく聞かず、ギヤーギヤー言ってる光景が目に見える

ほら華琳もため息吐いてるし

「桂花」

「桂花？ 君が忠誠を誓っている霸王様がため息吐いてるからあんま時間とらせるなよ」

「なんですって!?!」

「はい華琳様!」

「………おしおきが必要のようね? ……夜、私の閨にきな
ちよ」

「おしおきですかっ!?!……………うへへへ」

華琳がおしおきを告げると桂花は、この世の春が来たーっ!!
と言わんばかりに顔を蕩けさせた

……………やはり春蘭と桂花はM……………いやDMだな(華琳専用)

だって春蘭なんて羨ましそうに桂花を見てる……………秋蘭もだった

……………絶対、うちの三人はDMになどさせん! と心の隅で誓う俺
がいた

「で、一刀? なぜ扉を叩いたのかしら?」

「ああ、あれは天の習慣で室内の人物に自分の存在を知らせる為に
扉を叩く行為で“ノック”って言うんだ」

「のつく……………確かに部屋の中にいきなり入るのは失礼だけど、話
しかければいいのじゃないかしら?」

「じゃあ華琳に質問、静かに過ごしているのにその時間を大声でぶ
ち壊されるのはどう思いますか?」

「……………ええ、たしかにイラツとするわね」

俺と華琳は春蘭を見ながら頷く

……………でも春蘭ならノックで扉を壊すんじゃないかと思った

あとで華琳に教えなきゃなと考えながら卓に着き、話を始める

「そついえば稟と風は？」

「先の黄巾党撃退の後処理をたのんでいるわ」

「たしかに現場に最初からいた人間の方が処理しやすいよな」

「あら、わかっているじゃない」

と心底嬉しそうに顎を少し上に向けながら言ってくれた

季衣はというと、中庭の東屋でみたらし団子を食べていた

なぜと聞くと「僕は難しいことわかんないからここでくつろいでるの」と答えた

……………もう暗くなっているのに団子ってと思い団子を見たら、皿に

山のように積まれていた

そして後ろの籠にも大量のみたらしが……クッキーいっぱい作らなきや

「まずこれを見てちょうだい、桂花」

「御意」

桂花が抱えている大きな紙を卓に広げ、華琳が話し出す

「これが街の見取り図、西、東、南、北の四区画に分かれており、警備隊は総勢四百人で構成され、北郷隊を本隊とし、楽進隊、李典隊、于禁隊の四隊に均等に分けているわ。しかし兵の質は北郷隊が一枚上手で他三隊は新兵に基本的な訓練を施したものになっているわ。さあ一刀、貴方はどの様に警備するのかしら？」

「……………」

四百人……四区画……兵質……時間……

「ちょっとあなた、偉そうにしてたのに何もわからないの？」

.....

「ちょっと聞いて」

「桂花、少し黙りなさい」

「はっ？、はい.....」

「四区画.....四隊.....詰所.....交代制.....《ブツブツ》」

「た、隊長.....？」

「なあ、秋蘭？ 北郷はなにをブツブツいっておるのだ？」

「姉者も黙っている」

「むっ.....」

「《ブツブツ》.....《おっっっ》」

「で、考えはまとまったかしら？」

「ああ、じゃあ話すな」

「まず、各区間に詰所を五個設置する。そこに十人づつ詰め、このりの人を警羅にまわし、時間ごとに警羅を交代、歩く人と待つ人に分ける。そして詰所の担当はなにか起これば詰所から二人位が警羅中の人を何人が集めて鎮圧に向かう。俺達、隊長格は二人一組で担当区画を回り、警羅する」

「それは天の知識かしら？」

「天には“警察”っていう国家権力がいてな、その人達は地域の平和を守ってるんだけど交番っていう詰所みたいのがあってそこに何人が警察官がいて、住民から落とし物を預かったり、事件……まあ喧嘩とか盗みを鎮圧したりするんだ。あ、隊長格が二人一組でまわるのは俺の考えね」

「ふむ……つまり、動きまわり警羅する人間と民の話を聞く待つ人間に分けるのね……しかし休憩時はどうするのかしら？」

「その時に隊長格が回るんだよ。流石に俺達だけじゃ全ては無理だから、詰所には必ずいてもらう。休憩が終わった人から詰所を交代してね」

「詰所の設置場所は？」

「まず区画の真ん中に一つ設置して、この位かな？この円位を担当範囲にする」

地図の区画の真ん中に指をさし、予想させる範囲に指で円を描く

「そして真ん中から四方に詰所を設置して真ん中の詰所の担当範囲に少し交わる位の範囲を担当する」

「そう……………いいでしょう。貴方の案、採用させてもらうわ。明日からよろしく頼むわね」

「ああ、了解した」

「す、すごいです隊長！」

「そうなのー！あんな少ない時間でこんな案がうかぶなんて！」

「……………たまげたわあ、隊長も抜け目ないなあ」

「むう……………秋蘭、どういふことだ？」

「後で教えてやる」

「チツ！」

凧達には尊敬の目で見られ、春蘭は案の定解らなかつたらしく秋蘭に聞くが華麗にいなされ、桂花は俺の考えが採用されたことに舌打ちをし、華琳は何故だか考え込んでいる

「……………一刀？」

「ん？ なんだ華琳」

思考に耽っていた華琳がなにか聞いてくる

「貴方、やはり私に仕えなさい」

「……………は？」

聞かされた話に俺は驚いた……………しかし

「最初に言ったように、俺はまだ旅を続けたい。ここにいるのは黄巾党を壊滅するのに最適だと思ったからだ」

「では貴方は私達の力を評価しているのでしょうか？ なんなら旅が終わってからでもかまわないわよ？」

「……………悪いけど、先客がいるんだ」

それを言うと華琳は額に青筋をピクリと動かした

「その人物は一体誰なのかしら？」

「劉備玄德、今義勇軍の大将している娘だ」

それを聞くと皆呆けた

何故に？

「……………何故貴方ほどの人間があのような小さな勢力の人間に協力するのかしら…………？」

華琳は本物の馬鹿を見る目で

確かにこの時代、力を持つ者はそれ相応の仕官先を選ぶのが生き残る術……………だけど

「この世界に降りて、行き倒れになっていた俺を助けてくれた娘だ。そして……………俺は彼女の生きざまに、考えに共感したから俺は彼女の力になると決めたからだ」

真っ直ぐ目をそらさずに俺と華琳は見つめ合う

「……………あなたは……………」

「ん？」

先に口を開いたのは華琳

「あなたは地位や名誉は欲しくないの？」

「地位や名誉……………か。欲しくない訳じゃないけど、本当に自分の身を捧げれると思えた人に俺は仕えたい」

俺だって一人の人間、自分の何もかも捨てて、欲を一切出さない聖人の様に献身的じゃあない

でも本当に守りたい、力になりたいと思えるからこそ、俺は旅をして世界を知って、旅で得た知識を使い、決めた覚悟を貫く

「……………そう、貴方は春蘭達のように私を慕ってはくれないのね……………」

華琳は何故か落ち込んだ様子で呟く

「会って間もないのに慕うことは無理だよ……………でも」

俺は華琳の肩に手を置く

華琳は顔を俺に向ける

「最初に君に会って、一緒に行動して、君の考えに共感していれば……………俺は君を慕っていたかもしれないけどな」

笑顔で答える

華琳はそれを真正面から受け止め

「最初に……………貴方に会っていれば良かったわね」

俺の肩に手を置き、答えた

その時の華琳の顔は、悲しげでありながら、勇ましかった

「……………話し込んでしまったわね。もう夕食時ね」

「だな」

華琳と俺は玉座の間の窓から見える月を……………満月を見ながら呟きあう

夕食か……………満月……………あ、そうだ

「なあ、華琳」

「何？ 一刀」

「皆に御礼がしたいんだ」

「御礼……………？」

「うん、街に加勢に来てくれた華琳達に、もちろん風達にも」

「なにをしてくれるの？」

「天の料理、ご馳走するよ……………まあ食材は華琳達もちだけど」

「天の料理……………それは私にも作れるもの？」

「華琳に料理が出来るなら……………ね」

「私を見くびらないでちょうだい。料理は私の得意分野よ……………
その料理、私に教えてくれないかしら？」

「もちろん」

「あんだなんか料理ができるの？」

「少なくとも、桂花よりはうまいと思っしょっ」

「なっ!?!?」

「華琳様、私もお手伝いします」

「では私も」

「（春蘭）（姉者）は座って（いなさい）（いろ）」

「むう、華琳さまあ、しゅうらあん」

玉座の間から皆で厨房を目指す

途中で季衣を拾い、後処理を終えた凧と風を誘い、厨房に着いた
俺、華琳、秋蘭が厨房に立ち、桂花、季衣、が卓を整え、凧、沙和、
真桜が食器、凧と風が水を取りに行き、春蘭は………厨房の隅っ
こでの字を書いて拗ねている

「じゃあ、簡単なハンバーグをお教えしましょう!」

何故か満月を見たらハンバーグがうかんだからだ

「「はんーばぐ?」」

「ははっ、ハンバーグな。簡単に言えば、肉の塊だな。塊って言っ

ても玉ねぎをみじん切りにして炒めて、透き通ってきたら牛乳とパン粉を入れた容器に熱が引くまでいれておく、そーいやミンチなんてあつたかな？」

パン粉もあるかわからなかったので探してみれば何故かパンはあつた

なんでか聞くと、遠い国から来た異国人がお近づきの印にくれたらしい

それをなんとかパン粉になるまで細かく刻み、代用した

案の定、ミンチは無かったので華琳と秋蘭に玉ねぎとパン粉、牛乳を頼み、俺は鬼神の如く牛肉を包丁二刀流で「せいやああー！！！！」とひたすら刻み続けなんとかミンチ完成

それをする前に牛肉の脂身を切り取り、小さく刻んだ

これをご飯にかけたら絶品のふりかけにする

下ごしらえを終えた華琳と秋蘭に作り方を一通り教え、熱が引いた牛乳に牛肉をぶち込み、卵を落とし、胡椒をふりかけ三人一緒に手をよく洗う

拗ねている春蘭に手をよく洗わせ、肉をまぜてもらい、三人でハンバーグの形にしていく………春蘭は手についた肉の滑りと格闘していた

「一刀？ 大きさはどうすればいいのかしら？」

「大きいのも二つ、小さいのも一つ、それ以外は均等の大きさに頼む」

「春蘭と季衣に大きいのを、風に小さいのね」

「そうそう」

「北郷、肉を形にできたらどうするんだったか？」

「こつやって、片手ごとに投げて肉の中の空気を抜いて、真ん中に窪みをいれてから焼くんだけ。あ、窪みの理由は焼くと真ん中が膨らみだすからね」

「肉も完成したので火を……………と思ったがつけるのが難しいな……………
…あ、そうだった」

「二人共、ちょっと待ってて」

二人に待つように言い、部屋から示現一刀を持ってきて、太い薪に突き刺す

二人は疑問符を頭に浮かべながら見てくる

示現一刀の電撃を強める、すると

《ブスブスッ》

「「!？」」

薪は煙を出しながら燃え出した

それを「そおうい！」と投げ込み、他の薪に火を移す

「じゃあ焼くな」

驚いて動かない二人をよそめに中華鍋に油ひいてから熱し、油がはぜはじめてから肉を入れられるだけ焼く

華琳と秋蘭は俺を見ながらも一つ一つのかまどで残りの肉を焼き始める

丁度全員分焼けたがソースが無いのを思い出す

仕方無しにソースなしにした…………… 凧には唐辛子ビタビタを入れてやらなきや

焼き終わった鍋から肉汁を一つにしてさっきの脂身を油でカリカリに焼き、肉汁と一緒にさらに焼き、美味しいこんがり肉ふりかけを完成させた

「では皆、手を合わせて」

《パンツ》

『いただきます!』

全員同時に食べ始める

華琳と秋蘭は自分で作ったハンバーグがうまいのか笑顔でよく噛みながら食べる

春蘭と季衣は休む暇なくガツガツ食べ続ける

桂花は悔しそうにしながら食べる

凧の唐辛子ビタビタを沙和と真桜が食べ、火を吐きながら水を飲み干す

凧と風がハンバーグと肉ふりかけをかけた白米を交互に食べながら談笑する

俺は喜んでくれたことに顔を綻ばせながら久しぶりの天の味を堪能した

皆が食べ終え、春蘭と季衣は食後の運動と中庭で手合わせし、秋蘭

が審判を、その戦いを風、沙和、真桜、稟、風、桂花が観戦

俺と華琳は食器を洗っている

「ハンバーグ、とても美味しかったわ」

「ふふっ、お褒めに預かり、光栄です」

「貴方がここにいる間、ほかの料理も教えてくれないかしら？」

「ああ、かまわないよ」

食器を洗い終え、乾くのを待ちながら華琳と談笑する

天はどのような世界なのか

天での俺はどのようなようだったのか

私に仕えなさい。

悪い、無理

と他愛ないことを話す

食器が乾いたので風達三羽鳥にしまいに行ってもらい、鍋を華琳と

しまう

しかし戸棚の一番上に届かない華琳から鍋をひょいと取りしまう
華琳から睨まれたが笑顔でかえす

《グラグラッ!》

『!?!?』

するといきなりの地震

「!?!? 華琳!?!」

「なっ!?!」

すると戸棚からさっきの中華鍋などが落ちてきた

華琳を押し倒し、それを全て受ける

《ガラッガシャンガングワァン!?!》

「痛たた、大丈夫か？ 華琳」

「え……………ええ、平気 一刀！ 頭から血が！！」

「え？ 《ぬるっ》 あちやく、さっきの中華鍋だな。大丈夫、そんなに痛くないよ」

「そんな悠長にいつてる場合じゃないでしょ！？ とりあえずこれでおさえないと！」

「え……………」

「あ……………」

華琳は懐から布を出し、俺の頭に手でおさえる

その動作で俺と華琳の顔は急接近し、俺も華琳も顔を真っ赤に

「華琳様！ 大丈夫です」

「「あ」

多分、中華鍋の音を聞いた春蘭達が華琳の上に跨がる俺と、頭に手を当て俺の顔を止めているような動作をしている華琳を捉えた

「北郷おおおおお！……！貴様あああー！……！」

「うわあああああー！……！誤解だあああー！……！」

持っていた大剣を振り回しながら俺を追いかけてくる

俺は頭から血を流すのも気にせず、絶叫しながら逃げ回った

そして、血を流しすぎて倒れた俺を華琳は部屋に連れていってくれ治療を施してくれたらしい

目が覚めた時に看病をしてくれていた華琳にお礼を言ったら顔を真っ赤にしながら「べ、べっにかまわないわよ………」と返した

………因みにあの地震は春蘭と季衣が戦っていた時に、季衣の岩打武反魔が地面を叩いたせいで生じたものらしく、次の日に謝りに

魏武の大剣 対 蒼雷の鬼神、警備隊の信頼、そして異変（前書き）

ちと時間がかかりました

魏武の大剣 対 蒼雷の鬼神、警備隊の信頼、そして異変

夜が明け、空は白み、朝日が目映く煌めく早朝、城壁を駆ける道着姿の俺の姿があった

しかしその速さは人では到底かなわない速さ

「はっ……はっ……はっ……はあ……ふう……よしっ！ 雷火もだんだん慣れてきたな」

俺は自分が開発した技、雷火を訓練していた

沙和を助けた時に使用した技で、まだ扱いきれていなかったことに不安になったため、華琳に使用許可をもらい、調整をした

「あの……御遣い様？」

「ん？ ああ見回りさんか、悪いなうるさかったか？」

徹夜の警備をしていた警備隊の男性が話しかけてきた

俺は彼が見張りをする後ろを叫びながら走り続けていたのでうるさいと思っただかなと

「い、いえ滅相もございません！ 私の方こそ邪魔ではないかと思っっていましたし！ あ、そのこれをお渡ししよう………」

「ん？ あ、もしかしてそれを渡しに来てくれたのか？」

「は、はいっ」

彼が渡してくれたのはタオルと竹筒の水筒

走り終わった時に使おうと思って城壁の入り口に置いておいたものだ

「ありがとうな、お前はどの部隊の所属なんだ？」

「はっ！ 北郷隊所属です御遣い様！」

「そうだったのか？ じゃあ、これからよろしくな？ 後、御遣い様って言うの止めてくれないか？」

「え？ あ、もしかやそう呼ばれるのがお嫌いだったのですか!？」

すすすいません!」

「いやいやそうじゃなくて! 出来れば北郷隊長とか名前で呼んで欲しいんだ」

「な、名前をですか!?! あの……………私のような一般兵に名を呼ばせるのはどうかと……………」

「そ、そうか? でもお前は警備隊で俺の隊所属なんだろう? なら少しでも身近に感じられる人間関係の方がいいかなって思ったんだけど……………」

「しかし……………」

やっぱり一般兵と隊長じゃ敷居が違うのかな?

でも俺は日本ではごく平凡な高校生だったから気を使わせるのわな……………あ、そうだ

「じゃあ、お前に質問するな?」

「え? は、はい構いませんが……………」

「ん、じゃあ一つ……お前は一緒にいると息が詰まる隊長と気軽に話をできる隊長、どっちがいい？」

「へ？ それは……もちろん、気軽に話をできる隊長の方が……」

「だろっ？ 俺もガチガチの部下と仕事なんてしたくない、だから信頼の証として名前を呼んで欲しいんだ」

「そう……ですか、では北郷隊長、これからよろしくお願いします」

彼は納得したらしく、礼儀正しくお辞儀をした

俺は彼に手を差し出すが、彼はきょとんとしている

「あの……隊長？」

「握手だ。いやか？」

「あ、握手！？ ご自分の体を触らせるといっのですか！？ ……」

…やはり隊長は変わってますね。普通、部下であろうとも気安く肌を触らせるのは隊長格ほどの地位の方々には嫌うと言つのに」

「自分と共に働く人間を嫌っちゃ、仲間なんて言えないだろ？ 片意地はつて、回りを害する奴に隊長になる資格はないさ。……………まあ、なんでも許していたらなめられるけどな」

「ははっ、しかし“天の御遣い”や“蒼雷の鬼神”と呼ばれている貴方をなめる奴など命知らずにも程があります」

彼はそついいながら握手をしてくれる

「あ、隊長一つお伝えしたいことが」

「ん？ なんだ」

「私は夜通しの警備だったので済ませておいたのですが……………朝食はまだですか？」

「えっ？ まだだけど……………」

「では早く行かなければ食いつばぐれますよ？」

「へ？ もうそんな時間なのか？」

「うちの軍は朝の訓練がありますので早く起床し、朝食を済ませ、訓練に参加しなければ担当将軍にしめられます」

「な、なんだって……!?」

「それに今日が隊長の顔合わせも含めた訓練、しかも今回は夏侯惇将軍が担当なので、もし遅ければ間違いなく………殺されます」

「ゲエー……ッ?!?!?」

ちよっ!?!、初めての顔合わせで遅れて、しかも春蘭に全隊の目の前でぶちのめされたら………間違いなくなめられる

「こ、こうしちゃいられん!! わるい、朝食食いに行くわ! 雷火! うおおおおー……ッ!!! 《ズダダダダダダー……ッ!!!》」

「頑張ってくださいあーい!!」

俺は城壁を駆け、城にもどった

彼は俺に手を振りながら応援してくれていた

そして城に着き、厨房についたら食事はまだ残っていたので、それをもらい、共同食堂の様な全ての隊が食事をするところに行った

「隊長！」

「ん？ おお真桜か」

食堂の一角に真桜が一人で食事をしていた

手を振っているので真桜の隣の席に移動する

「おはよう真桜、一人か？」

「そやで、凧と沙和は飯食い終わって部隊を見に行っとる。ふわあゝゝひゅひゅ」

「なんだ寝不足かあ？」

真桜は話をしている最中、のどが中まで見えるほど大きな欠伸をした
よくみたら目の下にクマができている

「仕方ないやん、大将に兵器の開発を頼まれたから……なあ、隊長？　なんかない？」

「兵器？　ん〜……あ、じゃあこんなのどうだ？」

「なにになにつ！？」

俺が話を持ちかけたら身を乗り出して迫ってきた

真桜の巨乳がさらに強調されるポーズを真正面から見た俺は多分、顔を真っ赤にしながら顔をそらした

その行動を見た真桜は自分の今のポーズと俺の視線を見てニタァと笑いだし

「隊長つてばかわいいんやからあ〜 《グイッ》」

「《バフツ》ぶあつぷー!!」

真桜は俺の肩を掴み、その豊満な胸に俺の顔を埋めた

……………息が出来ないうえに、回りの食事をしている兵の視線が痛い!!

「ぶはつあ！ 真桜、こんな人目につく所でそんなことするな！」

「ああん、そんな怒らんといてえなあ。で、なんなん？」

「たくつ……………えつとな、信号弾って言って自分の軍に色で現状や指示を伝えるものなんだけど……………色はこっちの世界で出せるのか？」

「色やったら簡単には出せるけど弾やなくて矢でもいいん？」

「それは別にかまわないよ。でも出来るだけ遠く、高く飛ばせなきゃ意味がない」

「ぶむぶむ……………」

真桜は俺の話聞いて、小さな紙を取りだし、腰に差していた筆で書いている

「なっなっ、他にもなんかない？」

「ん〜……………あっ、煙玉ってやつがあって、地面に投げてる煙を出す退避用の道具とか」

「ふむふむ……………なあ他にもなんかない？」

「ん〜……………わるいもう無いわ」

「そっか、あんがと隊長、頑張ってるわ」

「おう、って早く飯済ませようか」

「せね」

とりあえず食う

すると

「おおい！ てめえ何俺の飯とってんだよ！」

「はあ！？ なに言いがかりつけてきてるわけ！？」

「なんやあいつら、朝っぱらからケンカすんなや」

「ん？………あいつら警備隊と夏侯惇隊の奴だな。止めに行ってくるわ」

「あ、隊長！？」

騒いでいる奴に近寄り、警備隊の方に肩を叩く

「どうしたんだ？」

「ああ！？ あ、御遣い様！ すすすいません！！」

「ああ別にいいから。で、どうしたんだ？」

「聞いてください！ こいつ勝手に俺の飯をつまみやがったんです」

「だからそんなことしてねえっていつてんだろ！」

「なんだとー！」

「こらこら、同じ軍なんだからあんまケンカすんな。とりあえずお前はこつちこい」

「えっ？ あのどこに」

「夏侯惇隊のお前、わるかったな」

「いや、別に構いませんよ」

警備隊の奴を俺の半分残った食事を置いてある席につかせる

食事を先に食べ終えた真桜は俺が来た途端に俺の隣に移動した

「あの………御遣い様？」

「残り物でわるいがこれで我慢してくれ。まだ箸をつけていないのもあるから」

「なっ！？ そんな俺のために御遣い様の分を食べるなど！」

「いいからいいから、実はもう満腹なんだ。食べてくれないか？」

「そういうことなら構いませんが………」

「あと、御遣い様以外で呼んでくれ」

「は………はい隊長」

「じゃあな、早く食って訓練来いよ？」

「は、はっ…！」

俺と真桜は調練場に足を進ませ、調練場に着いた

「あつ、たいちよ〜」

「隊長、おはようございます」

調練場に到着して凧と沙和に会った

凧は小さくお辞儀をし、沙和は嬉しそうに駆け寄ってきて、俺の胸に飛び込んできた

「こ、こらこら！ 兵達の前でそんなことしない！！」

「ええ〜？ あんなウ《ガバツ！》んむっ!？」

「おい〜っ！！ まだ会って間もない部下をそんな風に言っんじゃありません！！」

咎めたが沙和は気にもとめぬ雰囲気でウジ虫と言い出したので言い切る前に口を塞いだ

しかし沙和は口を塞いでいる手をバリヤアツとはがし

「大丈夫なの〜、見ててたいちよ!!」

そついいながら自分の隊に近寄り

「おい、ウジ虫ども！ 集合なのぉ〜！」

『サー！ イエッサー！』

いきなりウジ虫どもと呼ばれたにも関わらず、兵達は従順に従い、沙和の後ろについてくる

なんと……………もう俺直伝、海兵訓練特別講座を彼等に施したと言っのか！？

……………ふははははっ、この北郷、自分の部下の実力を見誤ったわ！

沙和……………いやサーワーマン軍曹、君を新兵訓練特別顧問に認定する！！

と頭の中で認定したが元は華琳の軍なので後で話通しとこ

「止まれー！」

『サー！ イエッサー！』

「注目！ この人が我が警備隊の総隊長、天の御遣いにして蒼雷の鬼神である北郷一刀様なの！ 沙和達は隊長に従うの、わかったか！」

『サー！ イエッサー！』

「ま、まあほどほどにな……………」

ひきつった笑顔、苦笑ともいう顔で返す

それを引き金とし、沙和は解散を言い渡した

沙和はまた抱きつき、凧はモジモジ、真桜はニヤニヤしている

「全隊整列つ……………」

『はっ……………』

そんな俺達に春蘭の怒号が響く

夏侯惇隊はもちろん、親衛隊、夏侯淵隊、警備隊が一気にズラリと並ぶ

俺達隊長格や春蘭達將軍は各隊の目の前に並ぶ

副長に点呼を取らせ、終わるのを待つ

しかし

「警備隊、一人足りません！」

「何いー！？ 初日から遅刻などとは、なめているのか！？」

春蘭の怒りの叫びが響く

そこに

「申し訳ありません！！！」

遅れて来たのは夜通し警備の彼だった

なんで俺に教えてくれた彼が………と考えていると

「貴様っ！ 訓練に遅れるとどうなるか、わかっているのだからな
！！？」

「はっ！ 覚悟はできております！！」

「そのいきや良し！ 歯を食いしばれ！！」

春蘭は、目を閉じ、歯を食いしばり、介錯を受けるが如く座する彼に模擬刀の腹を振り下ろした

《ガキヤァン！》

『ザワツ！！』

「え？」

「なっ！？ 北郷！ 何をする！？」

「待ってくれ春蘭！ こいつは俺の隊の奴なんだ、話を聞かせてくれ！！」

俺は彼の前に立ち、春蘭の一撃を受け止めた

彼は何が起こったかわからないといった顔で俺を見上げている
整列している者達は何が起きたかわからないが剣を打ち合った音が
響いたことに驚いている

「……………いいだろう、だがそいつの言い分が不当なものだったら、
お前にも罪を負わせるぞ？」

「ああ、覚悟の上だ」

俺は彼を立たせ、隊から離れ話を聞いた

「なあ、なんで俺に教えたお前が遅れちゃったんだ？」

「えっと……………隊長を探していました」

「俺を？　なんで」

「これを……………」

「……………?!?!?」

彼が俺に渡してきたのは……………タオルだった

「まさか……………これを渡すために俺を探していて遅れたのか？」

「はい、これは隊長の天から持ってきた品なのでしょう？　なら、誰かに預けるより直接お渡ししたほうがいいと思い、遅れました」

「お前は馬鹿か？　そんな物のために死ぬかも知れないのに」

「隊長は私に握手を求めてくれました。信頼の証とも言える握手を、ならば私は隊長のために働きます。隊長の大切な品が落ちていたらそれを隊長に届けるのは当然、隊長を見つげられず遅れたのは私の力不足、ならば罰は受けます」

「……………わかった、行こう」

「はっ……………」

俺は話をまだ言いたかったことはあったが、ここまで聞けば俺は何をすべきなのかを理解し、春蘭達のもとへ戻った

「で、そいつの言い分はどの様なものだった……………」？

春蘭が躰を貫くような視線で見てる

彼は足を震わせながらも春蘭から目をそらさないようにしている

俺は……………

「彼は……………なにも悪くない」

「！？ 隊長！」

「どっぴうことだ……………」？

彼は俺の発言に身を乗り出すが、彼を片腕で遮り笑顔で小さく「いいんだ」と囁き、彼を尻達に連れていかせた

俺は春蘭に向き直り

「彼は早朝、鍛練をしていた俺が持つて行った物を渡すために俺を探して遅れた。ならば罰は俺だけが受けるべきだ」

「だか奴が遅れたことに変わりはない。お前は奴の分の罰を受ける
と言っのか？」

「ああ、彼が遅れたのは俺の間違いのせいだ。ならば彼の分の罰も
俺が受ける。煮るなり焼くなり好きにしてくれ」

抵抗の意思の無いように手を上げる

すると春蘭は

「ならば……………私と真剣勝負をしる。それがお前の罪だ」

そう言い春蘭は腰に差していた七星餓狼の切っ先を俺の顔寸前に突
きつけてくる

その時の春蘭の目は、鬼神と言っても過言ではないほど殺気を放っ
ていた

整列している兵達からも小さな悲鳴が聞こえる

「わかった……………兵達を下がらせてくれ、周りを巻き込みたくな
い」

「全隊下がれ！！これから新しく警備隊総隊長になる天の御遣い

の実力をその目に焼き付けろ！！！」

『はっ！！！！』

調練場のど真ん中に俺と春蘭の戦場が出来た

使うのはお互いの得物、示現一刀、七星餓狼を構える

ふと周りを見てみると華琳が調練場の壁の上から秋蘭、桂花、季衣を従え観戦している

周りを兵達が囲み、それぞれの隊の前に凧、沙和、真桜が見守る中、夏侯惇隊の中から

「夏侯惇將軍！ そんな胡散臭い奴、コテンパンにしてくださいよ！！！」

一人、俺を馬鹿にしてきた

一人が言い出したら止まらない、他の兵からも野次が飛ぶ

警備隊から夏侯惇隊の奴等を怒る奴等が出てきて、周りが一触即発の雰囲気になってきた

「黙れっ！！！！！！！」

『ビクッ!?!?』

すると春蘭が両隊に叫んだ

その一言で場は沈黙し、春蘭が殺気を飛ばす、正に戦場といっても相違ない場に変わった

「貴様らは私と北郷の闘いを静かに見ていれば良いのだ！ 自分の格を下げるような発言は控える馬鹿者共!！」

『は、はっ!?!』

「すまないな北郷」

「いや、構わない。元はと言えば俺の不注意で起きたことだ、どう言われようと俺に弁解の余地はないよ」

「そうか……………では行くぞ……………?」

春蘭は片腕で七星餓狼を軽々と背に回し、片手を握り、甲を下に向け構える

「隊長！ 頑張ってください！！」

すると彼が俺に声援をした

それをきに、警備隊から声援が轟く

夏侯惇隊からも声援が飛ぶ

「「応！！」」

俺と春蘭が同時に応え、同時に駆け、闘いが始まった

《「グアギアイン！！！」》

華琳 side

「流石ね」

「はい、姉者があれほど相手に気を回すのは久しぶりです」

「まったく、相変わらず猪なんだから」

「兄ちゃんも春蘭様もがんばれー！」

城壁の上から見ている四人が話し合う

華琳は春蘭にあそこまで言わせたことに感心し、秋蘭は姉の勇ましい姿と相手の一刀の真っ直ぐさに感心している

桂花はまだ弱くだが皮肉を言い、季衣は二人共を応援している

「（まだ日は浅いの一人とはいえ兵に慕われているなんて……それに僅かながらも他の隊員も心を開きだしている……なぜあの様な人物が我が側にいないのか……劉備玄德……あなたが羨ましいわ……）」

華琳は心の中で落ち込んでいた

そしてこの世界にいる天然娘はくしゃみをした

「しかし…………… 凄いわね……………」

「はい…………… まったく……………」

華琳と秋蘭は闘っている二人の姿を見て、あまりの光景に呆れた様子で話していた

見えている光景は簡潔にいうと…………… 鬼と鬼の闘いだっただけ

一刀side

「ぐっ！ 相変わらず力自慢だな春蘭は！」

「当然だ！ 私は相手を一撃で倒すために力を重点的に鍛えている
！！ 力自慢なのは当たり前だ！！！」

「だけど俺も鬼の異名を持っている男だ！　そう簡単に押し負けはしないからな！！」

「そうではなくては面白くない！　お前の全力、私に見せてみる！！」

「言われなくても！！！」

俺と春蘭の一撃目は真上からの振り下ろし、そしてつばぜり合いに発展し、お互いを押し合っている

しかし流石は春蘭、俺同様まったく動く気配がない

埒があかないな……………よしっ！

「《グッ！》はあっ！！！！！」

「くっ《フワッ》なにっ！？」

俺は自分の刀に力を込めた、春蘭は一度自分の方向に押されたため力を込め、押し返そうとした瞬間、俺に春蘭が押し返してくると同時に剣を引いた

春蘭の剣は押し合うものが無くなったため、上に上げてしまった

そして上げてしまったため、から空きになった胴に峰打ちを放った

「《カキイン！》なんの！」

「くっ！」

しかし春蘭は強引に腕を曲げ、俺の一撃を受け止めた

「次は私の番だ！！」

「来いっ！」

春蘭は受け止めた俺の刀を跳ね上げ、袈裟斬りを放ってきた

俺はそれを一瞬で見極め、上段に構え両足で後ろに跳び避ける

しかし春蘭は外したとわかったらしく、俺の腹辺りで剣を止め、突きを繰り出した

それを体を捻るように紙一重で避け、捻った時の回転を利用して、春蘭の肩当て目掛けて、今度は刃を振るった

「《バカァン!》ぐあっ! ぐっ、はあああああっ!!!」

「《ゴキァァン!》うお!?!」

春蘭は剣を肩当てで受け止めたが、伸ばしきった俺の腕が動かないことをいいことに俺の刀をおもいっきり弾いた

その力に刀を落としそうになったがなんとか握りしめたが、威力の高さに体ごと回転した

「はぁ……はぁ……ははっ、やはりやるな北郷」

「ふう……ふう……ふふっ、春蘭こそ」

俺達は得物を構え直した

俺は自分の体右側の腰辺りまで刀を下ろし、刀身を後ろに向ける

春蘭は先程同様の構えをしているが手を開いている

たぶん、両腕の攻撃がくる

「行くぞ!!!」

「応!!」

予想的中、春蘭は両腕で袈裟斬りを放ってきた

俺はそれを刀を右斜め下から左斜め上に振るい、その剛撃を地面に引っ掻けて付加を加えた斜め一閃で跳ね返した

「まだまだあつ!!」

「なにいつ!?!」

しかし春蘭は再び袈裟斬りを放ってきた

俺はさつきとは逆方向に斜め一閃を放ち、また弾く

「まだまだまだまだあつ!!!!」

「うええー!?!?!」

しかし春蘭はさつきより剣速を早めた袈裟斬りを再び放ってきた

そして俺も斜め一閃で返そうとするが早さに追い付けないと思い、

雷火を足と腕に同時に流す

そうすることで、付加を加えた斜め一閃を春蘭に負けない剣速で放つことが出来るようになるが、複数箇所を電撃を加えるのは初めてなので筋肉がミシミシと音をだしているがそうもいつてられない！

！！

「はああー！ー！ーっ！！！！《ギアン！ギアン！ギアン！キーン！ガキヤアン！ガン！カキーン！キンキンキン！》」

「うおおおおー！ー！！！！《ギアン！ギアン！ギアン！キーン！ガキヤアン！ガン！カキーン！キンキンキン！》」

剣劇が始まる

周りの石は吹き飛び、地面にはヒビがはいり、金属音が鳴り響く

『隊長おおおおー！ー！！！！』

そんな刹那の中に聞こえてくる警備隊の俺を呼ぶ声

凧、沙和、真桜の声に混ざり、男達がよく聞こえる野太い声が聞こえる

「くっ！……………はあぁ————！！！！！！」

剣劇の激しさが増す

春蘭は少しずつ守りにまわりだす

そして

「見えたっ！！」

「《ギヤアイン！！！！》ぐわぁ！」

守りにまわりだす瞬間、一瞬、ほんの一瞬だけ生じた隙を見逃さず、
春蘭の手元に刀を振るった

春蘭はなんとか鐙辺りで防いだが力負けし、地面を滑った

「行くぞ！！」

「！！！？」

春蘭が動けない瞬間を見逃さず、新しい技を放つ

「なっ！？ どこに」

春蘭の視界には俺はいない

「どこに 《ドコッ！》がはっ！」

しかし春蘭は背中に一撃を受ける

振り返っても俺はいない

だが

「《バカッ！ドコッ！メキッ！》ゴハッ！ い、一体なんなんだ！
？」

少しずつ攻撃が早くなる

そして春蘭の周りには人が走ったようには見えない線がはしっている

《ガインーゴキヤアーン！バカッ！ドコッ！ザンッ！キンキンーギイ
アーンギヤリヤア！》

「く……そ……っ！ まだ……！」

「終わりだー！」

「！……！？」

そして春蘭目掛けて俺は横一閃を放ち、春蘭の後ろに斬り抜けた

『示現流・斬狼』

《ザンッ！……！》

「かはっ……！」

春蘭の悲痛の声が聞こえる

やった……………勝つ

「まだあああああ！！！！！」

「なっ …… !?」

春蘭が背後から袈裟斬りを放ってきた

俺は春蘭の首目掛けて刀振るった

「……………」

そして春蘭は俺の頭寸前で、俺は春蘭の首寸前で
急所を捉え、停止した

お互いの

こうして、鬪いは引き分けに終わった

そして互いに停止し、互いに倒れた

警備隊と夏侯惇隊が俺達を医療室に運び、その日は俺と春蘭は仲良く、寝台の上で過ごした

警備隊の皆は俺を認めてくれた

この日から、俺は警備隊総隊長として認められた

しかし誰も知らない

一刀が春蘭に斬狼を繰り返していた最中

一刀の目が、髪が

黒く染まっていたことに

魏武の大剣 対 蒼雷の鬼神、警備隊の信頼、そして異変（後書き）

示現流・斬狼

雷火の応用

雷火で足、腕を強化して狼の様に動き周り、四方八方から連撃を与え、最後に横一闪を放ち、相手を斬り抜ける

一刀の成長、力の使い分け

一刀の蒼雷の力の使い方は二つに分かれています

今回はその説明を例を出して書いていきます

そして……………一刀君どうぞ！！！！

「おはようございます、もしくはこんにちは、こんばんは、この作品“真・恋姫十無双〜鬼の一刀〜”主人公、北郷一刀です！今回は……………なんでこんな事書き始めたの？」

なあに、それは簡単なことだ。一刀君？ 君は春蘭と闘う時、蒼雷の力を使っていたけど、君の力を使う時はどの様な時だった？

「えっと……………何かを守るとき……………だね」

しかし春蘭と戦っていた時は使ってたよな？ あの闘いは何を守るときだったんだ？

「あの闘いは警備隊の彼……………いや警備隊皆の威厳を守るためだ。あのままはじめを示していなければ、他の隊から馬鹿にされるから

ね

なるほど………しかし君が使った技は全て蒼雷をそのまま使った技ではなかったよな？

「そりゃあ……“来迅”とかの放出系は間違えれば相手を消し炭にしかけないからね。その点“雷火”は俺の体自体を強化した技だから使ったんだ。斬狼は蒼雷を付加しなければただの斬撃だから使えた」

そうそれだよ……！

「うわぁ！ どどどうしたの戒人君!？」

今回はそれを説明する回なんだよ！

一刀君は自分の力を使い分け始めれるようになってきたんだよ！

「俺が力を………?」

そう、最初の設定で君は示現流を使いきれないと書いたけど、恋姫の世界で少しずつ成長してきているんだ！

「そうなのか……………そうなんだ！！　ありがとう戒人！　……………
あ、ごめん！呼び捨てにしてしまった！」

……………ははははははっ！　貴様、誰が貴様を作り出したと思っ
ているー！！

「あわ、あわわわわ……………！！！」

え？　雛里か？　あわわ軍師か？　貴様、なにこんな時にネタをし
ている！　貴様に罰を与える！　こころして聞けえい！！

「《……………くっっー》」

貴様の罪は……………これから俺に呼び捨てで呼ばれることだ！！

「……………へっ？」

わかったら返事しような一刀？　あと俺のことは呼び捨てで構わな
いから

「えと……………あの……………なんで……………？」

………恥ずかしくて言いたくなかったんだが、俺が恋姫を好きになっただのは彼女らがかわいかったからじゃあないんだ。………
………一刀、お前が主人公だったからだ

「……………え……………」

俺はアニメの様な百合アニメは好きじゃなくてな。お前の様なプレイヤーから好かれるエロゲの主人公は数少ない……………どっかの誠など論外だ！ 誠死ね！！

「ちよっ！ 落ち着いて戒人君！」

ハッ！？すまない取り乱した……………戒人……………な？ 俺はぶつちやけて言うとお前の名前が面白かったから知り始めたんだ。しかし知っていく毎にお前の魅力に惹かれ、こうして小説を書き始めたんだ

「そうなんだ……………ありがとう戒人。俺のことを気に入ってくれて」

ふっ……………俺はお前が自然に出す魅力に惹かれたんだ。胸を張ればいい……………つたく、なに恥ずかしいことしめじみ話させてんだ！
おらっ、そろそろまとめんぞ！

「ふふっ、ああたのむ」

まず一つ

既に存在する示現流の技は蒼雷を常に発動している技もあるが、一
刀はその蒼雷を発動することもできるが、発動しないこともできる

一つ例を出そう

『示現流・撃冒』

この技は簡単に言うと前に宙返りして剣を叩きつける技だ

それに蒼雷を付加すると地面を割るほどの剛撃になる

しかし一刀は蒼雷を付加せずに戦うことができる

しかし来迅は放出系の技なため使用不可なんだ

二つ目

一刀は力を二つに分けている

雷火などの自分の身体の強化、来迅などの蒼雷をそのまま放つ技、
剣に付加して相手を消し炭にしてする技

そして手合わせなどでは身体強化と蒼雷付加無しの技で戦っている
これが今の一刀の力の使い方だ

「そうなのかあ〜……………俺も少しずつ強くなってるんだ……………」

そうだ。お前は少しずつ天の御遣い、蒼雷の鬼神に近づいているんだ
これからもその力を間違わず使って、お前の信念を貫いていけ

「ああ、ありがとう戒人……………そういやさ、あの夢に出てきた

」

さあて！ そろそろこの回を終わらせようか！！ さあ一刀、そろ
そろ目を覚ませよ！ じゃあな！！

「えっ！？ ちよつ、戒 ……！？」

そして一刀は目を開いた

みえるのは寝台から見える天蓋

窓からは光がさしている

外からは少ないが足音がする

「隊長！ おはようございます」

そして扉の向こうから風の音が聞こえる

返事をし、手早く制服に着替え、腰に示現一刀をさし、外に出
ていった

しかし、一刀は夢を覚えてはいなかった

頑張れよ……一刀

警備隊覚醒、悪頼の悲しみ、武神と鬼神 共闘す

警備隊の隊長になり、日々を過ごしてきた俺はいつもの様に早朝鍛練に励んでいた

しかし初日と同じではない

「うおおおおおお！！《ズダダダダダダダァー……ッ！！》
《》

「はあああああ！！《ズダダダダダダダァー……ッ！！》

現在、凧と雷火 対 氣での強化勝負をしている

今日のお勤めは非番で俺は早めに起きていた凧を誘い、今に至る

この発端は氣と蒼雷の力について話していた時に凧が

「隊長の力は氣と似ています。一度私と競いませんか？」

とキラキラ輝く目で提案されてしまったては仕方ない

「戦目は脚力強化勝負」

城壁を凧と共に本気で駆けている

「流石だなっ凧！」

「いえ！ 隊長ほどではありません！ しかし隊長は鍛練前より遅くなっていますか！？」

「あの時は最初だったからな！ 加減をせず、危険な電量で強化していたから速かったんだ！」

「では隊長はまだ本気ではないと！？」

「そうとも言うがまだ扱いきれていないだけだ！」

「……………では……………私は本気でいかせてもらいます！！《グワァン》」

「《ビュフォンー!!》なにいつ!?!」

走りながらの会話の最中、風が速度を上げ、俺を風のように追い抜かした

……フハハハハ!!! そっちがその気なら仕方がない!
俺の本気………見せてやるよ!!!

「……うううおおおおお!! 《ビキビキ!》」

足が軋む、そんなこと気にせず虎が獲物を見つけ、狩りを始める前の臨戦態勢が如く構える

雷火の強化、いけるところまで強化して………風………お前を超えろ!!!

「シッ!!! 《ダンッ!》」

一気に駆ける

できるだけ風の抵抗を抑えるため、腕をまるで魚のヒレのように投げ出す

所謂、ナ ト走りて風の背中を追いかける

足が地を踏むたびに城壁の石にヒビが入る程の脚力で風を追いかけるが、地を踏むたびに足は悲鳴をあげる

しかしそんなこと関係ない

勝負をするならば必ず勝て！ じいちゃんとの手合わせで決めたこと、だがじいちゃんには一度も勝ててはいない

しかし相手は風だ。ならば無茶をすれば……………勝てる！

「うおおおおおお！！《シュフワン！！》」

「《ブオン！》なっ！？」

まさに音速、俺は風を追い抜いた

しかし音速は長続きせず減速した

「まだです！隊長おおお！！」

しかし凧も負けじと俺にならんだ

「！？ まだ食らいついてくるのか！？ ……いいぜ、来い…
…来いよ…！！ ……いいいいいいいい！！！」

「隊長おおおおおおお！！！」

くそ熱い空間が広がる

例えるなら某炎の妖精や自分の内なる力、憑神を引き出すときの某
ツンデレ銀髪ヘソだし男（声優Sさん）

俺と凧はどちらももひけをとらずに駆け続ける

そしてゴール見えてきた

警備の一人が目印に立っているそこにラストスパートをかける

「うおおおおおらああああー！！！！」

「でりゃああああー！！！！」

そして

《《シユパアンー！！》》

「よっしゃあ！！ 勝つ 《ビッキインー！！》 うぎゃあ

ああー！！！！？」

「負けて 隊長！！？」

ゴールには俺の方が速く着いたが強化を解いた途端に両足に筋肉が
突っ張る感覚

うん、つつたね ってホギヤアアアアア！！！！

「うおだだだだだだ！！！！」

「た、隊長！？ 大丈夫ですか！？」

「隊長を押さえろ！待っててください隊長！ 今治します！ ……
…ハアアアアアア！！《カアツ！》」

足をつり、城壁をごろごろと悶える俺に駆けよって来る警備の男性
と凧

警備の男性は凧に指示され、俺を取り押さえ凧は足に両手を翳す

すると凧の手は朱く輝き、足を暖かく包む

少しずつ、痛みが引いていき、完全に治った

「あれ？ 痛みが……………？」

「治まったようですね、よかつ……………たあ……………《ドサマッ……………！》」

「凧!?」 「楽進様っ!?!」

痛みがひき、凧が手をどけ言葉をかけた途端に凧は倒れた

俺と男性は凧に駆け寄り、顔を覗く

その顔は……………我が生涯に一片の悔い無し!!…!! と言わんばかりの凧々々目を瞑っている凧の顔が って!

「凧いつ! それは死亡フラグだ! 頼むから目を、目を開けてくれえ!」

どどどどつすれば!?! このフラグを叩き折る手段は……………ハッ!?!
? そうだ!

「おゝ前っはまだっいゝきているっ!」

「《チーーン……………》」

「お願いだから目を開けてくれえ……………!!」

うわぁ~~~~ん！ すまん風い！ お前の死亡フラグをへし折るこ
とはできなかったー！

「隊長、隊長」

「ひっく、ぐすっ、な、なんだ……………」

風の顔の前でぐすっっている俺の肩をチヨンチヨンとつつきながら呼
んできたのは警備の男性

「楽進様……………」

「ん……………」

「寝てます」

「……………」

風の口の前に手を翳してみると……………息が手に当たる……………

耳の口に近づけると……寝息が聞こえてくる

脈は………ある

「よ………よかったあ〜………わかるいけど俺のタオル………汗ふき布と竹筒持ってきてくれるか？」

「はっ………隊長はやはりお優しいですね」

「………ははっ、ありがとう」

彼は笑顔で駆けていった

………随分打ち解けてきたな、やっぱり仕事をするなら仲良くしたいと思ってたからよかった

そんなことを考えながら尻に膝枕をする

心の中で「ありがとな」と言いながら頭を撫でながら太陽を眺める

「隊長、どつぞ」

「ん。ありがとう」

彼が持つてきてくれたタオルをもらう

彼は「では」と持ち場にもどっていった

俺は「目印役、ありがとな」と手を振りながら見送った

「……………」

凧の顔を優しくタオルで拭う

汗を拭き終わり、竹筒の水を飲む

走りで渴いた喉を少し冷たい水が潤していく

タオルを水で濡らし、凧の額に置き、目覚めるまで待つが起きる気配がない

城壁の兵達が少しずつ城に帰っていく

太陽の向きを見てみればそろそろ朝食の時間だな

そついや凧は非番じゃないよな

「よし………しよー！」

「ん………」

凧のおんぶして城壁を下りる

凧はつめき声を上げたがそのまま城に歩く

「……………一刀？ あなた凧に何しているの？」

「？ ああおはよう華琳。なにして

」

城の東屋……………まあ休むための建物を目指し歩いている時に華琳様
登場

すこし蔑んだ目線で見ってくるが気にせず理由を話す

「はあ……………あなたまさかその理由でそんなことしながらここま
で来たの？」

「そうだけど？」

まあここまでくる間に会った兵や侍女にはニヤニヤされながら茶化
されたり、穏やかな目線でみられたりしたけどさ

「やっぱりあなたって真桜と沙和が言ってた通り天然なのね」

「て、天然……………？ 俺が？ そんなことないよ、桃香じゃあるま
いし」

「ふ……………ん？ 桃香というのは劉備の真名かしら？」

「あ……………うんそうだよ」

また蔑んだ目線で見ってくる…………… 一体なんなんだ

「で、なんでここに居るんだ？」

「貴方に……いえ将全員に今日の仕事は特別なものだから朝練が
終わり次第に玉座に集まってほしいの」

「わかった風には俺が話しておくよ」

「頼んだわよ」

華琳はザッザッと足早に他の将を探しにいった

東屋に着き、座らせようとしたら

「ん……………?!? た、たたたた隊長!!?」

「おはよう風、大丈夫か？」

風が目を覚ました

丁度風を抱えて座らせようとしていたので顔がほんの数センチまえ

なので真っ赤な顔がさらに真っ赤に見える

「たたたた隊長、なにを……………!?!」

「いや凧がいきなり倒れたからここまで運んだんだよ。おんぶして」

「なっ! 《かあ~~~~》……………!》」

教えたら更に燃え盛る凧の顔

「そついや凧なんで倒れたんだ?」

「……………はっ!? あ、あれはそのっあのっ……………!」

「落ち着け凧」

わたわたと落ち着かない凧を落ち着かせ話をきく

あれは治癒功といって自分の気を相手に流し患部を治すものなのだが、凧はあまり慣れていないらしく倒れたらしい

「そうだったのか……まったくあんなことの為にそんなことしないでいいのに、凧が倒れて大変だったんだから」

「うっ………すみません」

凧は俯いた

「凧は女の子なんだから無茶をしないでくれよ？ お前は俺にとっ
て大切な人なんだから」

「へっ？………ふへえー！？ わ、わわ私が大切！？ 女の
子！？ 私のような傷だらけの堅物の男より強い私が！？」

率直に意見を述べてみればまさに大噴火の凧の顔

「男より強い女の子なんてこの世界にはばかほどいるよ。凧は俺の
為に慣れていないことをしてくれたんだ。当然だよ」

「あ………えっと………ありがとうございます」

真っ赤な顔も少し治まり、頭をさげる凧

その頭を撫でる俺

そしてまた真っ赤になる凧

華琳の要件を話すと凧は疾風の速さで調練場に駆けていった

俺はなにをすることもなく東屋の腰掛けに座る

すると調練場から「隊長が遂に凧を!!」や「むう、隊長のすけこましい!!」や「隊長の華が増えたぞ!!」『ヒヤッハー!!』などの歓声が聞こえてきたがスルーだな、うん

「あつ、兄ちゃんいいところに会った!!」

「おおっ!? 季衣か、どうしたんだ?」

すると季衣が紙と筆を持ちながら駆けてきた

「兄ちゃん! 手紙の書き方教えて!」

「て、手紙？ 季衣、誰に手紙書くんか？」

「僕の友達の流流に！」

「流流？ それ真名？」

「ああごめん。典章って言って料理がうまい女の子なんだ！」

「へえ、そんな子がいるんだ。……………手紙が出せるほどになつてきたんだなあ」

「前から出してたから、習慣みたいになつてたんだ。ホントに平和になつたらこっちにくるって言つてたから兄ちゃんにもいつか会えると思つたよ？」

「そっか、楽しみにしておくよ」

季衣から紙と筆を渡してもらい、教えようとしたら季衣が俺の膝に乗っかってきた

正直書きにくいがにっこり笑顔の季衣を見るとそう悪いものじ

やないし、いいかつ

「ここをことう書いてから書きたい内容を書いていったら読みやすく書けるんだよ」

「へえ〜、ありがとう兄ちゃん！ 僕、頑張るよ!!」

「ああ、そろそろ調練も終わるだろうし玉座に行くか」

「うん！」

季衣と手を繋ぎ、玉座に足を進める

途中で城に入っていた商人さんに手紙を預け、玉座の間に入った

「……………一刀？ 貴方はどれだけ私のかわいい仲間を骨抜きにすれば気がすむのかしら……………?」

「ほ、骨抜きいつ!? そんなことしてないだろっ!?」

「なにいつてんのよ! この種馬!」

「なっ！？　だれが種馬だあっ！！？」

「あんたにきまってるでしょ！！」

入った途端華琳が目を瞑りながら仕方なさそうに骨抜きとおっしやり、それに抗議したが桂花がさらに衝撃的なことを言い放つ

天でも経験無しの俺が種馬なんてあり得ないだろう！？（いいえ、鈍感なだけだ！by戒人）

「まあ構わないわ。非番の貴方にはわるいけど、春蘭と季衣と一緒に南部の黄巾党を討伐、及び首領格の捕獲を頼みたいの」

「……………南部か……………そついや黄巾党が現れる証言が多い場所だな」

「ええ、官軍も盛んに討伐にくる場所、それだけ敵の量も多いでしょうから出来るだけ戦力は多くして行きたいの。でも貴方の隊は仕事があるから貴方は二人の隊の中に混じって欲しいの……………それに官軍のもの達は無礼は出来ないから」

「無礼……………ああ」

「？ なんだ？」

「うにゃ？」

「わかるわね？」

「ああ、了解だ」

春蘭と季衣を見ながら頷く

春蘭と季衣がお偉い方の相手を……………うん、無理いゝ

「じゃあ仕度するわ」

「ええ早めをお願い。それと隣国の呉の国境を越えないように」

「隣国の呉……………？」

「ええ、江東の虎、孫堅の国。強大国だからあまりいざいざは起こ

したくないのよ」

「そりゃな孫呉は歴史のある国だし、敵対したら勝てるわけないか」

俺は玉座の間を飛び出し、部屋に行き道着に着替え門前に行ったが
まだ二人は来てないようだ

「あの……………」

「ん？」

前から話しかけられ振り向くが人はいない

「し、下です」

「下？」

いわれた通り見てみると……………季衣のようにデコを開けているエ
メラルドグリーン髪のスパッツの位置がおかしい少女が大きな円盤
のようなものを担いでいる

「えっと……………君は？」

「初めまして。私の名は典章、許緒の友人なのですが……………許緒を知っていますか？」

「典章……………ああ君が季衣が言った料理のうまい友達の女の子か」

「季衣の真名をしってるんですか！？ あの貴方は一体……………？」

「ああ、俺は」

「流流う……………っ！！！！」

「へっ？ キャア……………ッ！」

「うおっ！？ 典章……………！！？」

典章に自己紹介を、と思った矢先に季衣が典章に飛び付き、二人ともゴロゴロと転がった

「久しぶりー流流！ いつの間にかここに来たのー!？」

「ちょっと季衣落ちて着いて!! とりあえずどいて！」

「うにゃ、ごめん」

「だ、大丈夫か二人とも？」

「あ！ 兄ちゃん！ とう！ 《タンッ》」

「《ガバッ》とつとと！ 季衣ホントに落ち着けて！」

「ごめんなんだか嬉しくって！」

典章から退いた途端に抱きついてくる季衣

でもこれほどはしゃいでいる季衣を見ているとそれほど嬉しいのだ
ろっ

「あの季衣？ この人は？」

「あ、ごめんね流流。この人は天の御遣いの兄ちゃんだよ」

「この人が……………」

「あゝ、うんそう言われてるけどそこまで偉いわけじゃ無いから固くならないでね」

「そんなことないよゝ、あつ流流、流流。兄ちゃんね流流と同じぐらい料理上手いんだよぉ？」

「そ、そうなの?!?!？」

「うん！ それに僕も流流も知らない料理知ってるし、食べたこともないお菓子も作れるし！」

「ほへえ……………《キラキラ》」

「うっ……………」

典章がキラキラした目で俺を見る……………そんな目で俺を見るなあ

――！

「そ、そんなことより！　なんで典章がここに来たんだ？」

「あ、そうだよ。なんで流流がここに？　さっき手紙だったのに」

「そ、それは……………」

「……………なにかあったのか……………？」

話を聞いてみる、典章のいた村は南部にあったのだが黄巾党に襲われたらしく逃げてきたらしい

話を続ける中で少しずつ典章は俯きだした

「流流……………」

「……………ぐすっ……………だ、大丈夫だよ季衣」

「《……………スッ》」

「《ピッ》えっ……………御遣い様……………?」

典章が目尻に涙をためていたのが嫌で、指で払う

「ごめんな……………俺達が不甲斐ないばかりに……………」

「そ……………そんなこと……………!」

「典章……………君に身寄りは?」

「肉親は……………いません……………季衣を頼ってここまで来たんです」

「じゃあ……………俺に任せてくれ」

「えっ……………?」

「華琳……………曹操に頼みこんで君の処遇をできるだけよくしても
らうから」

「そ、そんな……………手間をかけさせるわけには……………!」

「じゃあ今から南部の黄巾党を討伐、捕獲をしに行くからついてきてくれ。その中で君の実力を確かめさせてもらおう」

「そ、そういつことなら……………」

典韋はまた賊に会うのが辛いのか俯いた

「《ギユッ》」

「《ポムッ》みつ、御遣い様っ！！？」

「大丈夫、もし君が危険にさらされたら必ず俺が命を賭けて守るから」

「ほ……………ホントですか…………？」

「ああもちろんだ。典韋」

「……………流流です」

「えっ？」

「私の真名は流流です兄さま」

「に、兄さま!!?」

兄ちゃんやお兄ちゃん、お兄さんは言われたことはあるけど“様”
をつけられたのは初めてだから動揺してしまった

「いや……………ですか…………？」

「っ……………！ いや別に構わないよ。よろしくな流流」

「はっ……………はいっ!」

つぶらな瞳で上目遣いの話しかけてくる典……………流流

反射的に返事をしてしまったが反省も後悔もしていない

あとからきた春蘭に事情を説明すると「あの獣共めがあっ！ 生き

ては返さん!!」と激昂した

なんとか宥め、皆が馬に跨がり走るなかを雷火で先頭に着いていった

南部方面

「あれが目標か……………」

「ああ奴等が憎き屑共だ」

「あいつらが……………!!」

「《カタカタ……………!!》」

春蘭と季衣が怒りを露にするなか、流流は震えている

「《キユッ》」

「兄さま……………」

「《ニッコロ》……………春蘭」

「あのような愚か者共、私だけで十分だ!!」

「この闘いは重要な闘いだ。あまり無茶をするなよ、無謀は勇敢ではなく蛮勇だ。この闘いで黄巾党の情報が取れば、この乱も一気に鎮静するだろう」

「むっ！ わ、わかっておるわ！！ 皆のもの！ 抜刀せよ！

憎き屑共を根絶やしにせよ!!」

『うおおおおおー！！！！！！』

震えている流流の手を握り笑みを浮かべる

春蘭はやはり我を忘れかけていたので目的を思い出させ、戦闘に参加する

賊は約四万、対するは官軍二万、俺達が一万、官軍の将は一人

「春蘭、季衣！俺と流流で逆側に回り込むからお前達も逆側に回り込んでくれ！挟み撃ちにするぞ！！」

「わかった夏侯惇隊の半分は北郷と共にいけ！！季衣ついてこい！！」

「はい春蘭様！！」

「いくぜ皆！！」

『応！！』

「流流は俺についてこい！危険になったら春蘭達の元に行け！！」

「は、はいっ！！」

「おらっ死ぬガキ！」

「キャツ……………！」

「流流！伏せろ！！！」

『示現流・六進』

「はあっ！！！」

「ギャアーーーー！！！」

流流に斬りかかった賊を流流の頭上に示現一刀を横なぎに振り抜き、倒す

「あ、ありがとうござい
兄さま！ ハアッ！！ 《ジャラアッ
！！》」

「「「「がはっ！」「」」」」

「すまない流流！！」

流流は俺を背中から斬りかかってきた賊をヨーヨーのような巨大な円盤で薙ぎ払った

「北郷様！ 夏侯惇様達が押されております！！」

「くっ！ やはりこちらに数を割きすぎたか！！ 皆！ ここは任せて春蘭達の援護にまわってくれ！！！」

『はっ！！！！』

「兄さま、御武運を！！！」

「流流達も！！！」

流流達が春蘭達の方に向かう

賊達が俺を円の様に囲む

「へっへっ」「や」「ぎゃはっはっ」「などの声が聞こえる

「……………《グイッ》」

酒を口に含む

賊達は舐められたと思ったのか一斉に斬りかかってきた

「《ブーーーーッ!!》」

『おらぁーーーーっ!』

そして刀を天に突き上げ、顔前に勢いよく下ろす

『示現流・天雷』

《バリヤー————ン！！！！》

すると天から雷が刀に宿る

「雷、ありき！！！」

雷が落ちる衝撃で斬りかかってきた賊達を吹き飛ばし、驚いて固まったままの賊達に斬りかかった

「兄さま……………」

「兄ちゃん……………」

二人は一人で闘う兄と呼んでいる男性を想う

「二人とも！ 気を抜くな、死にたいのか！！？」

「でも春蘭様！！！」

「大丈夫だ季衣！ 北郷ならあのような輩には遅れはとらん！！！」

「でも……………」

「お前達の兄を信じろ！！ それとも北郷が信じれぬのか……………」
「？」

「そんなわけ……………」

「そんなわけないです！！！」

季衣が反論をするところに食い込みぎみに流流が叫ぶ

「ならば信じろ、お前達の兄を……………私も信じているぞ……………
北郷」

「ズエアア……………ツ……………!!!!」

円を切り裂き、賊を薙ぎ払い、消し炭にしていく

だが数は減る気配がない

天雷も効果がきれはじめている

天雷は刀に雷を纏わせ、威力、範囲をあげる技

「ん?……………なっ!!!?」

切り開いた道から見たのは……………撤退する官軍

まさか……………逃げたのか!!？

「いや……………あれは……………!!？」

しかし道に向かってくる一人の武将

その旗は……………深紅の呂旗

その人物は褐色肌の女の子

自分より大きな戟を担ぎ、こちらに走ってくる

「……………ふっ!!」

そして一雑ぎで人垣が吹き飛ぶ

女の子は俺の元に駆けってくる

「……………っ！《ダンッ！》」

俺も彼女の元に駆ける

そして

《ザンッ！……！》

俺と彼女の視線が交差し、お互いの背後に斬りかかる賊を斬り、吹き飛ばす

《トンッ》

斬り終わり、背中合わせになる

「私は北郷一刀、あなたは？」

「……………官軍が将の一人、呂布……………お前が天の御遣い……………
……………」

「はい。北郷か一刀でいいです。なんであなた一人なんですか？」

「恋が本気だと周りの皆を巻き込むから……………一刀も離れて……………
……………」

「大丈夫、足手まといにはなりません」

「わかった、話し方戻していい……………」

「あ、バシてたか？」

「ん……………なんだか固くなった感じがしてたから……………」

「ありがとう、じゃ……………行くぞ……………？」

「ん……………呂布奉先……………行く……………！」

「北郷一刀、参る！」

呂布は方天画戟を肩に担ぐ

俺は示現一刀を腰に持っていき、剣先を前方に構える

賊達が殺到し、あと数歩まで近づくと

「……………ふっ……………」

「示現流・来迅……………」

《ズアシャアン……………》

《バリリリヤグアン！！！！！》

紅黒の斬撃

蒼白の爆撃

二つの剛撃が

黄色の人垣を吹き飛ばす

そして煙が晴れた後、二人は飛び上がり、残りの賊に斬りかかった

後にこの闘いはこう呼ばれる

紅の武神と蒼の鬼神の狂宴

技紹介

はい、おはこんにばんは〜戒人でえ〜す

更新したばかりですが小説を書いていたら技増やしすぎたか!？とか、そういやBASARAを知らないもしくはアニメしか知らない人は技わからないんじゃないかとか俺も技どんなだったか解んないときあるわ(笑)と思ったので原作技、オリワザを紹介します

作者と読者様方のために書きます

まず既載の原作技

示現流・撃昌

空中前回転斬りで刀を叩きつける一撃

蒼雷付加時は地を裂く

示現流・六進

自分から見て右から左に横薙ぎに突進しながら斬り裂く

蒼雷付加時は範囲大

示現流・連獄

正面に左右面に連続で振り下ろす

蒼雷付加時は剣速倍加

示現流・瞬激

低空で遠くまで飛び、刀の腹を地に叩きつける

蒼雷付加は無し

示現流・浮舟

瞬激から派生

刀の持ち手を下に回し、持ち上げる様に振り上げ左から右に横薙ぎに斬り、右から左に払う

蒼雷付加時は範囲大

示現流・喝破

気合いを込めた喝

雑魚は逃げ出す、隊長格は足が止まる、將軍格は動じない

蒼雷付加は無し

示現流・来迅

刀を右腹まで持っていき、柄を右腹に、刀身を前方に向け蒼雷を溜めた後、蒼雷の渦を放ち爆発させる

段階は三段階

示現流・断岩

酒を含み、刀に吹きかけ上段に構え、自分の周囲に蒼雷を天に噴き

出させ、渾身の一撃を正面に振り下ろす

地にめり込ませ割れた地から蒼雷を噴き出させる

示現流・天雷

酒を含み、刀に吹きかけ眼前に柄を持っていき天から蒼雷を落とす宿らせ、刀を巨大にする

B A S A R A 技

『示現流の粹、ここに極まれり』

鐔から蒼白い十字の紋様を眼前に飛ばしそれを通り抜け、体に弱い蒼雷を進らせ、刀を島津の大刀と同じ形状にし、左右面に数十回振り、左右に刀を縦回転させ回した後に右から左に薙ぎ、正面に地に叩きつけ、刀に纏わせている蒼雷を爆発させるように溜め、刀を突き上げると同時に天を割る雷柱を発生させる

オリワザいきます

示現流・撃昌・真

高速の居合い抜き

蒼雷付加時は神速だが鞘破損、肩脱臼、踏み込み時に筋肉損傷の可能性有り

示現流・六進・嵐

横回転斬り

付加無し時は竜巻発生

有りは竜巻＋豪雷発生

回転数で竜巻の範囲、大きさ変化

示現流・雷火

体の部分に蒼雷を付加させ、筋肉をフル稼働させる技

着々と体得していつている

示現流・斬狼

足と腕を雷火で強化し、狼の様に走り回りヒットアンドアウェイを繰り返す、最後に横薙ぎしながら切り抜ける

既載はこのくらいかな？
なにか抜けてたり、表現がわからないだよバカが！などのことがあればフハハハハこの馬鹿めっ！と感想にお願いします

まだ書いていない技もあるので楽しみに

では（ーーこ）ノ

鬼神 憤怒する、武神 歓喜する、小霸王と宿将 鬼神と出会う(前書き)

日曜にあげようとなりましたがネタが増えてしまい、一日遅れました

O r z

鬼神 憤怒する、武神 歓喜する、小霸王と宿将 鬼神と出会う

黄色い布を体のどこかに身につけた賊

黄巾党

彼らは敵対しているもの達を理解できなかった

たった二人

しかも片方は女、官軍の将なのはわかっていたが自分達をろくに討伐できない腐った王朝の手下

数もこちらが明らかに多いのに、目に映る光景は

「……………邪魔」

「示現流・六進・嵐！！！」

紅の斬撃が空を裂く度に、仲間達の鮮血が雨となり降り注ぎ、仲間だったものが物言わぬ肉塊になり、身に付けていた黄巾党の証である黄色の布がボロボロになり風には飛ばされ

蒼の斬撃が大気を震わせながら竜巻と蒼雷を発生させ仲間達を天高

く吹き飛ばしその肉体を、黄巾党の証である黄色の布を消し炭に、塵に変え空に舞わせる

「ば……………化け物……………!!」

仲間の一人が呟く

仲間の方に向いた視線が捉えた仲間の表情は恐怖に染まっていた

「ひ……………ひゃあああ————!!」

「に……………逃げろ————!!」

前方の仲間の絶叫に視線を戻し、前を向いた途端に見えたものは

仲間達を殴り飛ばし踏み倒し斬り倒し、迫ってくる

紅の武神と蒼の鬼神だった

一刀side

呂布と分かれ、斬りかかり半分に分けた黄巾党の包囲を裂き、挟み撃ちをするため片方から突撃してきている春蘭達と合わせ、呂布と合流して共に黄巾党を追い込んでいく

呂布の軍は春蘭達の加勢に行き押している

俺と呂布は黄巾党を斬り倒しながら詰めていく

「一瞬でも恐怖を覚えた者は即刻失せろ！ 殺されたい奴からかかってこい！！！」

「恋達が倒せるのならな……………」

俺は殺した黄巾党の死体に示現一刀を突き刺し、叫ぶ

呂布は小さく呟くが、その声には殺気がギスギスと籠っており、黄巾党達を震えあげさせる

「う…………… 《ズダアアアン！》 な、なんだ！？」

春蘭達の方から轟音が聞こえる

砂煙が噴き上がる

どうやら春蘭達も圧倒しているようだ

正に前門の虎、後門の狼

黄巾党達は俺と呂布に武器を構えているが腰が引けている

賊達は前方の俺と呂布にかかるか、後方の春蘭達にかかるかをキョロキョロしながら戸惑っている

「……………《グッ》」

「?……………!?!」

『!……………!?!?』

俺はさしている示現一刀を強く握る

すると気づいた呂布が疑問の目で見てくるが一瞬でその表情は驚愕した

死体が燃え出したのだ

蒼雷を強めた結果、死体の温度が急上昇したため発火したのだ

そして仲間だったものが突然発火し、消し炭になったことに対峙し

ている黄巾党達は驚愕と恐怖を覚えた様だ

「……………《ギリッ……………!》」

「……………かず……………と?」

俺は唇を噛み締め、怒りを覚えた

それをいち早く感じ取った呂布が話しかけてくる

しかしそれを無視し、一二歩前が出る

「お前達は今、恐怖を覚えたな……………?」

『《ビクッ!》』

怒気を込め、低い声で小さく呟く

それを聞き取った黄巾党達は体をビクつかせる

「お前達が今覚えた恐怖は、今までお前達が殺めてきた者達も感じ
たものだ。そしてお前達が殺めた者達もお前達と何ら変わらない存
在……………人間だ」

「そ、それがなんだって言うんだよ!!」

黄巾党と民達の違いを説く

すると前線の一人の黄巾党が反発してきた

「お前達は人間……………だが殺めてきた者達とお前達は違つ。彼らとお前達の違いは生き方……………自分達の力で大地を耕し、食糧を収穫し食らい、自然の恵みに感謝しながら生きてきた」

『……………』

「だがお前達は、その汗水たらし育んだ物を奪い、食らい、そして傲慢にも育んだ存在である彼らをも殺した！ 何ら変わらない……………同じ恐怖を覚えられ、文明を築く事の出来る頭の良さを持つ数少ない進化を経験し、世界を生き抜いてきた“人”と言う強い存在であるお前達は、もっとも愚かな行いをしたんだ！」

「う、うるせえ！ てめえなんか、てめえみてえに天の御遣いなんて持て囃されてるやつに俺達の苦しみなんてわかるやかわけねええくせに！」

怒りを爆発させる

しかしこれは俺の勝手な考え、それをしなければ生きていけないことは百も承知

「そうだ。俺はお前達の苦しみなんてわかりやしな、だがな……お前達の考えはわかる」

「な、なんだつてえんだよ!」

「弱肉強食」

『!?!?』

「お前達は強い者が弱い者を喰らう“弱肉強食”の理を振りかざし罪無き者を殺してきた……ならば俺はその弱肉強食に乗っ取り、ここでお前達に敵対する……“覚悟”はいいか？」

『ひっ!』

示現一刀を両手で下段に握り、冷たい殺気を放ちながら睨みを効かせにじり寄る

「恐怖を覚えようともし生きることには執着しろ。お前達が殺した人間の命を受け継ぎ、歩めたはずの未来を奪ってまで永らえた生を噛み締めろ! お前達が自分より弱い人間を自分達の都合で殺すのならば……俺は自分の恨みを都合にお前達を殺す……!」

「う、うわあああああ!」

前線のやつは俺の殺気にあてられ、狂ったように突撃してきた

「弱き者の無念を知れ……………」

「……………一刀……………」

「……………なんだ、呂布……………？」

すると呂布が俺の隣に並び、方天画戟を構える

「恋も……………一刀の言葉にぐっときたから……………手伝う」

呂布が話しかけてくる

その目には、今まで子供が見てくることはまずあり得ない光景を見て、哀しみに溺れたようなものだった

どうやら幼少の頃から命の奪い合いを目に焼きつけてきた様だ

だがその目は穏やかな光を灯らせていた

「すまない……………お前達の命は！ この北郷一刀と呂布奉先がもらい受ける！」

「静かに……………眠れ……………！」

示現一刀の刃を方天画戟の刃にクロスさせ、力を込める

黄巾党達は発狂した一人に続いて迫ってくる

あと数歩、黄色の波が迫ってくる

怒りを刃に、すると示現一刀の蒼白い雷が一瞬、蒼黒く染まったように見えたが凝視して見てみても変わっていないかった

一抹の不安を抱きながらも、呂布が紅刃を振った力に乗り、俺も蒼刃を同時に振った

呂布 side

一刀と一緒に刃を振った後、切り裂いた前線を更に後方に押し込んでいる

恋は純粹に嬉しかった

恋の力を見た人は必ず、二度目に会った時には顔をひきつらせながらそそくさと逃げるように離れていった

一緒に戦うといっても隣り合わせに戦うことは出来ない

恋を好きだと言っていた武将の男はある闘いに一緒に行つて

恋の攻撃に巻き込まれ負傷して恋から離れていった

そしてその男は恋の強さを危険と言ひ、他の将や兵に言ひふらしさ
らに恋を一人にした

だけど霞と華雄、詠や月やねねは恋を友達、仲間と言つてくれた

霞も華雄も恋の隣で戦うことは出来ないけど恋から離れていったり
はしなかった

逆に恋に勝とうと頑張つたり恋と戦つたりしてくれた

詠と月あまり城にはいないからよく話したりはしなないけど詠は恋
の力を認めてくれ、月は恋のことを優しい女の子だと言つてくれた

正直、恋は闘いが嫌いだ

でも力を持ってしまつた以上、守りたいもののために戦っている

ねねは街でいじめられていて、恋と同じだった

助けてあげたら恋に懐いてくれたらしく行動を一緒にしてくれている

この戦場にも一緒に来てくれて、苦手な兵の指揮をしてくれている

でも皆女の子

強い男は誰一人いなかった

でもある噂を耳にした

『天の御遣い』 『蒼雷の鬼神』

天から遣わされた男

その強さは一騎当千

鬼と言われているから恋と似てるのかなと思ったけど違った

天の御遣いというお陰で恐れられなかった

少し恨めしかった

でも違った

一刀も恋と同じで心の中で苦しんでいた

どれだけ強くてもそれは表面上

心は恋と変わらないほどに脆い

だから協力しなくなつた

そしてあの言葉で恋は感心した

あんなに強いのに弱い人たちのために戦っている

偉ぶつた様子もせず、恋の隣で戦ってくれている

恋の死角から切りかかってくる賊を一刀は倒してくれる

ありがとうと言うと暖かい笑顔で返してくれる

逆に一刀の死角から切りかかってくる賊を恋が倒すとありがとうと言ってくれる

恋……………嬉しい

その心が暖まる言葉に恋も笑顔になれた気がした

でも……………なんだか最初の一刀と違うような気がしたけどかっこよかったから気にしなかった

一刀side

挟み撃ちは成功しそうなのだが……………いかんせん数が多い

春蘭達は官軍達と合流したから包囲に穴は無いが俺達は二人、先程から何人が逃げ出している

それに俺の示現一刀は呂布の方天画戟よりリーチが短いせいで広い範囲を攻撃することが出来ない

蒼雷を使えば関係ないが先程の異変がそれを抑えてしまい、本領を發揮できない

どうすれば……………

『よっ！ どうしたんだじっちゃん！』

「！！？」

すると受け継いだ記憶の中から一人の男性が超刀を担ぎながら俺に話しかけてくる

景色は派手な京の街

その男性は頭に羽を付け、華やかな黄や赤、黒などの着物やホワイトタイガーの模様の手袋をしている

『いやあの〜 どん！ 今の若者は弱くて腕が鈍りそうなんじゃ。一つ手合わせ願えんかのお〜？』

すると島津さんの声が俺の中から響き渡る

どうやら俺は島津さんの視点で彼を見ているようだ

『手合わせか………よしきた！ 喧嘩は京の名物よ！ 楽しまな
きゃ損損！』

すると彼は超刀を抜き、柄を鞘に詰め朱槍に変えた

『おおっ！！ ハナツから本気かね！？ がっはっはっはっはっ
！！ よかよか、じゃおいも本気で行くど！ “慶次”どんー！！』

そして彼と島津さんはぶつかつた

「……………試してみるか」

俺は彼の真似をしてみた

鞘の取っ手に指を通し、柄を鞘に突っ込んだ

ガチインと音をならし示現一刀は朱槍に変わった

「……………すげえ」

呂布がそれを見て驚いている

笑顔で返し、一振り

示現流の技には対応していないので蒼雷を強めることしか出来ない
が範囲は特大

へたすれば呂布より多く倒すことが出来るかもしるない

「負けない……………！」

「俺だって……………！」

人垣を吹き飛ばす

だんだん春蘭達の姿が見えてくる

そして兵達が俺と呂布に近づき、黄巾党を包囲した

「観念してお縄に付け……………死にたいのなら別だがな」

『……………』

少し前に出て降伏を呼び掛ける

すると一人、少し他の奴らとは雰囲気も装備も違う男が出てきた

「へっ！ まだ俺達は死んじやいねえ！……………それに、何勝ち誇ってんだ！？」

「なに？……………！？ 全員、急所を守れ！！」

『！！！！！！？』

男が自分達の旗を天高く放り投げる

後方から殺気をかんじ、兵達に指示する

すると一気に俺達の体は影に飲まれた

『シユシユシユヒユヒユ！！！！』

矢の雨が降り注ぐ

その矢は囲まれている黄巾党達をきれいに当たらず俺達だけに降り注いだ

防御している隙に隊長格らしき男と数百人が啞然としている矢があらたらない中央の兵達を突飛ばし逃げていった

矢の雨が止み、後方から雄叫びを挙げながら林に隠れていた黄巾党達が突っ込んでくる

「くそつ！ 春蘭！ 皆を連れて奴らを追え！ 俺は奴らを倒してから追いかける！！！」

「わかった！ 必ず来いよ！！！」

「（兄ちゃん）（兄さま）、頑張つて！！！」

「応！ お前らもな！！！」

「ねねも一緒に追つて」

「はいなのです！ 皆の者、追撃です！！！」

春蘭達全員と官軍の半分を多分呂布の補佐役の女の子が追撃し、現れた黄巾党を俺と呂布と官軍の半分が戦う

「一刀……………よかつたの？」

呂布が問いかけてきた

「大丈夫、俺のこの軍は簡単にやられたりしない。それに官軍の兵達を巻き込まない様に一人で来た上に俺にも気を配ってくれた“優しい”呂布をほっとけなんて出来ないしな」

「優しい……………恋が？」

答えるとまた問いかけてきた

しかも構えを解いて真っ直ぐに見つめてくる

「あ……………ああ、呂布は優しい女の子だよ。これは俺の感じた君の印象だ」

「恋が優しい……………」

目を見て真っ直ぐに告げる

すると呂布は嬉しいのか顔を真っ赤にして笑み、黄巾党の波に一人で突撃し真っ二つに切り裂いた

咄然としている俺と兵士達は呂布から逃げ、俺達に切りかかってくる黄巾党を見て我に帰り闘い始めた

春蘭 side

私達は官軍と協力し逃げ出した奴らを追っている

なかなか逃げ足は速く追い付けない

だが諦めることは許されない

北郷が任せてくれたこの指示だけは守って見せる!!

そう春蘭は考えながら馬を走らせた

一刀side

「よし！ 春蘭達の後を追うぞ!!」

「一刀待って……………」

「ん？」

呂布が先手をとったお陰で黄巾党達は浮き足立ち、押され始めたら逃げていった

示現一刀を刀に戻し、納刀してから雷火を発動して追いかけてようとしたところに呂布が近づき話しかけてくる

「さっきは……………ごめんなさい。恋のせいで怪我……………」

「ああ、大丈夫だよ。ただのかすり傷だし」

呂布が突っ込み、俺も加勢した際に呂布は気が敵に向かっていたのが気付かず俺ごと斬ってしまったのだ

なんとか防いだが右腕を少し傷付けてしまった

呂布は何か前にあったのか随分落ち込んでしまった

官軍の兵達には追撃を頼み、先に行ってもらった

「大丈夫だって。呂布は敵を倒すために戦っていた、それに勝手に加勢した俺が呂布の攻撃に巻き込まれただけ。気にしないで」

「恋のこと……………嫌いになったりしない？」

「……………っ!？」

つばらな瞳、涙が今にも溢れそうな悲しい目で聞いてくる

その目を見て、一瞬戸惑ってしまい続く行動は

「嫌いもなにも、まだ君のことは知らないからなんとも言えないけど……………《スツ》」

「《なでなで》……………一刀？」

「この戦場で得た君の印象だと好きか嫌いかと言えば……………好きだよ」

「……………《パアツ……………！》」

頭に手を置き、撫でて正直に答える

そしてそれを聞いた呂布は輝く笑顔を見せてくれた

……………かわいいなあ

「……………恋、かわいい……………？」

「え？……………ハッ！？《バツ！》」

し……………しまった、つい声に出してしまっていたらしい

急いで口を塞ぐが時既に遅し

視線を反らし、雷火で追いかけてよつとしたところに呂布が背中に乗っかってきた

「な、なんだ呂布!!?」

乗っかってきて驚いたが落ちそうだったので腕をまわす

……完全におんぶじゃないか!?

「恋……馬ない」

「……あ」

「だから連れてって欲しい……だめ？」

捨てられた犬のような目を間近に見てしまった俺は

「うぐっ……わ、わかった！　しっかり掴まってるよ!」

「ん……」

もつとつにでもなれー!とやけになり承諾してしまった呂布は気を良くしたらしく首に腕をまわしてきた

中々大きな胸が背中にあたる感触がする

柔らかくて気持ちいいじゃないかおっぱいこのやろっ！

てかわざとやってるんじゃないだろうなこの子！？……………な
に考えてんだ俺は…………… 呂布に失礼だな

それだけ信頼してくれてるってこ

「……………《ペロツ》」

「うひゃあっ！！？りよ、呂布！？」

呂布が右腕の肩近くの傷を舐めた

肌に柔らかい舌がはしる感触に驚き、変な声のでた

「恋のせいで怪我したから……………嫌……………？」

「お……………俺は構わないけどあんまり他の男にはしない方がいいぞ
？」

「ん……………」

この子ホントにあの飛將軍なのか？

こんな人畜無害な子が……………まあいいか

取り敢えず皆を追いかけた

春蘭side

「くそっ！ お前官軍なのだろう！？ なんとかしろ！」

「無茶言つたのです！ 官軍だからと何でも許されるものではないのです！」

「春蘭様、落ち着いて！！」

「ん〜どうすれば……………」

私達は今、国境付近に立ち止まっている

なんと奴らは国境を越え逃げおおせたのだ

くそ！ このままでは奴らを逃がしてしまう上に華琳様の顔に泥を塗ってしまうう！

「どつしたんだ皆！」

すると後ろから北郷の声が聞こえてきた

「おお、来たのか北郷！ 実はな……………！？」

「お、おおお前！ 恋殿に何してるですか！！」

振り向き見た光景は…………… 呂布をおぶった北郷がいた

なぜだかムカツとした

取り敢えず斬るか…………… 斬る！！

「ちんきゅーきいつくー！！」

「おわっ！ 《ヒョイ》な、なんだ！」

すると呂布の補佐役の陳宮が北郷に飛び蹴りをかます

しかし北郷は後ろに飛び避けた

「お前！ 恋殿から離れるです！」

「えつと呂布？ この子は？」

「ちんきゅー、大丈夫一刀はいい人だから」

「しかし恋殿お」

「それよりはどうした……………」？

「それがですね」

【説明中】

「そうか……………逃してしまったか」

「すまん北郷、私達が不甲斐ないばかりに……………」

「落ち込むのは後だ……………どうすれば……………」

全員が考え込む

考え込むと言っても北郷と陳宮と典韋だけ

「……………皆さん」

「なにか思い付いたの流流？」

典章が私達を呼び、話を持ち出した

「私一人で奴らを追いかけます」

「えっ!？」

「……………なるほどそういうことか……………」

「どっぴいっことだ？」

「……………危険です」

「……………?」

「つまり」

典章は話し出した

自分はまだ曹操軍ではないからたとえ呉のものに見つかっても私達には迷惑はかからないと

「ふざけるな典韋！ お前だけで何ができる！！」

「そうだよ！ あいつらは減ったって言うっても百人以上はいるんだよ？ 無茶だよ！！」

「でもそれが最善の行動です！」

私達と季衣が猛反対するが典韋も一歩も引かない

「……………流流」

「な、なんでしよう兄さま」

北郷も話しに加わる

よしこれで話しは私達の

「俺もいくぞ？」

『へっ！？』

一刀side

自分の考えの結論を出したので話したが皆、呆けている

「な、なに言っているんだお前は！ お前は曹操軍なのだぞ、よく考える！」

「まてまて、俺は客将なんだぞ？ だったら流流以外であまり迷惑をかけないのは俺だろ？」

「しかし……………！」

春蘭は俺に猛抗議してきたが考えをはなしたら消沈した

「それに流流が危険になったら助けるって決めたからな。大丈夫、必ず帰ってくるから」

「わ、わかった。必ずだぞ？」

「……………一刀」

春蘭は渋々承諾してくれた

そこに先程おろした呂布が近づいてきた

そしておもむろに首に巻いていた赤く長いスカーフのような布を俺の傷は巻き付けた

「な、なんだ呂布？」

「約束……………それを必ず一刀の手で恋に返しに来て」

どうやら映画でよくある大切なものを預けることをしてきた

陳宮が騒いでいるが呂布は無視して俺を見つめてくる

まいったな……………帰ってこないといけない理由がまた増えた

「……………わかった。約束だ」

「？……………一刀、それは？」

俺は右手の小指以外の指を畳みつきだす

「これは天の約束の儀式みたいなもの。破ったら針を千本飲むんだ」

「針は食べ物じゃない……………」

「だからだよ。罰だからな」

「……………ん」

呂布も同じ動作をして小指と小指を重ね、俺から小指を絡めて誓う

「指切りげんまん嘘ついたら針千本飲めます。指切った！」

「指切った……………」

「じゃ、行くな？」

「ん」

「北郷様！ 馬とお荷物です！！」

兵の一人が馬と俺の荷物を持ってきてくれた

「ありがとう！ 流流！」

「はいっ！！」

流流を後ろに乗せ、駆け出した

???side

「異常は無いわね」

「そのようだな策殿」

私と祭は母様と蓮華が同盟国の諸侯に挨拶回りをしにいき、長い間帰ってこないから見回りをしている

何かが来る予感がしたから政務を冥琳に任せて（押し付けて）祭についてきた

だが賊はおるか虎さえいない

勘が外れたのは初めて、呉が平和すぎて鈍ったかしら？

「ん？……………策殿、どうやらお主の勘が当たってしまったよう
だぞ？」

祭が指を指す

その方向には黄色い布を身につけた噂の黄巾党が馬に跨がりこちらに向かってくる

「……………《にこお》 やっぱり私の勘は外れないわねえ」

「儂は外れてほしかったわ……………はあ」

祭はため息をつきながらも多幻双弓に矢をつがえのを搾る

私は腰に下げていた諸刃の剣を抜き、構える

「さて……………私を楽しませてくれるかしら？」

「策殿を楽しませるか……………儂と堅殿以外にいるのかのお？……………
……………シッ！」

祭が矢を放つ

私は祭が放った矢が何人かを馬から落とした後、私達を無視し逃げていったのを追いかけた

一刀side

俺と流流は木が生い茂る道を馬で駆け抜けている

中々黄巾党達は遠くまで行ったらしく見つからない

「!?!? 兄さまっ、あれ!」

「あれは……………黄巾党の死体!? まさか誰かが戦ってるのか……………?」

見つけたのは矢で射られ、切り裂かれ絶命している黄巾党の死体

「ど、どうするんですか?」

ここで見つかったは不味い

しかも俺の特徴は噂になってるから顔や服装を見られたら確実にわかられてしまう

どうするか……………そうだ!

流流に手綱を任せ、荷物のなかから制服の下に着ている黒いシャツを取りだし、白の胴着をシャツに着替え呂布の赤い布で顔を隠す（モンハンのフルフル頭に後ろの余った布を垂らす）

「……………」

「ん？ 流流、どうした？」

「な、なんでもないです！」

「そ、そうか」

何故か流流が真っ赤になりながら見つめてきていたので聞いてみると力強いなんでもないとされた

「じゃあ俺は先に行くから流流は馬で追いかけてきてくれ」

「はい」

俺は一足早く雷火で走り出した

進むにつれて黄巾党の死体は増え、血が木に、地にこびりついている

そして黄色い壁が目映った

その奥には濃い桃色と白髪に近い長髪の大人びた女性が黄巾党達に
囲まれていた

俺は雷火を両腕両足に付加させ黄色い壁に突撃した

??? side???

私と祭は黄巾党に囲まれている

追いかけながら殺していたから危険視した奴等は逃げるより私達を
排除することを優先したようだ

奴等は私達を見た途端獣の目に変わり襲ってきた

しかし返り討ちにし奴等は距離を保ち、私達を睨んでいる

「《ズバツ!》がはあっ!」

「な、なんだ!?!」

すると黄巾党の中に黒と赤の影が走り抜けながら奴らを切り裂き、
少しずつ早さを増しながら黄巾党を減らしていく

黄巾党達は戸惑いながら騒いでいる

『!?!? ぎゃあああああ!?!!』

すると私達の真正面から幻影が奴らを一気に斬り裂き私の目の前に砂煙をたてながら止まった

見た目は漆黒の衣に真っ赤な布で顔の半分を隠し、余った長い布を風にたなびかせた私より少し背が高い肉付きから男性とわかる茶髪茶眼の優しい目つきの青年がいた

一刀side

「あなたは?」

目の前の褐色肌の女性が問いかけてくる

「……………名乗るほどのものじゃない あなたたちは?」

「むう……………まあいいわ。私は孫堅の娘、孫策」

「儂は堅殿の長い付き合いの将、黄蓋じゃ」

「……………」

……………春蘭、季衣、流流、陳宮、呂布、隊の皆

……………どつちやら俺は、尤も会ってはいけない二人に会ってしまったようだ
……………

御遣いの覚悟、小霸王と宿将の印象、力の真意

「き、鬼神か!? まさか国境を越えてまで追いかけてきたのか!?」

他の黄巾党達を掻き分けて首領が状況を確認しにきた

そして俺を視界に捉えた途端に叫ぶ

「鬼神?.....ああ、貴方が噂の天の御遣い?」

「なんと。意外に華奢な男じゃったんじゃな」

首領の言葉を耳にした孫策さんが速攻で答えを導き出した

それを聞いた黄蓋さんは想像以上に優男に思ったようで、男だと少し傷付いてしまう発言をされた

まったく.....変装した意味がないじゃないか、空気読めよ首領
まあ気付かれてしまったものは仕方がない

俺は鼻と口を隠していた呂布の匂いが染み付いた長い紅い布に指を引っ掛け、下におろす

隠していた布を首にかけ、黄巾党達を睨みながら示現一刀を正眼に構え、孫策さんと黄蓋さんに話しかける

「申し訳ありません、孫策殿、黄蓋殿。私の名前は北郷一刀、曹操軍に客将として働いています。私達、曹操軍の勝手際のせいでこちらの領土に曹操の領土の黄巾党を侵入させてしまいました。しかし、追撃は私の独断で起こし、私だけが起こした行動です。罪は私だけにあります」

一応けじめを示すために武人じみた言葉使いで言う

流流がまだ追い付いていないから独断ということにしておく

それを聞いた孫策は雰囲気を一変させ、俺の右隣に並び、鋭い目付きで睨みながら

「事情はどうあれ、お前は私達の領土を侵した。罰は受けてもらうぞ」

王族然とした口調で、俺に刃の様に鋭い視線と気迫を浴びせてくる

「罰を受けるのは覚悟の上です。たとえ対立国であろうとも、たとえ罰を受けなければいけなくとも、たとえ客将であろうとも、隣国のため、王のため、友のために、私はここにいます」

「ほお……………」

俺がここに来るまでに刻んだ覚悟を率直に告げる

すると黄蓋さんが感嘆の声を漏らした後、俺の左隣に並び、腰に着けた矢入れから三本矢を握り、そのうちの一本を弓につがえる

それを見た孫策さんも両刃の剣を両手で構え、刃の様な気迫を納め、目を細め、口をニコツと柔らかく微笑み

「わかったわ。じゃあ、あいつらを倒すのを手伝ってもらおうわ。罰は後で考えましょう」

太陽の様な明るい笑顔で言う

黄蓋さんは横目でニヤツと笑いながら

「お主ぐらいの年の奴は自分にふりかかる火の粉を滅法嫌うにも関わらず、お主はその逆じゃな。……………気に入った。鬼神と呼ばれるその武、見せてもらおうとしよう」

なんだか……………変わった人達だな、と自然に受け取ってしまった

大國の王の娘と宿将

その肩書きから想像していたイメージとあまりにもかけはなれていたのに、ホントに自然に受け取ってしまった

「あつ！ それと！」

「はっ、はい？」

さてっ、と気合いを入れて呉の領土への道に立ち塞がっている黄巾党に突撃しようとした　　んだが、孫策さんが何かを思い出したのか声をあげた

俺は出鼻を挫かれたが何を思い出したのかを聞く

すると孫策さんはバツとこっちに振り向き

「その慣れてない硬い話し方、普段に戻していいからね？」

「え？……………なっ！？　なんでわかつたんですか！？」

格上の相手だからあまり慣れていない丁寧な言葉遣いをしていたのだが、気付かれてしまった

驚きを隠せず、驚愕の表情で尋ねる

すると孫策さんは先ほどのニコツとした笑顔に口を開き

「なんでって……時々使い方間違ってるし、その口調で話すと
きに表情が強ばってるじゃない」

「《ポカーン》……よく……そこまでわかりますね……」

少々……いや、大分……驚いている

だってあまりにも的を射た指摘を真っ直ぐにくらったから

開いた口が閉まらないなんて本当にあっただ……

その表情を見た孫策さんはさらにさらに明るい笑顔で……もう一
カッて擬音が目で見えるくらい明るい笑顔で

「ふふっ 言葉使いは私自身が習ったからわかったけど、表情は…
………ただの勘よ」

「勘ですと!?!」

わかった要因を聞いて、もう目の前の人がヒトであるのかが理解で
きない

か、勘!? ただの勘で俺の表情に指摘できるものなのか!?

想像以上に俺の驚く顔が面白かったのか、孫策さんはニコニコ笑顔を止めず、終始笑ってそうなほど笑っている

「お主が驚くのも無理はない。儂も策殿の勘には驚きの連続じゃしのお……………毎回毎回危険な橋を渡られるから年寄りの儂の心の臓が何度止まりそうになったか……………」

黄蓋さんは目も口も閉ざし、今までの記憶を思いだしてはため息を吐いておられた

多分、冷や汗ものの行動を孫策さんはしてきて、幾度となく見てきたのだろう

宿将ゆえに主である孫堅さんの娘である孫策さんが危ない橋を渡られるのは嫌なのだろう

俺で言うなら、桃香が前線に出るような……………絶対出させないな、絶対

まず愛紗と鈴々が許さないだろうな……………

「か、頭！ あいつらが自分等の話しに夢中になってる内に早く逃げてくたせえ！！」

「わ、悪い！ お前ら、必ず生きて帰ってこいよ！！」

俺が孫策さんと黄蓋さんの話しに夢中になっていたのを黄巾党は気付いたようだ

頭を残していればまだ勝機はあると考えたのだろう

頭と少しの黄巾党を逃がし、残りの黄巾党が俺達に立ちふさがる

「……………孫策さん、黄蓋さん」

「なあに一刀？」 「なんじゃ北郷？」

「俺は奴等の首領が黄巾党の本拠地の場所を知っているかもしれない、という情報があったから仲間の制止を振り切ってここまで来た。だから首領を逃すわけにはいかない」

「……………なるほど、その可能性があるのなら私だって国境を越えるわ」

「ふむ……………」

「だから、俺に先手を譲ってもらえないか？ いい技があるんだ」

「……………わかった。あなたの力、見せてちょうだい。あと孫策って呼び捨てでいいから」

「え？ でも……………」

「なあに？ 私が良いって言ってるんだから、その通りにしなさい」

孫策さ……………孫策は頬をプクーツと膨らませながらかわいい睨み目で促してくる

黄蓋さんは黄蓋さんで何かを考えていて、「よしっ」と言っ
て俺に振り向き

「北郷。 儂のことも呼び捨
」

「あっ、それは無理」

黄蓋さんも呼び捨てで、と言いたいらしかったのだが食い込み気味に否定する

それは聞いた黄蓋さんは弓の構えを解き、左手に弓を、右手に矢三本を握り、腰に両手を当てながら

「……………北郷、お前は儂の厚意を受け取らんと云うのか？」

目を見開き、口を大きく開き抗議してきた

だが俺にも譲れないものがある

「黄蓋さん。 俺の祖父、武芸の師とも言える人がいます。 その

師の教えにこんながあるんです」

「なんじゃっ？」

天で俺に武芸を授けてくれたじいちゃんが最も守るべきものと言っていた礼儀を話す

黄蓋さんは興奮覚めやらぬようで話をせかしてくる

「一目で自分よりも上だと感じ取ったならば、敬意を持って接せよ。それが祖父の教えであり、俺自身も大切に考えているものなんです。孫策はあまり年も離れていないし、彼女がそれを望むなら受け入れられるが黄蓋さんは見た目も雰囲気も、そして武芸の差も全てにおいて貴女が上だと俺は思っているから、呼び捨てなんてできませんよ」

「むう……………」

教えを話した。……………話したんだが納得してないのだろう。弓矢をしまい、腕を組み、顔を少し俯かせ口をへの字にし、目を閉じている

……………仕方ない、じいちゃんには悪いけど、相手に嫌な感じになってもらう方が悪いし、譲歩ということだ

「じゃあ……………黄蓋さん」

「……………ん？」

「俺が攻撃を終えたら援護を頼むよ」

「……………」

呼び捨ては流石に無理だが、敬語をやめることはなんとかいけるから援護を頼む

すると黄蓋さんは腕組みを解き、腰に両手をあて「わっはっは」と笑いそうな目を細く、口を開いた笑顔になり

「応。任せておけ！」

答えてくれた

聞いた俺は黄蓋さんに向けていた視線を黄巾党に戻す

黄蓋さんは直した弓矢を再び構え、孫策はキリツと表情を引き締め両刃の剣を構える

それを見た黄巾党は一瞬どよっと騒いだがそれを隙と思ひ示現一刀を空に放り投げる

黄巾党も孫策も黄蓋さんも驚いている

「今や示さん！ 隼人魂！！」

台詞は違つが、奥義を出す

叫ぶと示現一刀の鏢から十文字の蒼白い光る紋が俺の正面に飛び出す
黄巾党がざわざわつとどよめき出すなか、孫策と黄蓋さんは元のキ
リツとした表情のまま俺を見ている

俺は上段……頭上に示現一刀を真つ直ぐに構え、紋に飛び込んだ

「！！？」

しかし通り抜ける瞬間、紋が一瞬蒼黒くかわった

そして移動する力に逆らえず、蒼白く光り直つた紋に突撃した

「」

通り抜けた瞬間、記憶を引き継いだ時と同じ感覚がした途端、何か
が俺の頭に流れ込んできた

真っ黒な人の形をした沢山の“何か”が蒼白く光る人の形をした一つの“何か”と真っ白な広い空間で戦っている

黒い“何か”はそう強い訳ではないらしく、蒼白い“何か”は易々と倒していく

そして最後の黒い“何か”の首を掴み、蒼白い“何か”は持っていた蒼白く光る剣の様なもので黒い“何か”の眉間らへんを貫いた

そして動かなくなった黒い“何か”の首から手を離し、白い空間の地に落とす

蒼白い“何か”の周りには黒い“何か”だったものが散乱している

蒼白い“何か”は剣をぶうんと音をたてて自身の体に刺し、飲み込んでいった

すると黒い“何か”は白い地に溶け出し、蒼白く光る“何か”の足元に集まった

蒼白い“何か”は周りを慌てた様子でたたらをふむ

そして黒い“何か”は蒼白い“何か”の周りに綺麗な円になり、縁から渦巻きのように飛び出し、蒼白い“何か”に巻き付き、黒い地面に飲み込んでいった

飲み込んだ後、白い空間は真っ黒な空間に変わり、先ほどの地点から球体が現れ、バンツと炸裂した

中からは真っ黒な人の形をした塊が現れた

そしてその真つ黒な塊はこちらに振り向いた

俺の意識は……………黒い塊が振り向ききる寸前でブラックアウトした

孫策 side

「何よ、あれ……………」

「儂にも……………わからん」

私と祭は目の前に広がる光景を呆然と見ている

一刀は頭上に構えた変わった太い剣を私でも見切れるか解らない早さで黄巾党に振り下ろしている

しかしただ振っているならここまで驚きはしない

母さまならば見切れる剣速ではある……………しかし一度振るうだけで空に在る雲が割れるなんて……………

一刀が剣を一度振るえば、同時に蒼黒い雷が発生し、雲を割っていく
そしてその雷を受けた黄巾党は当然のことながら肉片一つ、骨片一つ
残らず塵に変わっていく

一刀は振り下ろしを止め、左右に回転させた

すると回転させた剣から蒼黒い斬撃が範囲を広めて、周りの黄巾党
を切り裂いた

続いて横一文字に剣を振るう瞬間、蒼黒い斬撃が剣から飛び出し、
前方全ての黄巾党を一刀両断し、次に縦一文字に地を割る剛撃と共に
蒼黒い斬撃をまた飛ばした

そして地にめり込んだ剣の雷は光を増し、一刀は剣を天に振り上げた

一刀を中心に十文字の光が天を割り、蒼黒い光の柱が飛び出した

「きゃっ！」 「くっっ！」

その柱が飛び出した衝撃で突風が私と祭を吹き飛ばしそうになりか
けたがなんとか踏ん張って堪える

砂煙が舞い、視界が全く見えなくなった

砂煙が晴れ、見えた光景は………この世のものとは思えない

黄巾党はだれひとりおらず、道はボロボロ、木々は吹き飛び、地は

挟られている

その惨状のど真ん中に彼はいた

しかし、髪が……………黒くなっていた

「「!!!?!」」

私と祭は驚いたが一刀の髪の色は元の茶色に戻った

「かず
」

「兄さま……………!!」

一刀に話しかけようとしたのだが、後ろから馬に乗った少女が駆け
てきた

私と祭を追い越し、一刀に近づき一刀の側に降りる

「兄さま! 大丈夫ですか!?!」

兄さま……………確か天から一刀は来たと聞いているから多分血の
繋がった兄妹ではないでしょうね……………ということは彼女も曹操
軍と言うわけかしら?

でも一刀は‘自分だけ’と言っていた
嘘をついたということかしら？

「兄さま、聞こえてますか!？」

「……………君は誰かな？」

「「えっ?」「

流流 s i d e

「……………君は誰かな？」

「「えっ?」「

私と桃色の長髪の女性の声が重なった

もしや呉の方なのでしょうか？

それより兄さまの言葉に驚いてしまって頭が良く回りません

「あの……………兄さま？ 私がわかりますか？ 流流ですよ？」

「……………他人のそら似なんじゃない？ 俺のことを兄と呼ぶ人は確かにいるけど君のことは知らないよ？」

「そ、そんな……………」

私はかなり落ち込んでしまった

私を必ず守ると言ってくれた兄さまがたった数分程度離れたぐらいで忘れるなんて……………

「一刀？ その子は貴方の妹ではないの？」

先ほどの女性が歩みより兄さまに聞く

「うん。多分他人のそら似だとおもつ。ねえ君、どこに住んでるの？」

「……………」

兄さまが聞いてくるけど答えられない

村は襲われたから無くなったし、住まいは無いから何も言えない
すると兄さまは私に近づき、視線を私に合わせて

「話を合わせて《ぼそっ》」

「!!!!!!?」

小さく私に呟いた

私はそれを聞いて確信した

兄さまは私を助けようとしている

私はまだ曹操軍ではないが今は一応曹操軍

多分兄さまのことだから私のことは話さなかったのだろう

今すぐにでも、その……………抱きつきたかったけど、それでは兄さまの考えを壊してしまう

「私は……………村を黄巾党に襲われたので住まいもありません。でも曹操様のところに親友がいるのでその子に頼ろうかと……………」

「そうなのか……………出来れば送ってやりたいけど、俺はいま呉に仇なした罪人なんだ。どうしよう……………」

兄さまが……………罪人……………

私の勝手な考えのせいで兄さまが捕まってしまう

今すぐにも手を握って逃げ出したいけど……………だめ、耐えなきゃ

「北郷。お主のことについて今国境付近にいる曹操軍に伝えねばならん。なんなら其奴も連れていってやるうか？」

「あ、うん。それなら安心だ。お願い黄蓋さん」

「うむっ」

すると桃色の髪の毛の女性の後ろから白髪のような長髪の妙齡の女性が申し出てくれた

黄蓋さん……………だつたかな？

黄蓋さんは私の乗っていた馬に乗り、私に手を差しのべてくる

私はそれを握り、黄蓋さんの後ろに乗る

「あつ、黄蓋さんちよつと」

「ん？」

すると兄さまが私に近づき、酒瓶を渡してくる

「あの……………」

「これを曹操に渡してくれ。俺の無事と、必ず帰るっていう誓いの証に」

「は、はい」

私は酒瓶を両手で大切に掴む

「……………その酒瓶は君を認めた証だからな《ぼそつ》」

酒瓶を腰の鎧に引っかけ、黄蓋さんの腰にしがみついて馬を走らせた

走らせた瞬間に小さく私に酒瓶の理由を言ってくれた

私の心は暖かくなり、涙が出そうになったがなんとか堪えた

兄さま……………必ず帰ってきてください

一刀side

黄蓋さんが流流を乗せて春蘭達の元へ駆けていった

流流は黄蓋さんの腰に掴まりながら何度か心配そうな目で俺に振り返っていた

……俺と孫策の周りは木がへし折れて吹き飛んだり、地面は至るところに穴が出来ている

特に俺を中心とした周りは爆発が起きたのではないかと錯覚するほどビドイ

一体……なんだっただろう

あの黒い“何か”がこちらを振り向いた途端に感じた寒気

見てはいけない、聞いてはいけない、

感じてはいけない……そんな感覚が俺の意識を途絶えさせた

俺の力……蒼雷には何かあるのだろうか

それとも俺自身に……

「中々良い演技だったわよ一刀」

「……一体なんのことだ？」

「何いってんの、あの馬にくくりつけていた荷物を取ったら誰だつて演技だつてわかるわよ」

「……………」

しまった、迂闊だった

気付かれないように取ったつもりだったんだが気付かれたか

「そんな見たこともない生地の入れ物、持つてるとしたら天からきた貴方しかいないもの。それに、貴方が盗みをする人には見えないしね」

「買い被りすぎじゃないか？ 俺だつて欲の一つや二つあるぞ？」

そこまで信用してくれるのは嬉しいが表は誠実だが裏は欲にまみれた奴なんて腐るほどいる

戒めたのだが孫策は最初に見せた同じ笑顔で俺に顔を近づけ

「祭が気に入った人は皆、大義を果たしてくれるわ。私も、貴方を気に入ってるし、確実よ」

「なら俺を解放

」

「それはダメー」

「ひっ、ひどい！　なんてひどい！..!」

うわーいーい！　信用してはくれているけどさすがに罪人なのは
変わらないんだー!!

.....まあ当然か、俺は客将とはいえ曹操軍

「ふふっ」

「.....」

なんだろう、すごく孫策は楽しそうだ

そこまで言ばせることはした覚えは無いんだけど.....

「.....ははっ」

「.....《にこお〜》」

なんだか可笑しく思えて笑い声がこぼれた

それを見た孫策はさらに機嫌を良くして笑みを浮かべた

これが王族……………？

なんだろう、イメージしていたのとは百八十度違う

でも……………全部の王がこんな王がなら、全ての国が幸せだろうな

桃香も……………いつか王になる

あれほど優しい王がいたなら民は幸せだろうけど……………優しい分、
桃香は苦しむだろう

誰も死なせず、大切だと思う全てを守ろうとするなんて……………できるわけ無いから

桃香が王になって、皆を守ろうとするとき、何かを切り捨てなきゃいけない

その苦渋の選択を迫られて苦しんだら、俺が支えよう

もちろん愛紗や鈴々、星に朱里と雛里と一緒に

俺達は、桃香の考えに共感して彼女の元を集った

彼女を守る

彼女を支える

俺達は……………そのために彼女と共に戦うのだから

孫呉の性格、天の酒、黄巾党の愚行（前書き）

長らくお待たせしました

はい、言い訳は言いません。ただ、途中から文脈が変わってくるので御注意ください

今後も更新が遅れることがあると思いますが夜露死苦ッ！！

……………粹がつてごめんなさい、今後とも宜しくお願い致します

m (—) m

孫呉の性格、天の酒、黄巾党の愚行

黄蓋 side

さつき通った道を馬に乗り、後ろに少女を乗せて走っている

少女は北郷から渡された何かの瓶を落ちないように注意している

………瓶から旨そうな酒の匂いがする………

罰として一杯吞ませてもらうかの

しかし北郷も意外に間抜けじゃのおう

演技はなかなかじゃが、あんなに荷物を注意深く見た後に取れば丸わかりじゃて

盗みをするような人格ではないし、わかりやすい奴じゃ

次第に黄巾党の死体が儂と策殿の攻撃ではない、巨大な衝撃で潰された様になっておる

どうやら少女の背中にある巨大な円盤で潰されたようだ

可愛い顔しとるわりにえぐいのお

視線の先に光が見えた

道の出口には惇の旗と許の旗、呂の旗が風で翻っておる

「我が名は黄蓋！ 孫呉の将なり！」

「なっ!?!」

「やはり見つかったのですか……………!!」

儂は国境付近に北郷の帰りを待っていたであろう曹操軍と官軍の前に砂煙を上げながら馬を止め、自分の身分を伝える

すると曹操軍の将の黒い長髪の女が随分と驚き、官軍の薄緑色の少女が予想通りの展開が起きたことを悔やんでいる

二人の後ろの兵と、隣の桃色髪の少女と褐色肌の赤色の髪の少女が儂を睨んでいる

「主らの仲間である天の御遣いは儂らが預かる！ 連絡は後程儂らから主らの王に伝令を出す、今は去れ！」

「!! 《ジャキ!!》」

黒髪の女と赤髪の少女が得物を抜く

後ろの何人かの兵も殺気を出しながら剣の柄や槍に手をかける

「ま、待ってください皆さん！」

「流流!？」

その殺気に気づいた少女、典章が儂の後ろからひょいと顔を出して止める

典章の顔が出た途端に桃色の髪の少女が典章の真名を、驚いた表情で叫ぶ

典章は馬から降り、皆に近づき説明を始めた

……………まったく、曹操軍では無いって言ったのにあんなに気安く話しかけたらいかんだらうに

まあ儂も、多分策殿も気づいているから構わんがまだまだ子供じやのう

「……………と言つことなんです」

「そんな……………兄ちゃんが……………」

「……………お前、一刀は無事なんだろうな……………?」

典韋が説明を終えると、桃色の髪の少女は顔を俯かせ落胆した

赤髪の少女が殺気を飛ばしながら、儂を睨みながら言うてくる

ふむ……………中々の気迫じゃな

「安心せい。北郷は儂らの領地に侵入はしたがちゃんとした理由があったからだということは儂も……………孫策殿も承知しておる」

「……………わかった」

「り、理由に頷けたならば何故天の御遣いを捕らえたのですか！」

呂布の質問に答えたが聞き終わった呂布の落ち込んだ表情を見た薄緑髪の少女が抗議してきた

呂布の補佐官と言ったところかの

……………しかし何故ここまで北郷を心配するのかわからん

北郷は曹操軍の客将、呂布は官軍の武将……………接点は無さそうじゃな

ならば呉に侵入した黄巾党の討伐中に知り合ったのか

随分と北郷は人に気に入られるのが得意らしいな

「質問に質問で返すようで悪いが、お主ならどうじゃ？ “鬼神”

などと呼ばれておる奴が目の前に現れたら」

「うづく……!!」

どうやら儂と同じ考えに至ったらしい

儂の質問を聞いた少女は腕を前に構えながらたじろいだ

「しかし“天の御遣い”の噂に悪い物は無かった。じゃから儂ら、孫呉の目で実際に見、知ろうと考えたんじゃ……………多分」

「多分……………?」

罰を下すと決めたのは儂では無く策殿だ

あの方は興味があるものにはとことんぶつかって行く

北郷に興味が出たからわざと罰として孫呉に連れていき、話を聞く……………のだから

それを伝えると薄緑髪……………もう名でよいじゃろう

陳宮に「随分とあいつを気に入ったですね」とふんっ、とした感じで言われた

「そう言うわりにお主も北郷を随分ときにかけておるようじゃが?」

「ななっ！？　ち、違うのです！　あ、あいつは呂布殿の私物を持つていったからとつと返してもらいたいただけなのです！！」

「私物……………」

「恋が首に巻いてた紅い布……………」

「紅い……………おおっ、変装のために鼻と口を隠していたあれか」

「な、なんですとー！？」

北郷の暗殺者ともとれる黒と紅の服装を思い出す

すると陳宮はすっとんきょうな表情で左腕を上げ驚く

「あ、ああああいつう！　恋殿が肌身離さずしていたあの布を口にい〜！」

「ねね、落ち着く」

……………友愛……………ふむ、友愛じゃな

肌身離さず身に付けていたものを身内でもない奴に預けるか……………
官軍とはいえその行動はちとおかしいな

ただの友情か、それとも……………

まあよからう、北郷を捕まえたのならば、布を返すのもすぐとはいかんじゃろう

「主らは北郷の罪を軽くしたいか？」

「も、もちろんだ！」

「!?!?.....なに？」

儂はあることを思いつき、発言した

すると黒髪の女が反射にも似た速さで答え、呂布は一瞬驚いた表情をした後聞いてくる

上下関係が崩れてきている呉と王朝

なのに官軍の将である自分が望んでいることを聞いてきたことに驚いた

それともただ単に北郷の罪を軽くできることに喜んでいるのか.....

.....

「曹操軍は、官軍の将、呂布は居城に招き、北郷が帰るまでそのままの状態で待て」

『.....は?』

「聞こえんかったか？ 曹操の居城で呂布は北郷の帰りを待て。曹操軍は呂布を城に入れ、北郷の帰りを待て、と言ったんじゃ」

「……………何故それが罰になるのですか？」

「まず曹操軍は官軍を自分達の元に招くと言うことは呂布達を満足させなければいかん。そして呂布達は格下の居城で不満に耐えながら過ごさねばならん。案外、勝手が違う場所に長い間留められるのはきついもんじゃ」

「……………それだけでいいの？」

「応。だが願わくば、お主が曹操軍と一悶着起こしてもらえれば、曹操と儂らは手を組みやすくなり、より優位にお主らと会い対することが出来るが……………」

「……………」

「……………」

「ふっ、冗談じゃ」

呂布と陳宮は儂をジトつとした目で睨み、黒髪の女と桃色髪の少女と典韋は儂らとの関係を知らないせいかわからないと思っている表情をしている

「とりあえず、官軍の者達全員を我が主、曹操様の城に招く。北郷

の身の安全、保証するのだろうか？」

「もちろん。儂らも北郷自身に興味があるのでな、安心せい」

「……………わかった。では連絡を待っている……………全軍撤退！」

黒髪の女が儂に北郷の身の安全を約束させ、撤退を命じた

それを合図に曹操軍と官軍は回れ右して走り出した

「典章！！」

「！？ は、はいっ！」

「北郷を大切に思っているのは構わんがっ、非常事態の時は冷静に動かねばならんぞ！」

「？……………あ！！？」

儂は典章を呼び、北郷の考えを壊したことを注意した

それを聞いた典章は最初は意味がわからんと言った感じの表情をした後、少し考え、驚愕の表情を浮かべた

典章はわたわたとした感じで桃色髪の少女の馬の後ろに乗って去っていった

お……………馬を返すのを忘れておった

「……………策殿の馬が無かったから丁度よいな」

儂と儂の部隊がここに来るのは予定通りだったのじゃが……………策殿が途中乱入してきた為、馬の数が合わなかったので儂の後ろに乗せしてきた

部隊の者達は呉側の国境の入り口に回しておいた

さて……………部隊の小僧どもは黄巾党を全員捕縛できたかのお

儂は典章の馬で北郷と策殿の元へ引き返した

……………曹操は招き方を間違う者では無いだろうが……………最も被害が大きいのはやはり……………食糧だろうな

北郷の馬はどうするかのお……………

一刀side

黄蓋さんが流流を連れていくのを孫策と一緒に見届けた途端、孫策から質問責めにされた

「さっきの力は何だったの？」

俺はこめかみ辺りをカリカリと引っ掻きながら

「実は俺もあそこまで強力な力を使えることを知らなかったんだ。それにあの力を使ってる間の記憶が無いんだ」

「ふうん」と孫策は相槌をした

孫策は俺が肩に下げている防具入れを指さし

「その荷物には何が入っているの？」

「俺が天で使っていた物や天から持ってきた物が入ってる」

「へえ〜……………ねえねえ、その腰の剣、見せてくれない？」

「ああ、構わないよ。はい」

俺は腰にさしている示現一刀を鞘ごと孫策に渡した

孫策は示現一刀を抜き、陽に翳しながら

「この変わった形の剣は一体なんなの？」

「この剣は日本刀と言って、天、この世界の時期なら倭、かな？昔から受け継がれてきたものの一つだ。普通の日本刀よりも大きいけど性能は変わらない。普通の日本刀はもっと細くて、俺の使い方だと折れてしまいそうなんだ」

「確かに貴方の剣技はかなり力業だし、私が持つてるこの両刃の剣でも耐えられるかわからないものだったわね」

孫策は示現一刀を何回か片手で振った

やはり感覚に違和感を感じたのか「うーん」と唸ったが鞘に収め、俺に返してきた

受け取り、収めたところで悪いがまた抜き、鞘を左手で持って腰辺りに据え、示現一刀を右手に持ち、右足を前に、左足を後ろに回して、示現一刀を持った右腕を振り、示現一刀を逆手持ちにクルッと回して持ち変え、鞘の口に切っ先を添え、シューシューと音をたてながら収めていき、キンツと金属特有の音を出して完全に納刀した

言葉で説明すると長く感じるが使用時間はほんの数秒

その速さに孫策は「ほえっ!?!?.....」と驚いた声を出したあとルンルンという擬音が見えそう笑顔をした

べ、別に自慢したかった訳じゃ無いんだからな!

……… すいません、自慢したかったです

孫策は俺が荷物を地面に下ろした後、興味が出たのか防具入れをまじまじと観察し、チャックを発見し摘んだり引つ張ったり………
っておいおいおいおいそんな力一杯引つ張ったら壊れるって！

孫策にチャックの開け方を教え、中身をチェックしていると酒瓶を見つけ、つまみ上げ鼻をひくひくさせ

「なんか良い匂いがするけどこれは酒なの？もし天のお酒なら飲ませてくれたら罪を軽くしてあげるわよ？」

「そうだけど、別に罪を軽くしてくれなくても飲んでもいいぞ？」

しかし孫策は

「何かを得るにはそれ相応の対価を払うべきでしょう？」

とどこかのニースンが言いそうな台詞を笑顔で言った

「じゃあ私と祭、冥琳と穩と」

「だぁー！待て待て待てえー！どんだけいるんだよ！？
流石に限度つてものがあるぞ！」

その笑顔で名前……… 多分真名を声に出しながら指を折り、人の数

を数え　　るまではいいのだがそのまま続ければ予定外の人数になりそうだったのでスライディングストップをかける！

「天の酒だつて無限に湧いてくるもんじゃないんだからな!？」

「むう〜…………じゃあ一杯ずつならいい？」

孫策は頬をぷくうと膨らませたが妥協したらしく一杯ずつを希望した

「人数と名前は？」

「えーと、私と祭と　　」

「あ、待って孫策。それって真名だよな？　出来れば姓と名、もしくは字で言ってくれないか？」

「あ、ごめんごめん。　えー、私と黄蓋、周瑜、陸遜、孫尚香、合計五人」

「五人か……………ちょっと待ってくれ。酒瓶の数は……………」

俺は防具入れを開くために腰を下ろし、酒瓶の数を指さしながら数える

この酒を飲ませる偉人は一体誰なのかを知りたくなつたから聞いてみたんだが……………名前を聞いただけでも反応してしまう程の名将達

だった

小霸王、宿将、美周郎、その美周郎の一番弟子、弓腰姫……………やば
っ、少し緊張してきた

「？ 一刀？」

「ん？……………！？あ、ああっわるいつ、ちよっと考え事をな。
うん、酒瓶の数も足りる、杯はこれでいいか？」

孫策は俺の行動が止まっていたのを異変に思い、腰を折り、顔を近
付けて来た

思考が停止していた為、孫策の声に反応するのが遅れた俺は孫策が
顔を近付けてきたの知らずに振り向いた……………その先には整った
褐色肌の顔と猫の様な縦に尖った瞳孔と綺麗な空色の瞳があった

少し見とれてしまい、慌てて数が足りたことと天から持ってきた赤
色の漆塗りの杯を孫策に渡す

「……………凄く綺麗な杯ね」

渡した杯をまじまじと見た孫策は感嘆の息を吐きながら俺に返して
きた

「そりゃね。この杯はご先祖様から受け継いだ大切な品だから」

「……………ねえ一刀」

「ん？」

話した後、孫策が真剣な面持ちで尋ねてきた

「その杯が大切な物なのはわかったわ。なら同時にそのお酒も大切な物なんでしょう？ 良いの？ 私達にそんなものを渡して」

「……………確かにこの酒も大切なものだよ。でも、この酒の作り方を俺は知ってる。まあこの世界で、この酒を造る為の環境を整える事が出来るかわからないけどさ、出来るだけ多くの人にこの味を知って欲しいんだ」

「味を……………？」

「うん、味を」

じいちゃんに全国剣道大会男子の部で優勝した祝いに飲めと言われて強制的に飲まされた酒

まあ男子の部では勝てたけど総合の部では不動先輩に負けたから二位なんだけどな

でも、男子の部では優勝、総合の部では準優勝まで成果を出したん

じゃからブチブチ言わずに飲め」と結局飲まされたけど

その酒も美味かったんだけど、島津さんの力を受け継いでから酒が異常な程強くなり、酒の美味さがさらに解るようになった

そのせいか酒が好きになり、この世界の酒も何度か飲んだ

でもじいちゃんに飲まされた酒やこの世界の酒よりも、島津さんからもらった酒の方が格別に美味い

防具入れの大半が酒だから早々無くなることは無いだろうから、少人数なら問題ない

………防具入れの中身が酒ばかりだから聖フランチェスカの制服とかタオルに酒の匂いが染み付いていて嫌だけど

「俺だけがこの酒を持っている。でも酒は一人で飲んでも楽しくなかった。一人で飲んでも不味くはなかったんだけど、やはりこの酒の味を他の人にも知ってほしい。もしこの酒を飲んだ人がまた飲みたいって思ってくれたら、俺もご先祖様も嬉しいって思う。もしかしたら、飲んだ人がこの酒を作ろうって考えるかもしれない。流石に簡単には造ることは出来ないだろうけど、その過程で得たものがその人の一部になる。新しい酒ができるかもしれない。この酒一つで、人生が変わったら………ってさ」

「一刀………」

「それにさ、勿体ぶってそのままにしてたら宝の持ち腐れになってしまう。だったら、誰かにこの酒を覚えてもらった方が、俺は良い

って思ったんだ」

「……………ねえ一刀、こっちに向いて、手を出して」

「え？ う、うん」

自分が何故天の酒、無くなってしまえば長い間、もしかしたら一生
味わうことが出来なくなってしまうのに飲ませて良いかを答えた
話し終わるまで孫策は沈黙していたのだが、何かを感じたのか屈ん
でいた俺を立たせ、俺は振り向き右手を孫策に差し出す

「《きゅっ》」

「へっ？ そ、孫策？」

孫策は差し出した右手を上下から両手で包み込んだ

右手が暖かな両手に包み込まれたことに驚き、右手に下ろしていた
視線を孫策に向けた

見た孫策は先程の太陽の様な笑顔で俺の右手をしつかりと包み込ん
でいる

「ありがとう、一刀。そこまで考えていてくれて」

「えっ？ あ……………ご、ごめん、余計なお世話だったよな」

「いいえ、私は嬉しかった。貴方のことに興味があっただけで、さっきの話を聞いただけでも貴方は優しい人だってことはわかった」

「ちよつ、孫策？ 流石に信じすぎじゃ 《ガシツ！》

オウフ！ 何！？」

信じすぎじゃないかとテジヤヴを感じながら、孫策に言ったんだが、話し終える前に首に腕を回される感触

孫策は俺の眼前で俺の手を包み込んでいるので孫策ではないので後ろに振り返ってみれば

「お主の先程の様な言葉は心が薄汚れた輩には吐くことはできんわ。何より話している時のお主の目は、無垢な小僧の様に輝いておったぞ？」

「黄蓋さん！？ いつの間に……！！？」

その先にはケタケタと笑い、手に流流の馬の手綱を握っている黄蓋さん

「うん？ お主が策殿に背中を向けながら話をしているときから馬を降りて近づいておったのじゃが……………まさか気づいておらんかったのか？」

「……………」

話に没頭するのは良いけど、少しは周りを見ような俺よ

ポカーンとしている俺を見て黄蓋さんはやれやれといった風情でいる

「曹操軍に官軍には連絡をしておいた。こちら側の国境には僕の部隊があるからもしかしたら黄巾党どもを捕縛しておるかもしれん。早く行くぞ」

「ええ、早く行きましょっ一刀！」

「おわっ!? ま、待て孫策、馬一頭にで三人は流石にキツいだろ!?」

「あつ、そっか、ん……………あ！ 祭祭つ、捕縛用に持ってきた縄ある?」

「ん? 《ござござ》これか?」

「そうそれぞれ! じゃあ、ちよつとごめんね」

「そ、孫策? 一体なにを《シルシル、ギュッ!》あ、アノー、孫策サン?」

黄蓋さんが何処からか縄を取り出し、孫策はそれをウキウキと馬の首に結び付けた

最初はその行動の意味がわからなかったんだが、結び付けていない方を俺に結び付けたところから嫌な予感が止まらないのは俺の勘違い……………なわけないだろう!!

「ちよっ！ 孫策!!?」

「祭、行くわよ！」

「応！ はっ!! 《バシッ!》」

「《ズジャア————!!》ぎゃあああ————!!」

孫策は俺の言葉を見殺して先に馬に乗った黄蓋さんの後ろに乗って走り出した

俺は馬の足の速さに負けて引きずられていった

ギヤアアア————…

で、黄蓋さんの部隊と合流したのだが

「ぜえぜえ、がはっごほっ！ はあ……はあ……、そ、孫策っ、黄蓋さんっ、お、落ち着い がはあっ！ー！」

馬に引きずられていたが立ち上がり、雷火で馬と同じ位の速さでなんとか走っていたが、引きずられていたせいか息は切れ切れ、体はボロボロ、服は砂まみれ、しまいには少々血を吐いてしまった

謝れ！ 俺に謝れ！！

「ごめんごめん、でも流石一刀っ。普通なら死んでるはずなのにその程度で済むなんて」

「普通なら死んでるってわかっててやったのかあんたは！」

黄蓋さんは部隊の全員を集め、話を聞いている

孫策はまたもや笑顔で顔の中心に手を合わせて謝っている

「北郷、どうやら黄巾党は途中で獣道を通ったようじゃ、こちらには来ておらん」

「そうなんだ……まあ仕方ない。じゃあ早く連れていってくれ」

「応。策殿、後ろに」

「うん」

「皆、城に帰るぞ！」

『はっ！！』

「ッテマツテ孫策サン、黄蓋サン!? コノ縄ナントカシ
《ズシャアーーーーー!!》ギャアーーーーッ!!!!!!」

ほぎゃああああああーーーーっ!!!!!!

で着きました孫呉の街

「がはあっ! ごばあっ! はあ……………はあ…………ぞ、ぞんぢゅんぢゅん、
ごうがいざん、いいがげんにじて……………!!」

「じゅめん、正直やり過ぎた」

「むう……………すまん」

結局、心身共にズタボロな俺が出来上がりました

孫策と黄蓋さんも流石に反省してくれたのか二人共シヨンボリしている

部隊の人達は先に帰った

今は孫策と黄蓋さんに道案内をされながら街道を歩いている

「ん、んうん……………！ 反省してくれたなら構わないよ。でも今後一切あんなことやらせないでくれよ？ しかし……………なんだか人氣がまつたくしないけど、どうかしたのか？」

「確かに変ね……………ん？ あれは……………冥琳？」

「なにか人だかりが出来とるな」

喉に詰まっていた物をなんとか飛ばし、反省してくれたこてを感謝した

しかし街はなんだか全く活気がなく、人の気配がしなかったのを変に感じて孫策に聞いてみたがどうやら孫策もそう思っていたらしい

そして孫策が視線を前に向けてみたら民と兵が人だかりを作っており、兵達の真ん中に長髪黒髪の長身の女性がいた

「冥琳、どうしたの？」

「はぁ……………やっと帰ってきたか、雪蓮。見ろ、噂の黄巾党がついに我らの国に入ってきたぞ」

「なんじゃと……………？」

「……………」

俺達はその女性に近づき孫策が話しかけた

女性は孫策の顔を見るなりため息を吐きながら人だかりの中心を指差した

そこには複数の黄巾党が武器を構えており、体格のいい一人が子供二人を腕一本で捕まえ短刀を突きつけながらなにか言い散らかしている

黄巾党は右側の建物を背に、他の黄巾党は兵達が近づくの牽制で防いでいる

城行き道を全員で遮っている

「兵から賊が街に出没したと連絡があったので来てみれば……………どうやら盗みをしに来たらしい」

「そう……………一応捕縛するの？」

「ああ、何故盗みをしに来たか、ただの略奪か、何か理由があるのかを知りたいのでな」

「しかし人質が居るようじゃの、外道が……………」

「……………孫策」

「ああ、ごめん一刀、彼女は……………」

「いや、自己紹介は後で構わない。……………奴等は逃げた奴等の片割れだ。まず奴等を片付けよう」

「？ 貴様は誰だ？」

「すまない、話は後だ。俺が子供二人を助けるから賊達の気を逸らしていてくれないか？」

「いきなり何を……………」

「冥琳、一刀を信じて。一刀、頼んだわよ」

「ああ……………！」

俺は首に巻いたままだった紅の長布を上につ張り、口と鼻を隠して、賊が背にしている建物の一つ前の建物の路地裏に入り込み、屋根まで飛び上がった

周瑜 side

真つ赤な長布で顔を隠し、漆黒の服を身に纏った男が路地裏に入っ
たかと思えば、足に蒼い電撃を迸られ屋根の上まで飛び上がった

……………妖か？

「雪蓮……………あやつは一体……………？」

「彼は北郷一刀、天の御遣い、蒼雷の鬼神と呼ばれている人よ」

「ほお……………やつが」

「安心せい公瑾、あやつは信用できる男だ」

「随分と信用しておられるようですね、黄蓋殿」

「ふつ、お主も奴と話せばわかるだろうさ」

雪蓮も黄蓋殿も笑顔でいた

まあいい、手も足も出せぬ状況だ、奴の指示通り気を引いておくか

一刀side

屋根から黄巾党の状況を見ている

体格のいい男が子供二人を人質にとっている

囲んでいる黄巾党は兵が近づくのを妨げている

俺から見て右側の道が城に続く道で、左側が俺達が来た道

城に続く道に黄巾党が居り、そちら側には街人は居らず、俺達が来た道には街人や兵、孫策達がいる

すると孫策と黒髪の女性が前に出て男に話しかける

「 ? ! ! 」

「 。 ? 」

「 ! ? ! ! 」

孫策が男に話しかけ、男は短刀を孫策に突きつける

孫策は男に何かを話し、何かを問いかける様に話した

周瑜 side

雪蓮が男に話しかけ、男は雪蓮が自分の名を明かし、その名に驚いたようにで大半がこちらに来た

男と同時に他の黄巾党も驚き、雪蓮を警戒し標的を雪蓮に変更した
兵達は担当していた黄巾党が雪蓮に向かったため雪蓮の護衛にまわるが、雪蓮はその兵達を制し、さらに男を罵った

男は小さい堪忍袋の緒が切れたらしく黄巾党達に雪蓮に攻撃を命じた
当然のことながら兵達は黄巾党迎撃に向かうがこちらに来ていない
兵は一步遅れた

雪蓮は剣を抜き、迎撃に参加する

《ヒュッ》

すると雪蓮に影がさし、兵に影がさし、少し前に影が止まった

その影は少しずつ大きくなっていく、民も兵も空を見上げる

《ズガアアァン!!!》

その影は砂煙を上げ……いや、地を砕き小さな石を飛ばしながら降り立った

黄巾党は男の近くに吹き飛び転がる

男は驚きを隠せずに降り立ったものを見た

見た瞬間、男の顔はさっきの真っ赤から一変、真っ青に染まった

「き、ききききき、鬼神!!?」

御遣いはこちらに背を向け、紅の布を靡かせながらことながら男以外の黄巾党の吹き飛ばした

448

一刀side

「ききききき鬼神！ こっちには人質がいる！ 武器を置いて大人しくしろ！」

男は大分混乱しているようだ

俺は示現一刀を地面にさし、膝から崩れ落ちる

「そつだ。そのまま」

「示現流・雷火《シユン!》」

「なっ!!?」

と見せかけて雷火で一瞬にして男の視界から消え失せた

この場に居合わせた人全員が驚愕した

「シッ!!《ヒユン!》」

「!!? ヒイツ!《ガキャン!》」

男は俺を見えていなかったのだが瞬間的に足を曲げ、俺の頭を狙った右足蹴りを避けたが俺は標的を頭から短刀に変え、蹴り飛ばした

「……………投降しろ。今なら生きてまま捕まえてやる」

「あ、ああ! わかったつわかった! 投降する!!」

「……………まず子供を離せ」

男が投降の意思を表した

吹き飛ばした黄巾党も殺していないので何人が立ち上がってきた

「ああ……………そらよー！《ブンッ！》」

『！！！？』

男はあろうことが子供を孫策達の上空に投げ飛ばした

しかし黄蓋さんが子供が落ちるところまで走っていく

こちらからは見えないが黄蓋さんなら大丈夫だろう……………だがもう一人は 城に続く道側にある一軒の家の窓硝子に向かって放り投げられた

「！！！？ 孫策、黄巾党を！！！」

「衛兵！」

『はっ！！！！』

男が子供を投げた途端、倒れていた黄巾党達も一斉に飛び起き、城側に逃げていった

孫策と黒髪の女性と衛兵は黄巾党を追いかける

俺は低空で投げ飛ばされた子供を雷火で追いかけ、地を蹴り、飛び付いた

「（追い付け追い付け追い付け！）」

俺も子供と同じく低空で飛んでいるが、あと数センチ、あと数センチがこんなにも遠い

「（と、届けえー！）」

腕を伸ばるところまで伸ばし、指を伸ばるところまで伸ばす

《ガシッ!》

そして……子供の服を掴んだ

「よし! ……?!」

しかし 既に目の前には一枚硝子

「くっ! ……! 《ギョッ! ……!》

子供の頭を抱え込むように体を丸め……………頭から硝子に飛び込んだ

《ガツシャアーン！……………》

御遣い重傷、孫呉の民達、小霸王 宿将 憤怒する(前書き)

はい、またもや遅れた戒人です

モンハンが発売し書く手がさらに遅れ、明日はテストというこの時間
間に投稿している馬鹿者の俺を笑ってください(笑)

御遣い重傷、孫呉の民達、小霸王 宿将 憤怒する

一刀side

「んっ……………うぐっ……………あ……………あぁっ……………いつっ……………」

視界が真っ赤に染まっている

右目に粘液の様な物がまとわりついているような、そんな感覚

左目は何ともないようだがあまり視界は良好という訳ではない

子供を守るために体を丸めるようにしたおかげか、怪我も少なく、
衝撃も抑えられたので体のどこも再起不能には陥っていない

しかし頭から飛び込んだせい意識が朦朧としていて現状がどうな
っているかは確認できない

外はガヤガヤと騒がしい

飛び込んだ家の前から人の声が聞こえる

多分野次馬になっていた民だろう

どうやら黄巾党の包囲は止め、追撃にまわったか

「お…………お兄ちゃん、大丈夫…………？」

俺の腕の中にすっぽりと収まっていた少女が不安そうな目で俺を心配してくれている

髪の毛に砕けた硝子の小さな粒が混ざっている

「あ…………ああ、大丈夫……………と言いたところだけど、今の俺、どうなってる…………？」

「えっと……………頭から血が流れて…………腕に硝子の破片が刺さってる……………大丈夫な訳ないよね」

「だよな…っつ……………とりあえず、目を閉じてじっとして」

「え……………？ う、うん」

俺には自分の今の状態がわからないが少女に聞いて理解した途端に頭と腕に激痛がはしる

指も数ヶ所切れているが何とか耐えて少女の髪を根からとかし、髪に付いた破片をかきとる

もう怪我してるんだし、関係ないだろう

しかし流石に全てを取り除くのは無理だな、親に伝えなきゃ

「しっかり……………掴まって」

「うんっ…《ギュッ》」

少女の小さな体軀を痛みが残る腕に力を無理に込め立ち上がるうとする

しかし足元は覚束づ、立ち上がるだけの行動も満足に出来ない

バランスを取れずフラフラしている俺から落ちないように、小さな手に精一杯の力を込めて少女は俺の黒いＴシャツの胸部分を掴み、耐える

こんな怪我ぐらいで……………フラフラしてどうする……………！

目の前に刃を突きつけられて……………恐怖に怯えていた少女

そんな子が、誰ともわからない俺のことを気にかけてくれている、頼ってくれている

いち早く恐怖を取り除く為にも……………早く親に会わせてあげて、安心させてあげなきゃいけない

それが、俺が今成すべきことだろう……………！

「ふっ………おおっ………！」

立ち上がる

パラパラと硝子の破片が体からこぼれ落ちる

足に意識を集中させて、なんとか立ち上がり、少女の体を自分側に引き寄せる

少女は俺の方に体重を傾かせ、俺に体をまかせる

正直こんな少女の体重だけでも倒れてしまいそうだが………耐えて見せた

「はぁ………はぁ………い、行こうか………」

「うん………無理しないでね、お兄ちゃん」

「あぁ………ありがとう」

視界が赤や夕焼け色に染まっている

割れた窓や他の窓から夕焼けの日差しが差し込む

歩を進め、扉に手をかけ外に出た

予想通り、家の前には民が集まり、俺が倒れそうになると皆が俺に

駆け寄って来そうだが、踏み耐えると皆が手を突きだし受け止める準備をしてくれる

優しい人達だ

「あ、お母さん！」

民が少女が声を向けた方向に向き、道を開ける

その先には捕まっていたもう一人の少女を抱えた一人の女性

隣には黄蓋さんがおり、ホツとした表情をしている

女性は俺の方に駆け寄ってきた

「はい、娘さんは無事ですよ……………」

母親であろう女性に少女を渡す

少女は両腕を母親に向け、母親は空いてある片腕を少女に向ける

その手と手は重なり、少女の重みが母親に移る

普段ならわからない解放感が、体に染み渡る

母親と姉妹の少女は抱き締め合い、お互いの体温を、存在を分かち

合いながら涙を流す

天……………日本でも、迷子になる子供は多く、そのほとんどが再会した途端に子供は泣き出し、親は我が子が可愛いあまり叱りつけるが、抱き締め合い、安心を分かち合う

この世界でも、親子の在り方は変わらない

しかし……………この世界はあまりにも危険が多い

それを考えると、とてつもなく目の前の光景が眩しく見える

「?……………お兄ちゃん、どうしたの……………?」

「え……………?」

もう一人の少女が俺に問いかけるが俺には何を聞かれているのかわからない

俺達を囲んでいる人の視線が俺に集まる

見た人は一瞬でざわめき出す

「泣いてるの……………?」

その言葉は耳に入ったが、確かめることが出来ない

手を動かし、拭うことが痛みのせいで出来ない

さらに動かそうとしていた意識が働かなくなり、視界がぼやける

「誰か！ 衛生兵を呼んでこい！！」

『はっ！』

黄蓋さんが残っていた兵に衛生兵を呼ぶように指示しながら近づいてくる

「黄が 《ズキッ！》があっ！ あ、ああ 《ガクン》」

「！？ 《ガバツ！》北郷！ しっかりせい！！」

「御遣い様！」

「お兄ちゃん！」

黄蓋さんに礼を言おうとしたが、無理が祟ったのか頭痛が走り、両腕の力が抜けたらんとし、膝から崩れ落ち、駆け寄ってきた黄蓋さんに受け止められる

女性は少女二人を抱えたまま膝を曲げ、俺を心配してくれる

二人も同様に心配そうな目で覗いてくる

しかし視界は朧気で、しかも赤く染まっただけで今の状況が全くわからない

「黄……が……い……さん」

「喋るな、体にさわる」

黄蓋さんの言う通り、喋ることはとても危険な行為だ

喋るには、内容を頭で考え、口を動かすという二つの行程がある上に、呼吸をするよりも吐く息が多くなり、さらに各部に回す酸素が薄くなり、意識が保てなくなる

でも……でもだ

黄蓋さんには恩がある

俺の行動で死の危険にさらされた少女を助けてもらった恩

俺を気遣い、衛生兵の手配をしてくれた恩

そして……遅くなったけど、俺のことを気に入ってくれた恩

「あ……りが……と……う」

「!?!?」

真正面から受け止めてくれたお陰で、真っ直ぐに顔であろうぼやけた部分に、精一杯の笑顔を

痛みでひきつり、泣きながらの笑顔を

「……………《グイツ》」

「《ぼふっ》……………?」

すると頭に手を置かれ、柔らかな何かに顔を押し付けられる

下を向いているせいで息がしずらいので頑張って首だけでも動かし、上を向く

「こちらこそ、礼を言うぞ、儂らの民を助けてくれて、ありがとう、北郷」

視界が一瞬だけ鮮明になり、黄蓋さんの満面の笑みを見て、俺は泣きながらの笑顔で返し、意識の深淵に落ちた

そしてこの日からだろう

黄蓋さんが子供達に懐かれ始めたのは

黄蓋 side

「黄蓋様……………御遣い様は大丈夫でしょうか？」

「安心せい。気を失っただけじゃ……………しかし早急に手当てせん出血多量で危険じゃな」

「おい！ 誰か水と布を持ってこい！」

「じゃああつしが布を持ってくる！ 飯屋の女将が水を持ってきてくれ！」

「あいよ！ そうだ！ 酒を消毒代わりにしようか！」

「おう！ 民間療法は馬鹿に出来ねえな！ 死ぬんじゃねえぞ、御遣いのおんちゃん！」

儂と親子が北郷を心配をしていると、儂の言葉を聞いた民達が力を合わせて北郷を助けようと協力しだした

北郷はそのざわめきの中で、頭から血を流し、右目から血が混ざった赤い涙を流し、左目から透明の涙を流しながら、儂の胸の中で気を失っている

北郷の頭に絡み付いている硝子の粒を、頭皮を傷つけないように取り除いていく

……不思議じゃった

ここまで危険な状態になりながらも礼を言うなど、一体どれほどのお人好しなのか

策殿が北郷の手をとって、あれほど安心した表情をしていたのがよくわかる

確かに真っ直ぐな人柄だとは思った

だが予想の範疇を越えた人柄だった

民達は北郷の腕に刺さっている破片を慎重に抜いていく

飯屋の女将が傷口に酒をかけ、水で洗い流し、どうやら呉服店の主人らしい出っ歯の男性から布を受け取り、縛り付ける

痛みがあるのか北郷は体をびくつかせ、手が真っ白になるくらい握り締めている

気を失っているので無意識にやっているのだろう

その痛み耐える北郷が、そこらの小僧と変わらない、大人になりきっていない男だと確信させた

天がどのような世界なのかはわからんが……甘ったれた世界なのはよくわかった

慈愛の念がこもったような、優しい笑顔

双眼から流れ出す、嘘の無い綺麗な涙

普通なら立つことすらままならない怪我を負いながらも、少女をいち早く安心させるために母親に少女を任せる姿

「腕の治療は済んだが頭はどうすりゃいいんだ！」

「待て！ 無闇に触れるな！ 硝子が傷口に入ったらどうすんだ！」

「民間療法でも流石に切れた頭の治療は無茶つてもんだ！」

「じゃあどうしろってんだ！ このままじゃ血が足りなくなっちまうぞー！」

最も深い頭の傷の治療にとりかかろうとした民達だが、あまりの傷に焦り始める

そんな中に衛生兵が数人駆けつけ、儂は北郷を渡し、二人が頭の応急処置にあたり、残りの者は担架を用意している

民の中に親子も混じり心配している

衛生兵は応急処置を終え、担架に北郷を乗せる

「北郷の治療を最優先し、済み次第部屋に移し、部屋の前に警備を置け！」

『はっ！』

「「ごうがいさま……………」」

衛生兵が城に向かって走るのを見送ってすぐに、姉妹が母親と共に儂の名を呼ぶ

「大丈夫じゃ。あのまま順調に治療が済めば死なんだろう。……………
…回復したら、儂が連れてきてやる」

「「《パアツ……………！》ありがとう！」」

姉妹に視線を合わせるように屈み、二人の頭をワシヤワシヤと撫でる

二人は弾ける笑顔で礼を言い、儂が民達に避難を言い渡し全員を家の中に

大通りに民は誰一人居らず、居るのは武装した儂の隊の兵達

「黄蓋様、孫策様と周瑜様は城に向かった黄巾党を追いかけ、現在正門に逃げているのを追撃している様です」

「そつか……………誇り高き孫呉の兵達よ！ 今この街に、平和を乱さんとする愚か者共がある！ そして我が民に恐怖与えたただけでな

く、か弱い子供を人質にとつた！」

儂の言葉に兵達は怒りを露にし、自分が所持している得物に手をかける

「そして勇敢にも立ち向かい少女を助け、重傷を負った一人の少年がある！ 我らは彼に大きな恩がある！ 彼の働きに答えるためにも、我らは黄巾党を討つ！ 全員抜刀！！」

『応！！』

儂の号令を火種に全員が得物を抜く

儂は副官の男から弓『多幻双弓』と剣を受け取り、正門に向けて刀身を突きつける

「奴等は策殿と周瑜に追い込まれ、正門を目指してある！ 先回りし、策殿達と合流し一気に殲滅する！ 行け！」

『応！！』

「副官！ 策殿達に正門に追い詰め挟み撃ちにすることを伝える！」

「はっ！」

隊の者達が正門に移動するなか、副官に伝令を伝え儼も続いた

周瑜 side

「雪蓮、祭殿が正門で待ち伏せし挟み撃ちすると伝令が来た」

「わかったわ。……………一刀はどうなったの……………?」

「……………奴は頭からの出血で気を失い、現在衛生兵が応急処置を完了し、城の軍医に見せているらしい」

「そう……………一刀には貸しが出来ちゃったなあ……………《ギリッ……………!》」

随分とお怒りのようだな……………

表情は笑っているが歯を食い縛っている雪蓮

片手で持った剣を力一杯握り締め震わせている

兵達の先頭に立ち、黄巾党の最後尾を見失わないように追いかけている

そろそろ正門にたどり着こうとしている黄巾党だが前方には祭殿の隊が立ちふさがっていた

祭殿の顔は怒りで満たされている様な私も雪蓮も見たとの無い鬼の形相をしている

黄巾党の首領は祭殿達を見て驚いた様で丁度正門の前で立ち止まる

「くそつどうすりゃ」

「弓隊、放てえっ!!」

「!?急所を守れえっ!」

首領が考えようとした瞬間に祭殿が命令を出す

すると正門の真上城壁から数十名の兵が現れ、正門で固まっている黄巾党の頭上に矢の雨を降らす

首領は中々経験が豊富な様で、回避は不可能と判断し防御に徹するしかし他の黄巾党は反応が鈍く、何人かしか防御が出来なかったらしく地面に何十本も矢が刺さり、刺さっていない箇所には防げなかった黄巾党が矢で貫かれながら絶命している

「チツ！ テメエらよくも!」

その光景を見た首領は怒り、死んだ黄巾党の剣を握り雪蓮に斬りか

かる、しかし……

「シッ！《カンッ！》」

「《ドシュッ！》ぐあぁっ！！《カランカランッ》」

首領の剣を握った右腕に祭殿の百発百中の矢が貫き、首領は悲痛の叫びをあげながら剣を落とす

「ガアアッ！」「グフッ！」「ギヤアア！」

それをきに兵達が残りの黄巾党に斬りかかり、減らしていく

何人かは対等に戦うが数に負け、バタバタと倒れていき……残り
は首領だけになった

「ま、待ってくれ！ これには訳が」

「黙れ《ヒュン》」

「《ズバツ！》ぐあぁ！ い、痛え！！」

首領が勝てるわけがないのを理解したのか苦し紛れの言い訳をしようとしたが雪蓮はそれを一刀両断し、首領の両足太股を切り裂き

首領は地面に入たりこむ

「ふっ！」

「《ドゴアッ！》かはっ………！」

そこにすかさず祭殿の近づき、首領の脛椎に鞘での一撃を叩き込み
気絶させた

「牢にぶちこんでおけい。そいつには聞きたいことが山ほどある」

『はっ！』

気絶した首領を兵五人がかりで運び、街は平穏を取り戻した………
…一人の少年の重傷を引き換えに

?&?side

《ドタドタドタドタ！》

「……………？ 随分騒がしいですねえ、何かあったのでしょうか？」

「もぉ！ シヤオがせっかく勉強に勤しんでるっていうのに、ドタバタ五月蠅いんだから！ 気が散るから見に行こっ穩！」

「ああう小蓮様あ！ 勝手に出ていかないでくださいい！」

呉の城のとある一室に、薄緑色の髪に孫呉の特徴なのか爆乳の白い肌の女性が、机にしがみついている桃色の髪を横で輪の様に編んでいる少女の横で勉強を教えていた

しかし廊下を複数の者が忙しく走る音が聞こえ疑問に思った女性が問うが少女が喚きだし、椅子から飛び降り勝手に勉強を中断し出ていく

その後ろを女性は慣れていないのか遅い女の子走りで追いかけていく少女が止まり、何とか追い付いたが息が切れ切れで膝に手をつきせえげえと苦しそくに息を整えていく

「小蓮様あ、一体どうなされたんです……………!?!」

少し楽になり、少女に問いかけようとしたが少女の目線を辿ると正面から衛生兵が担架で誰かを運んできている

その担架の端から……………血を滴り落とす腕が見えた

自分たちが向かっていた場所は医務室だったと理解したのだが、少女は初めて見る血に驚いたのか固まっている

「小蓮様……………」

「穩、見に行こつ」

「……………はい」

少女は女性の問いに間を開けて返事し、同行を頼む

女性はそれを承諾し、フラフラになりそうな少女の隣を歩く

しかし女性は気がかりがあった

自分の師匠、周瑜はただの賊だと軽く言い兵と共に鎮圧に行ったの
にあれほどの重傷者を出してしまったことを

医務室の前に着く

衛生兵が来た道には赤い点々が道を作っている

「一体どうしたんですかあ？」

「怪我したのは誰!？」

医務室に先に入ったのは女性、彼女特有のほんわかした口調を聞き、
中にいた軍医と衛生兵は治療の最中だったが驚かずに済んだのだが、
女性の脇下から少女が焦った感じで聞いてきたのをきに気を引き締
め二人を前に促し、説明を始める

「重傷を負われたのは孫策様達が連れてきたこの少年です」

「何故、この人はこんな重傷を？」

治療台の上にいる少年は頭の右側頭部に包帯を巻き付け、右肩、左肘、両手の指に包帯を巻いている

どうやら打撲などもしたようで足に氷のうが置かれている

「申し訳ありません。私はその場に居なかつたので何があつたかは………」

「それは私がご説明致します」

「あなたはあ？」

「私は見回りの任務に出ていた黄蓋隊の者です。一部始終を見て、黄蓋様の命で衛生兵の方々を呼んだのは私です」

女性が軍医に事の次第を聞こうとしたが申し訳無さそうに顔を俯かせる

するとすかさず背後から赤い武装をした兵が名乗りあげた

「そうですかあ……この方以外は傷を負った方はいますかあ？」

「いえ。私がいたときは居ませんでした。しかし逃亡した黄巾党の追撃に出た者の中にもしかしたら負傷者が出ているかもしれませぬ」

「軍医さん、もしものために十分な薬品を揃えておいてください。」

「……ついにこの国にも黄巾党が現れましたか……」

途中まで報告を聞いた女性は万が一のために十分な治療が出来るように準備を促し、遂に現れた黄巾党のため息を吐く

少女は難しい話はわからないという風情で話を聞かず、怪我人の一刃に近づき観察する

ひどい傷がある一刃の頭を見て行動を止めるが頭を振り、思考を再開する

顔は包帯で包まれているためわからないが、体の形から中々締まった男だと理解する

「その方は北郷一刀、天の御遣い、蒼雷の鬼神と呼ばれている方……なのですが、噂とは打って変わって見ず知らずの民を救い、このようなことに……」

「民を？」

「はい。黄巾党の首領が二人の少女を人質に取り抵抗していました。そこに国境の見回りに出ていた孫策様で黄蓋様が帰ってこられました

た、御遣い様も共に」

「周瑜様と合流したのですかあ？」

「はい。そして御遣い様が策があると提案し、御遣い様が屋根に忍び賊に近づき、孫策様達が首領の気を引いていたのですが首領は怒り、孫策様達に攻撃を仕掛けました。そこに御遣い様が飛び降り賊を吹き飛ばしました」

「吹き飛ばした……噂に違わぬ実力者なのですね」

「正直、その場にいた我々には真似できない芸当でした。話を戻しますが、どうやら首領は御遣い様を知っていたのか、彼を見た途端青ざめ狂ったように御遣い様に近づかない様に人質の少女二人を盾にして牽制したのですが御遣い様は一瞬で首領の短刀を蹴り飛ばしました。首領は投降することを望み、御遣い様が少女二人を離すようにうながしたのですが……」

「ですがあ………？」

「首領は二人の内一人を私達兵がいる方を投げ注意を引き、もう一人を窓硝子に向かって放り投げました」

「「!!?」」

「しかし御遣い様は動けない我々のために躊躇なく少女の元に駆け、窓硝子にむかう少女を飛びながら掴み、少女を自分の体で包むように丸まり窓硝子に飛び込み、このように………」

「なんとまあ………」

「……………!? 御遣い! 大丈夫!!!?」

「……………え?」

兵に全てを聞いて驚いていた女性が少女の声を聞き振り向くと……
…うつすらと目を開け、少女の手を握る一刀を捉えた

「あなた……………たちは……………? ここは……………?」

「シャオは孫尚香!」

「私は陸遜、ここは城の医務室です。貴方の怪我の治療は済みま
したから、あとは安静にしてくださいねえ?」

一刀はそれを聞き驚いた感じになったがすぐにもとに直り「ありが
とう、眠らせてもらうよ」と包帯を巻いてない口を動かし、夢の世
界に落ちた

「ねえ穩」

「はぁいい?」

「お姉ちゃん達が帰ってくるまで御遣いの看病したいんだけど……
…だめ?」

「そうですねえ……………はい、次回のお勉強が増えますけど構いませんかあ？」

「うぐっ！……………！仕方ない！それでいい！」

「わかりましたあ。では私も一緒に看病致しますねえ」

「わかっ《キユッ》？」

陸遜の言葉に頷こうとしたが手を握られる感覚に疑問符を浮かべ、振り向くと自分の小さな手を握っている大きな暖かい手があった

「……………《キユッ》」

孫尚香はその手を握り、聞こえないだろうが

「ありがとう、御遣い」

と感謝を述べる

聞こえてはいない筈だが、その言葉を聞いた一刀の顔は……………微笑んでいるように見えた

失った者達、逸らしていた目、御遣いの罰

華琳 side

「……………《サラサラサラ》」

場所は華琳の部屋

その中にある大きな机に墨と筆、一つの少し小さな書簡の山があり、華琳はその山から一つ一つ自分の目の前に置き墨を筆の先端だけに染み込ませ、まるで機械の様に文字を書き乾くまで、終わった書簡の大きな山の後ろに置いていく

いつもより量が半端ではないのは……………一刀が居ないからである

それは当然である

何故なら一刀の政務の手際の良さは春蘭、季衣はいわずもがな、秋蘭をも凌駕する才を持っていた

思い出されるのは警備隊の立案を発表して三日が経ったある日の夕方……………

「警備隊の配置や時間制の変更について？」

「ああ。少し兵達の配置や仕事について工夫したらどうかと思っ
てさ、一応書いてみたんだ」

「《カロカロカロカ》 ふむ……………」

私が今までより量が増えた書簡を整理していた夕方頃に一刀が幾つ
かの竹簡をお盆に乗せ、訪問してきた

机に乗せられた竹簡を一つ取り、中々綺麗に書かれている内容を読む
確かにこのやり方なら更に人材費も削減できる……………だがもう既に
我が身に取り込んだ者達なのだから多いに越したことはない

「中々良い案ね」

「あ、じゃあ」

「しかし駄目よ。もう彼らには賃金を与えている。働かざる者食う
べからず、丸一日休ませるわけには」

「ああ、違う違う。休ませるのは李典隊だけだから」

「真桜の隊のみ？……しかし駄目よ。彼らも警備隊の一つ。それに彼らだけに休みを与えたら他の隊が」

「《キリツ》理由はある。話してもいいか？」

「……ええ、どうぞ。しかし私が納得できなければこの案は不採用にするわ」

「了解」

一瞬で真剣な目が変わった一刀を前に悟った

また一刀は兵のために自分を削るつもりだと

だがそれが彼たる由縁だと思い、話を聞く

「確かに、李典隊も警備隊の一角を名乗る隊だ。しかし、他の隊と異なる点がある」

「それは？」

私が問うと一刀は私の机に両手を着き、顔を私の顔にズイッと出し

「兵器の製作だ」

「……なるほどね」

私が真桜に頼み事をする一番の理由、彼女が物を作るのに必要な知識と技術を持っているからだ

「たしか真桜の隊は私が用意した者達ではなく、彼女自身が後で選抜した隊になったのだったわね」

「華琳に警備隊を渡された後、カラクリに興味がある者達を集めて編成した。華琳が真桜に頼んだカラクリは、真桜だけが作ったんじゃないくて兵の皆にも協力してもらってつくったんだ」

「どおりで頼んだ次の日に完成したと報告をしてきた日の真桜の隊の者達が具合が悪そうだったのね」

調練の時から変だった

目が充血してたり隈があったり、欠伸ばかりをしていたり、今にも倒れて眠りそうな者がいた

「そんな事をした後に警備隊の仕事もしてたらいつか使い物にならなくなる。それを一番嫌っているのは君だろ？」

「……………ええ、その通りよ。しかしこの案のままだと警備隊の一角が最低でも一週間に一日は抜けてしまうわ。それに他の隊が了承するか」

「それならもう許可を得ているよ。最後の竹簡に真桜隊以外の隊長の許可が書かれているから」

「《ピクッ》……………」

今、私の目の前にいる男はなんといった

既に許可を得ている？……………ふざけないで

机についた手を退け、最後の竹簡を手に取りうつとする一刀に私は

「一刀」

「なんだ華り」

「私の軍で勝手な真似をするな。今お前は曹操軍で客将をしているという事実を忘れるな」

「……………！？ す、すまない」

根回し、口裏合わせ、一刀が行った行動は一般的にそう呼ばれる

私はそれが尤も嫌いだ

一刀は少しの間を空けてから謝罪した

いきなり口調が変わった私に呆気をとられたらしい

「まあいいでしょう。」

兵達の異常が私のせいだと見抜けなかったのを貴方が解決策を出してくれた上に私に伝えてくれたのだから」

「そ、そうか。わかったじゃあこの事は夕食が終わったら真桜隊を残して伝えておくよ」

「ええそうしてちょうだい。ただし余り時間を取らせないように」

「ん、了解」

兵達にも私的な時間がある

一刀自身もそれを理解しているからなのだろう、私の机から離れ、扉に向かう

「《ガチャ》……………華琳」

「？ 何かしら？」

扉を開け、一步を踏み出そうとした一刀はふと立ち止まり、少し俯き気味に私を肩越しに見て

「本当に……………すまなかった」

「……………」

そう言い、一刀は開けっ放しだった扉から食事をしているであろう警備隊の元に駆けていった

「やはり……………一刀は義に篤い武人のようね」

普通の者達はあれで許してもらえたと思い、足早にここを去るもの彼は違った

彼との時間も……………黄巾党が滅べば終わる

終わった後、一刀は何処に旅立つのだろうか

まるで渡り鳥の様に宿り木を変える

しかし主の元へは必ず帰るであろう

劉備玄德……………一度見てみたいものね、彼をここまで惚れ込ませたのだから……………

『……………つおおおおおああああ……………!』

「!? な、何?」

思考の奥底に沈んでいた意識が食堂から聞こえる歓喜の叫び声で浮上する

「隊長ほんまにあんがとおー！ もう隊長かつこエエわあー！！！」

「わ、わかったわかった！ わかったから少し落ち着けて！！！」

「落ち着いてられるかつちゆうねん！ 《ふるふるっ！》 うううんもおう惚れてまっやるおー！ 《があぶうわあ！》」

「ちよっ！ それ何処の川井ちゃんのネタ！？ 《ムギユウ！》ぶふうわああ！！？ ふあ、ふあふうう！？ ふいふいぶあ！ ふいふいぶあ！！「ま、真桜！？ 息が！ 息が！！！」」

「隊長が遂に警備隊長格を全員落としたぞ！ これでもた隊長の華が増えた！！ これで勝つる！！！！」

『ヒイイヤアツハアーーッ！！！！』

「ぶうわはあっ！ これで勝つるってなんでお前らそのネタ知ってんだ！？ それに勝つって何に！？ 《ガシッ》 えっ 《ポーン！》ぶうわっぷ！！ んーんーんー！！！」

「逃がさへんで隊長！」

「ぶうふふ！ ぶあてぶあて！ ふんほうひはばひあー！！「真桜！ 待て待て！ 本当にヤバイ！！！」」

「何事だー！ ……ま、まままま真桜ー！ お前は一体何をしているんだあつー！？」

「なにってそんなん愛情表現に決まってるやないか」

「ああああ愛情表現っー！？ わ、私も真桜位積極的になつた方が
良いのだろうか《ブツブツ》 ってそんな事はどうでもいい
ー！ とりあえず真桜！ 隊長を離せー！」

「いややー！ 隊長は言うなればうちの隊の救世主や！ そんな人が
うちの為に助け船を出してくれたんやったらお礼の一つぐらい
あれ？ 隊長どないしたん？ いきなりだらけて」

「……………《チーーン》」

「お、おい真桜！ 隊長どうしたんだ」

「どうしたのー！？」

「わからん！ うちが隊長を抱き締めてたらいきなりダラッとして
もつて」

「原因はそれ以外無いだろうー！」

「キャアー！ 隊長が泡吹いてるのー！」

「《ブクブクブク》」

「衛生兵！ 衛生兵をよべえーっー！」

聞こえてきたのは警備隊の漫才にも似た掛け合い………なのだが、
どうやら一刀は報告の選択肢を間違えたようだ

扉から出てみれば衛生兵が運ぶ担架には泡を吹いて青ざめた顔色の
一刀

その隣を付き添うように走る凧、真桜、沙和の三人が医務室に突撃
していった

食堂ではまだ興奮冷めやらぬ真桜隊と真桜隊の者に礼を言われてい
る他の警備隊員

………最初はいがみ合っていた彼らだが、一刀が凧達を連れて
きてから随分と仲睦まじくなったものだ

彼らの今の笑顔が、私ではなく一刀の手によってもたらされたもの
なら、少しばかり自分が情けなく思えた

華琳out回想

………あの後、翌日目覚めた一刀はまた真桜に抱きつかれ そ
うになったが凧に取り押さえられた

今も一刀の案は継続している

真桜隊も兵器開発がある日は警備を休み、発明に明け暮れている

しかし……………現在は街にも城にも活気は弱くなった

一刀が呉に捕まってもう一週間が経っている

討伐に向かわせ、一日で帰ってきた春蘭達と見覚えの無い緑色の少女と、官軍とおぼしき少女二人がいた、が褐色の少女は落ち込んでおり、薄緑髪の少女は意気消沈している褐色の少女を慰めていた……………そしてその中に一刀は居なかった

玉座に将を集め、話を聞くと緑髪の少女は季衣の親友であり、一刀が見込んだ逸材

官軍は……………一刀を捕らえた孫呉が我々に課した罪として一刀が帰るまで世話をしろと言っらしい

そこは仕方なく了承し、典韋、真名を預け合い今は流琥、華琳様と呼び合い、季衣と共に新規の親衛隊の隊長に席を落ち着かせた

そして城下には一刀が捕らえたという噂が翌日に広まり、民達は一刀の心配をしているせいか活気が弱くなった

そして城では噂ではなく、事実として知らされているため警備隊は言わずもがな、将も兵も活気がない

特に風、稟と何故か呂布が重症だ

一刀が捕まった経緯を聞くと集まった将達の態度は様々

帰ってきた春蘭達は変わらず落ち込み、凧は拳を握りしめ「私もついでにっついでいれば……………」と齒を食い縛り、沙和はうるうる涙目

になりあわあわとし、真桜はそんな沙和を落ち着かせながらも自分も慌てる心を落ち着かせていた

秋蘭は腕を組みただ沈黙を守っているが、あまりに落ち込んでいる姉が心配でならないらしい

桂花は落ち込んでいる皆を前にいつもの威勢がだせないでいる

そして風と稟だが……この中にいる人物の中で尤も一刀と共に過ごした刻の長い二人が普通でいられるかが不安だったが、あまり変わった所は無い

………風の頭の上にいたはずの人形は飴を持ちながら風の足元に落ちている

稟は凧と同じなのだが……口の端から血が流れている

「ここでとやかに言っても仕方ない。呉から通達が来るまで各自の今まで通りを貫きなさい。民や兵に不安の波を感染させないように解散」

見ていられなかった

自分が愛している部下達の傷付いた姿が

そして私自身も……中々まいつているのか気が重い

皆がその場を後にしようと踵を返すなか、流琉が玉座に駆け上がった

てきた

皆驚くなか、私の目の前に来た流琉はその手に持った何かを玉座の手置きに置く

それは一刀が大切に持っていた内の一つの酒瓶

私は流琉の顔を見る

その顔ははつきりとした意志が見えた

「兄さまは……兄さまは絶対帰ってきます！ これは兄さまの誓いの証、無事で帰ってくるって私に誓ってくれました。私を認めた証だといってくれました！ だから！」

流琉は私の手をガシツと両手で掴み

「兄さまが帰って来るまで、皆さん元気にいましょう」

……私は何を考えていたのだろう

一刀が私達の悲しむ顔を見たいと思うだろうか

今弱気になっていたら攻められた時は何も出来ない

皆も同じ想いなのだろう

春蘭はキツといつもの目になり秋蘭に「秋蘭！ 鍛練の相手になれ！」と言い、秋蘭は元気を取り戻した姉に気を良くしたのか「ああ……！ やるぞ姉者……！」と闘気をみなぎらせ、それに便乗し風も同じく闘気をみなぎらせ、片手に炎の様な彼女の氣を灯し「御供します春蘭様！」と玉座の間の扉を勢い良く開け飛び出していった

その後を「待つてください春蘭様、秋蘭様、凧ちゃん！」と季衣が追いかけて「んんん………沙和も負けてられないの！」、「待ちい！ うちを置いてくなく！」と沙和と真桜「恋も………！」と何故か呂布が追いかける

それに「お待ちください恋どの」と陳宮

玉座の間に残ったのは私と流琉、文官の面々

「流琉」

「はい」

「ありがとうございます。貴女に思い出させてもらっただわ」

「い、いえ。私は兄さまが言いそうなことを言っただけですから」

「それでもよ、礼を言っわ」

「は、はい……」

流琉は笑い、春蘭達の仕合う中庭に駆けていった

風はそれを見て足元に落としていた人形を再び頭に乗せ、割れた飴を袖にいれ新しい飴を袖から取りだし口にする

稟はグイッと口の血を拭い、眼鏡を外して目元を手の甲で一拭いし、いつも通りのキリツとした目になり風と共に私に一礼し玉座の間から去っていった

桂花は出遅れたように一礼し去っていった

「……………」

酒瓶をしっかりと手に取り、私は自室に帰った

その夜、鍛練に参加した者が皆呂布に一蹴された事に翌日度肝を抜かれた

そして呂布の食事の量が季衣をも上回るとは思っても見なかった…

……

そして現在、呉からの通達を待っているのだが全く音沙汰がない

一週間目に突入したせいか皆の気持ちも落ちてきてしまっている

そしてその一週間目も今は終わろうとしている

机の隣にある窓を見るとすっかり日が暮れ夜になっている

そろそろ食事時、仕方なく席を立ち扉に近付く

「《ドンッ》っと、少し疲れてるのかしら。机にぶつかるなんて…

………あ

化粧台と机の間にあるお茶の時間用の少し脚の短い机にぶつかって
しまった

その机に視線を向けてみるとその上には一刀の酒瓶が置いてあった

「……………一刀。貴方は一体、今何をしているの？」

ふいに月光が私の部屋を照らす

夜の黒に染まった部屋を蒼く、白く照らす

酒瓶の中で揺れる酒が月光に照らされ煌めく

見上げると、一刀がはんばんぐを振る舞ってくれた時と同じ、蒼白

の満月が漆黒の夜を照らしていた

まるで彼が夜の様に黒く染まったこの世界を照らす満月に思える

その月に守られていた時間はとても安心できる時だった

……あの時の面子と流琉を集めよう

はんばーぐを作ろう。流琉ならば更に美味しく作れるだろう

私は扉を開け皆を集めに行った

そして華琳が居なくなった部屋は変わらず、蒼白の満月に見守られていた

ある宿屋の一室

そこには一刀が初めて警備隊の仕事として助けた親子が泊まっていた

「一刀お兄ちゃん、大丈夫かなあ？」

「一刀君なら大丈夫よ。御強いんだから」

「一刀お兄ちゃんに会いたいよ」

「そうねえ……………じゃあ一刀君が帰って来たら私達のお家の場所を教えて、お暇があれば来てもらいましょうか？」

「本当！？ じゃあ一刀お兄ちゃんが無事で帰って来れるように御祈りしなきゃ！」

「じゃあお母さんも一緒に御祈りしようかな」

「うん！」

「（長い休暇を取っておいて良かったわ……………一刀君、どうか御無事で）」

二人もどうやら一刀が心配の様で寝る前に机に座り手を握り合わせ祈っていた……………

一刀side

「なんだ……………あれ……………」

俺は今、戦場に立っている……………様だ

見た目的に此处はこの世界の場所の様だが、目の前に広がる光景は
圧巻だ

数はざつと十万程、そしてその前に一人の男……………あの夢に出た黒
い男

そして合い対するは……………愛紗達

「あ、愛紗！ 鈴々！ 星！ その男は危険だ！！ 相手をするな
あつー！！」

走る

手を愛紗達に向けながら駆け走る

愛紗達は武器を構え、黒い男に叫んでいる

男はどうやら抱えていた何かを連れていた馬の背中に乗せて俺の後
ろの背後にある城に走らせた

その馬は良い馬のようで俺の隣を駆け抜けていった

その馬を無視して黒い男に走る

愛紗達は変わらず男に武器を向けている

すると男は持っていた示現一刀を肩に担ぎ、足を開き、左手を開いた足にかける

すると示現一刀に蒼黒の雷が集まり、更に大きな刀が現れた

「……………逃げ」

《ブウフユウイーーー!》

肩に担いだ変化した示現一刀を両手持ちに変え振り抜く

振り切ると纏っていた蒼黒の雷が半月状の刃になり愛紗達目掛けて飛び出した

そして

《グウワアア!》

直線上にいたものを全てをさらい、只の道に還した

そして……………愛紗達も居なかった

「……………~~~~~……………貴様ああアアアツ！！！」

駆ける

黒い男に向かって、拳を握り、駆け抜ける

そしてその拳を目の前に近づいた黒い男に振り上げた

「……………殺気を出しすぎだ」

しかしその拳は空を裂くだけで、何も捉えなかった

「《ドゴッ！》ぐはぁっ！！！」

そして黒い男の拳が俺の腹を殴り付け、吹き飛ばされた

「く、くそぉっ……………！！」

「……………まだ覚悟が出来ていないのか、お前は」

「覚悟だと……………？ 自分の仲間を殺される覚悟をか……………！！？」

「そっだ、お前はまだまだ世界を知らない。前まで人の死を真の意

味で知らず、また……向き合おうとしなかった」

「……………」

あるニュースを思い出す

外国の何処かで紛争が起こって、紛争が原因で人がいっぱい死んで、紛争が終わっても食糧が無くて生き残った人もいっぱい死んだ……

「今、お前が思っていることがお前が向き合わなければいけない……
……………現実だ」

そう言つて男はサア〜と砂になつたように消えた

世界は男が柱のようだったのか、柱を失つた世界は崩れ落ち、真つ暗な世界に変わった

「……………くっ……………うっ……………うっわあああああ
……………!」

真つ暗な空に、俺の叫びが虚しく木霊した……

.....。

不意に光がさし、俺を包み込みように光が広がる

見上げてみると丸い穴から出てきているようだ

そしてその穴からスウッと何かが伸びてくる

腕.....みたいな光の塊が俺の方に伸びてくる

その手は丁度俺が手を伸ばせば届く所までで止まり、俺に指先を向けた

俺を呼んでいるのか.....？

手を伸ばし、その手に触れた

その手に引き上げられ、光が出てきている穴に引きずり込まれた

その先には.....

「何をへこたれとるか、この馬鹿孫が！」

俺が尤もお世話になった、祖父の笑顔があった.....

.....。

「北郷、目を覚ましたか」

じいちゃんの笑顔が霞んで黄蓋さんの笑顔に変わった

黒い空間も消えて、真っ赤な部屋の寝台で俺は目を覚ました

「んっ.....ここは.....？ 《ズキツ》っっ...！」

「落ち着かんかい。まだ傷が癒えきつておらんのかなから」

「ん.....ごめん、ありがとう」

真っ赤な天井を見ながら寝ていた俺は取り敢えず起き上がってみただがまだ治りきっていなかったのか少し頭痛に頭を痛めた

そこに黄蓋さんが俺の背中に手を回して支えてくれた

その行動に少しながら母さんに心配された時の安心感と、じいちゃんに軽く叱られた時の罪悪感を感じたので謝って御礼を言った

「.....あれ？」

「ん？ どうした？」

「えっと……………この服何？」

「僕らが御主に貸した寝巻きじゃが？」

……………うん、材質からしてこの世界の着物と同じ感触だからそれは何となく勘づいてはいた

けど……………一体俺はいつの間に着替えたんだけ？

「……………俺はいつの間にもこの服を……………？」

「今日の朝方じゃあな。僕と侍女数人でお主を着替えさせた」

「……………」

朝方……………あの、男の象徴たる場所がもっとも猛ってしまうあの時間に……………？」

しかも黄蓋さんだけじゃなく侍女の方々にまでも愚息を見られた……………？

「《カア……………ッ！》あぁっ……………ありがとう。今の俺の現状と同じなら汗だくだったでしょ？」

顔が灼熱した

しかも既に服がびしょ濡れだったので更に溢れだした汗で乾いていた服がまた濡れて気持ちが悪い

しかし黄蓋さんは何も気に止めずに話を続ける

「おう、一週間も食事も摂っていなければ水分も意識が無かったせいで少ししか摂れなかった御主が滝の様に汗を流せるものなのか不思議に思っただけじゃ。……………しかしよく脱水症状がなかったの
お？」

「そ……………そんなに？」

「応さ。どうじゃ北郷、腹の具合は？」

「腹？ 《ぐるぐるきゅ》……………空きました」

「じゃあ少し待っておれ。用意してやる」

「本当？」

「応」

その一言を残して黄蓋さんは寝台の傍にあった椅子から立ち上がり、扉に向かって歩を進める

ここまで何も言わないんだからきつと服を着替えさせただけであそ

ここまでは見えてないんだろう、きっとそうだ、そうに決まってる。だって会って間もない男の下着を脱がすなんてそんな………あ、あれ？ 下着？

「……………《チラツ》えっ……………?」

下着というキーワードに違和感を感じ自分の下着を確認してみた

俺は……………真っ白な禪を着用していた

禪……………? ………………FU・N・DO・SHI!? まてまてまて、禪を何故穿いている!? てかそれ以前にどうやって!!? ?

驚愕の表情していると扉方面からクスクス笑いが聞こえる

その方向に視線をバツ！向ける

その先には口に手の甲を当てながらクスクスと笑う黄蓋さん

「ふふっ、お主の穿いておった下着は侍女に洗わせておるから乾くまでそれで我慢してもらっぞぞ」

と言いきり部屋を出ていった

……………服が着替えさせられているからって下着まで着替えさせられていないと思っただがそんなことは無かったぜ！

……もうお婿にいけない……

そんな自己嫌悪を続ける俺がいた

落ち着け、落ち着くんだ俺！ ……よしっ、水でも飲んで心を鎮めよう

寝台の隣にある化粧台の様な机に置いてある急須の様な物を取って、その急須の隣に積み重ねられている碗を取る

「《スツ》」

「えっ………？」

しかし伸ばした手は急須を掴むことは無く、ただ空を浮くだけだった

急須が消えた………ではなく誰かの手に引っ張られた

そちらに視線をおくってみると

「お水なら私が入れてあげる！」

孫策と同じ容姿だがちっさい、もとい幼い………えーと、孫尚香だっけ？

「君は……………孫尚香だったっけ？」

「わっ、覚えててくれたの!？」

「臆気ながらね。ありがとう、心配してくれて」

「うっん、御遣いが民の皆を守ってくれたんだし心配するのは当然だよ」

「そっか、ありがとう。あゝ、そっぴやいつからここに?」

「祭がご飯を作ってくるって扉を開けて出ていった隙を見て入ったの!」

あゝ、うん、孫策の妹だ。容姿とかそんなんじゃない、奔放さが似すぎてる……………ん?

「隙を見て入ってきた?　なんでまた」

「え……………えーと、そ、そんなことはどうでもいいから!　はいお水!」

「お、おおっ……………?」

聞いてみたが何故だかはぐらかされた

一応受け取った水を一飲みで飲み干し「うん、すつきり」と感想を述べる

「小蓮さまあゝ、どこにいらっしゃるのですかあゝ！」

「げっ！ バレたー!!」

「バ、バレ……………？ 《ズボオツ！》 ちよっ？ 孫尚香！？」

「お願い御遣い匿って〜！」

「匿う！？」「ここですか小蓮さまあゝ！《ガチャ》」「うえっ！？」

孫尚香が俺の布団の中に入ってきて潜った

あわててる間に扉の取っ手が引つ張られて開いた

その先には白い肌の薄緑髪の女性がいた

「あ、御遣いさ〜ん。ここから尚香様の声が聞こえたのですがいらっしゃいますかあゝ？」

「孫尚香ならさつきそこの窓から飛び出していったよ？ えー、陸遜だっけ？」

「は〜い、陸遜伯言ですう〜。細かい自己紹介は尚香様を捕まえて

から致しますので、では」

「うん、また後で」

ユツタリとした口調での会話にテンポを乱されながらもなんとかやり過ごした

しかし陸遜は俺が指差した窓に近づき、ガチャガチャと開けようとするが開かない

あ、やつば

「御遣いさ〜ん？ うそはいけませんよお〜？ 鍵が開いてないじゃないですかあ〜」

「アツレ〜？ オカシイナ〜？ 閉メタ衝撃が強スギテ鍵が閉マツ
チャツタノカナア〜？」

ここはシラを切らなきや

だつてさっきから足をつねられて痛いもの

てか孫尚香、自分の理由も相手に教えずにこの仕打ちはどうかと思
いますがねえ〜！？

「そうなんですかあ〜？ …………… 《ガシッ》」

「えっ……………」

納得したのか、そんなことはを思っていた時期が私にもありました

しかし無情、陸遜の手は俺の足に被さっている布団を掴む、つまり

……………

「《バサァッ！》見つけしたよ、小蓮さまあ

「キヤアー……ッ！ もう勉強はIYAAAAA……!!」

「お待ちください小蓮様ああああ……」

陸遜は布団をめくりあげ俺の足の間で丸まっている孫尚香を発見

光が射したことに孫尚香はビクツとしておそるおそる首を後ろに回して、ほにやりと笑っている陸遜を捉えた

途端に孫尚香は飛び起き部屋から飛び出し、その後を陸遜がおっそい走りで追いかけた

……………なるほど、勉強が嫌で逃げ出したって訳か

「今のは尚香殿と伯言か？」

開けっぱなしだった扉に黄蓋さんがお盆に皿とお椀を乗せて帰ってきた

「なんだか、勉強から逃げてきたみたい」

「やれやれ、自分から勉強の時間を増やしてしまったのに情けない」

「勉強嫌いなのに増やしたの？」

「なんでもお主が城に運び込まれたのを知って看病をするかわりに勉強の時間を増やしたというらしい」

「……………なんだか、申し訳ないな」

「まっ、尚香殿が望んだことじゃから気に病むことはないじゃろっ。ほれ、冷めぬ内に飯としよう」

そういいながら扉を閉め、椅子に座り自分の膝に料理を乗せる

「うわぁっ……………！」

「ん？ どうした？」

「いや……………すごく美味しそうだなっと思って……………」

「ふぶっ、そうか……………？」

「うん、見た目も匂いも文句無しだよ」

お椀にはふつくらとしていて湯気を立てたお米が盛られていて、お皿には青椒肉絲がキラキラと輝きながら湯気をたてている

あれ？……………湯気？

「この食事って今作ったの？」

「おう、僕の手作りじゃ。心して味わえよ？」

「手作り？ 黄蓋さんって料理上手なんだね」

「ほれ」

「……………えと、黄蓋さん？ 自分で食べるから……………」

黄蓋さんが持ってきたレンゲに青椒肉絲を一掬いし、俺の口の前に

これは、あれか？ “あくん”か？ “あくん”だな。待つてくれ。待つてくれ黄蓋さん。食事ぐらい自分で

「この阿呆が。食事をするなら机の上が普通じゃが、今のお主はまだ完治したわけではないんじゃないから寝台から椅子に移すのも不可能かと言って寝台の上で食事をするのも溢してもらっては困る。じゃ

から儂がこつしてお主に食わせようとしておるんじやろつが」

「づぐ……………っ！」

た、確かに一週間も寝たままだったんなら体も鈍ってるだろう

寝台の上で食事も同じ

……………ぬぐぐぐ……………え、ええええい！！ 仕方ない！ 腹を
くくるか！

「あ……………あ……………」

「あら可愛い顔」

「あぁっ！？」

覚悟を決め、レンゲにかぶりつこうとした所に聞き覚えのある元気
な声

あゝ、えゝ……………すごく見られたくない所を見られてしまった気
が……………！！

声のした方向にあゝん状態のまままで視線を流す、そこには

「はゝい一刀 随分祭に手懐けられてるわね」

「……………確かに、あの様な顔をされては、警戒心も削がれるというものだ」

「そ、孫策。周瑜さん」

腰に手を当てニッコリ笑顔の孫策と腕を組み、やれやれといった風情の周瑜さん

う……………ぐおおー！……………！ 恥ずか《ズボオッ！》

「うわらばっ！」

「さっさと食わんか！」

黄蓋さんが俺の口にレンゲを突っ込んだ

硬直時間が長かったんだろうか

しかしそんな考えも吹き飛んだ

「……………《ムグムグ》」

「……………？ どうした？」

うまい

ただそれだけが頭をいっぱいにした

濃い目の味付け、すっごく米が欲しい

「《スツ》 ほれ」

「ありがとう《ハムツ、モグモグ》」

また黄蓋さんが青椒肉絲を運び、俺はそれを躊躇なく口にす

そろそろ米が欲しい

「《ごくっ》 黄蓋さん、こ」

「ほれ、米じゃ」

「ありがとう《ハムツ、モグモグ》」

勘づいていたのか米を既に用意していた黄蓋さんから自然に頂く

それをしている間に孫策と周瑜さんは部屋に入ってきて席に腰を落ち着かせる

「《ゴツクン》ご馳走様でした」

「お粗末様じゃ」

「では、話を始めてもいいか？ 御遣い」

「話？」

食事を終えて黄蓋さんが机にお盆を置いた、その後周瑜さんが話を切り出す

「貴様の罰についてだ」

「……………わかった。すう……………はあ……………うん、覚悟はできてる。言ってくれ」

周瑜さんの言葉に覚悟を決める

目を閉じ、深呼吸し、発言を促す

その行動を見ていた孫策と黄蓋さんはニッコリ笑顔である……………なん
で？

その二人を見て周瑜さんは額に手を当て深い溜め息をした

「貴様には侵入した黄巾党を殲滅してもらおう。無論私達を協力する」

「……………それだけか？」

「ああ、本来ならお前一人でやってもらうところなのだが、民を救ってもらった恩もある。故にこの措置をとった」

「そっか……………そっか。うん、わかりました。その罰、理解しました」

「よし！これで曹操達に通達が出来るわね！」

「えっ？ 通達、まだだったの!？」

「そりゃそうよ。何？ 貴方は捕まった仲間が意識不明の重体だなんて報を伝えるって言うの？」

「そ、そりゃそうだけど……………」

皆、心配してるかな……………そうだ！

「なあ孫策。通達と一緒に渡して欲しい物があるんだけど」

「何？」

「手紙……………なんだけど、貸して……………貰えるかな？」

「わかった。儂が持ってきてやるわ」

「えっ？ こ、黄蓋さん？ そんな即決でいいの？」

「応」

扉から出ていく黄蓋さん

それを見てまた頭を痛める周瑜さん

かわらずニツコリの孫策

待っていると筆と墨、紙を黄蓋さんが持ってきた

「今日じゃなくてよかったのに……………」

「それを先に言わんか！」

「言う前に出ていったんでしょ！ まあいいや。よしよし」

「あら、動けるの一刀」

「なんとかかね」

寝台から降りて黄蓋さんからもらって書き始める

さらさらと短い文を書いて周瑜さんに渡す

「……………？ 御遣い？」

「俺が何を書いたか確認しとかなきゃいけないでしょう？ だから」

「……………なるほど。雪蓮と祭殿が気に入る訳だ」

「だろう？」

「でしょう？」

「……………？」

気に入る訳だって……………ん……………よくわからないな

「しかし一刀は優しいわねえ？ こんな手紙を書くなんて」

「ははっ、そうか？」

周瑜さんが手紙を読んでいるのを覗き、言う孫策

「友達に心配ばかりさせるのは気が引けるしな」

「ねえねえ一刀、呉に来ない？ 曹操の所だと客将なんでしょう？」

「……………それは無理だ。俺には一緒戦うと決めた仲間がいる。でも黄巾の乱が終わったら、またここを訪ねるかもしれないけどね」

「ふつ、もし軽々しくこちらに来るなど言ったら儂が一発でかいのをおみまいしてやるところじゃ」

「借りにも怪我人にそれはどうなの？」

「さっ、お話は終わり さっ一刀、お酒にしましょ」

黄蓋さんとの掛け合いが終わった途端に孫策が酒を要求

「あゝ、孫策？ 陸遜と孫尚香がこれないから無理だろ」

「あ……………」

「あと俺の荷物と刀は？」

部屋を見渡してもそれらしき物はない

「危険が無いと限らないから私達が保管している。貴様の力は雪蓮と策殿から聞いておるのだが、蒼い雷は今も使えるのか？」

「あ、そうですね。あの刀が無かったら蒼雷は安定しないからあまり使わないです」

人差し指を立てて蒼雷を出してみるけど小さい静電気みたいなもの

しか現れない

「むう……仕方ない。シャオと穩の都合があった時に頂きましよう。じゃあね一刀」

「ではな北郷」

「……………北郷」

「はい？ 何ですか周瑜さん」

「周瑜でかまわん。ではな」

「え？ あ、はい。ではまた」

「敬語も構わん」

「う、うん」

そついい皆は扉から出ていった

「……………寝るか」

やる事が無くなったので寝ることにした

あれ？ そついや孫堅文台と孫権仲謀はいないのかな？

もう一つの武、白虎と熊猫との遭遇、二つの記憶

一刀 side

「《パチツ》…………… やっぱり、目を覚ましても見えない天井は見覚えのある天井とは違うか……………」

目を開けて真っ先に見えたのは赤い天井

窓を見ると少し夜が明けてきた位の薄暗さ

日本時間なら四時か五時ぐらいだ

やることも無いから取り敢えず起き上がって背伸びをしてみる

「《ボキベキビキメキピキ》…………… 今までに無いぐらいに盛大な音が鳴るな。やっぱり一週間も寝たきりだと鈍るか…………… ストレッチしよう」

寝台から降りてまずアキレス腱をほぐし屈伸に移項する

伸ばして畳んでを繰り返すなかでやはり骨が鳴るのは当然で、鳴らなくなるまで三十回やる

そして蹲踞そんたせをする

剣道の時に足を畳んで立つのだが、剣が無いから只の屈伸に股を開くだけになってしまった

足と言うより股関節のストレッチになってしまったが結果オーライである

次は前屈、今度は腰が鳴るが手は床に着く。これは十回したら鳴らなくなった

下半身は終わったので上半身のストレッチ

肩、肘、手首、指、首とストレッチをしていく

肩はグリングリン回して肘もグリングリン回す

手首は前後に振ったあとに掌底の形にして片手で指を引っ張り、今度は逆に手の甲を前にして引っ張る。もう片手も同様に

指はうねうねを続けてなれたあと第一関節を曲げるように力を入れる

首は左にグリングリン、右にグリングリン回す。やはりボキボキ鳴るな

ストレッチながらも体が暖まったのか汗が出てきたので上の着物を脱いで、寝汗を拭いてそのまま置きっぱなしだったのか汗臭い布があったので一応拭う

そして昨日手紙を書いた机に座り水を飲む

喉に溜まった何かがすう……と体に流れたのを感じながら深呼吸をする

「なあ、昨日捕まえた黄巾党の頭つてまだ根城を吐かないのか？」

息を吐いた後に扉の向こうから話し声が聞こえてきた

寝ずの番の人かな？

「ああ、あいつ中々しぶとくてな。孫策様も周瑜様も頭を悩ませておられた」

「一週間も経つのに強情な奴だ。早く場所を吐かないと御遣い様は曹操の元に帰れないんだろう？ あの様に我々に尽くしてくれる御方が幸せになれないなんて世も末だな」

「しかも黄巾党の根城を吐いても御遣い様は俺達と一緒に根城まで行って殲滅行動に参加しないとイケないんだろ？ そっぴやお前つて御遣い様の戦いを見たことあるんだよな？ どうだった？」

もう俺の罪は呉の人間には知られているようだ

でも………なんで御遣い“様”なんて呼ばれているんだろう？

「御遣い様の戦いは………孫文台様みたいだったな。圧倒的な力でねじ伏せられる様な、そんな感覚だった。剣を一振りすれば地面が割れて、電光石火の如く瞬殺する。そんな所だ」

「そんな所つてお前なあ………」

その声は少しずつ小さくなりながらも耳に届いていたが、ついにそれも聞こえなくなった

……… やっぱりこの力って周りの人から見たら化け物と変わらないんだな

力が無くても戦えるけど、この頃は力ばかりを使っている。依存…

……… かな、こりゃ

……… 強くないと……… 強く、自分自身の力で、強く………

「……… 久しぶりに体術の鍛練でもするか」

じいちゃんと稽古をしていたときにある質問をした

『剣が自分の手に無かったらどうすればいい？』

その質問を聞いたじいちゃんからの返答は

『お前が鍛えぬいたその肉体を使って相手に勝て！』

だった。しかし拳闘なんて一度もしたことが無い俺にどうしろとと問う

『ならば一度、我流の格闘スタイルを作ってみたらどうじゃ？ なんとじゃったら知り合いの格闘家に教えをこつてみるか？』

とじいちゃんは提案をしてきた

『ん……… まだ示現流も習得できた訳じゃないから、まだいいや。

まあ暇があるときに作ってみるよ』

しかし当時の俺はまだまだ未熟で剣道でも華々しい成果を挙げていなかったから保留にした

何と無く本を見たり経験者の友達に話を聞いたりして、じいちゃんとの鍛練が終わってから組み合わせせて作り上げていった

『お前の格闘術を格闘家の友人に話してみたら興味がでたらしくて、今度訪ねに行くから付けてこい』

鍛練をしていたら見ていたじいちゃんが提案

それに付いていっいたら白髪のおじさん………なんだけど、屈強な肉体、高身長で強面

道場主だったそのおじさんは、青年のお弟子さん達に戦いを挑まれては、まさにちぎっては投げ、ちぎって投げである。結局、十数人のお弟子さんは皆撃沈

次に中年の方々が立ち向かい、青年の方々よりは粘るが六人の中年の方々は撃沈

そして次に呼ばれたのはじいちゃん………つてええー！！？

隣で一緒に観戦していたはずのじいちゃんはいつの間にか格闘着で正座しており、ニヤツと俺に憎たらしい笑みを浮かべた後、そのおじさんに挑んでいった

じいちゃんの実力をすっかり見よう、と意気込んだのだが………何

故だが肩を叩かれ振り向く

そこには髪をポニーテールに縛った女性が後ろにいて、手を引かれて格闘着を渡されて更衣室に放り込まれた

そのせいでじいちゃんとの戦いを観戦することもかなわず、俺もあのおじさんと戦わないといけないと静かに理解した

仕方無しに格闘着に着替えて、更衣室の前で待っていた女性に連れられて道場への道を歩む

廊下を歩いているとピピイーーーー！とブザーの音が聞こえた

道場に入るとじいちゃんもおじさんも汗まみれで握手を交わしていた

どうやら引き分けのようだ。でも……………あんな疲れているおじさんと戦えって言うのか？ と少しムカついたがこの後本当の意味を理解する

『よろしく願います！！』

俺を連れてきてくれた女性が勝負を仕掛けてきた！ ってええー！！？

二度目の心の中の絶叫をしたところでじいちゃんから話される

『その子は彼のお孫さんじゃ！ なぁに、格闘技ならば遠慮は不要！ お前なんぞより実力は十倍以上じゃ！』

『内の孫は強いぞお！ 遠慮無くやりたまえ！』

とおじさんも乗り気だ

彼女もおじさんと同じ構えをして、戦う者の目が変わった

……何故だが周りの青年のお弟子さん方々からとてつもない殺気の籠った視線を向けられているが無視しよう、無視だ無視

(戦闘描写に移ります。“ ”が“ ”になります)

「よろしくお願ひします………《スツ》」

「……………《ニコツ》」

「始めっ!!!」

埒空かずして我流の構えをとる。足を開いて、右足を前に、左足を後ろへ置き左向きに、右手を何かを鷲掴みにするように構え、左腕は肘を後ろ向きに、左手も右手同様にする

その構えを見た彼女は何故かニコツと笑い、審判役の女性が始まりを告げる

「はあっ! やあっ!」

「《シュボ!》くっ! 《ヒュン!》 のわあっ! はあ………せやあ!」

「《ガシツ》 えりやあ! 《ぶうん!》」

「なっ!?!」 《ヒュバ!》 うおおあ!」

彼女の掌底を顔の側を過ぎるのを冷や汗ながらも避けるが、続いて回し蹴りがまたもや顔に迫る

それを腰をマトリックスマスもビックリの仰け反りで避け、後ろに飛んで距離をとる

そして息を調べて、伸びるところまで伸ばした蹴り、所謂足刀を彼女に近づき放つ

しかしその蹴りは難なく避けられ、足を捕まえられ投げられる

「《バンツ、ゴロゴロ、ズザアツ!》っ痛! ……すう…っ、はあ…っ」

「《バツ!》 ふっ!」

ジャイアントスウィングの様に放り投げられた、何度か転がったが足を伸ばし、転がるのを止め立ち上がりながら構えをとる

彼女も息を小さく吐き、構えをとる

駄目だ、隙がある攻撃は逆に仇となって投げられやすい

俺の格闘スタイルは蹴りを重点的においたりリーチのある戦い方なんだが、俺の蹴りは彼女の動体視力を上回る速さに達していない

どうすればいいだろう……俺も投げ技を試してみるか? ……いや駄目だ、投げ技への対処なら彼女は理解しているだろう

ならば、拳で？ ……いや、まず彼女に間合いを詰められるのか？

「はあっ！！《タンツ！》」

「 ……！？」

考え事に没頭するあまり彼女が一瞬で間合いを詰めに来たのに反応が遅れた

意識を目線に向けたが既に彼女の拳が目の前に迫り来る

どうする！？ この早さに一瞬で対応できるか？ ……やるしかない！！

「うううおお！！《ヒュン！》」

「《バシンツ！》なっ！？」

彼女の拳の進行方向に裏拳を一か八か放ってみた

運良くその裏拳は彼女の腕に命中、腕は力を流しきれず弾かれた

そしてついに俺にチャンスが巡ってきた

彼女の左半身はがら空きになったのだ

俺のとおっておき、やるなら今しかない！

「ハッ！ハッ！ハッセツ！ハッ！セツ！デリヤア！！」

「《バツ！バシツ！バツ！バンツ！バツ！ドガツ！ゲンツ！バキヤン！！》ぐうあああうっ！」

回し蹴りの嵐

右足で相手の脛を蹴り、回転して左足の踵で腰を蹴り、回転の力に流されてきた右足で腹を蹴り、続く左足も腹を蹴り、右足で肩を蹴り、左足で相手の胸に乗り、その左足に力を入れて相手のバランスを崩し、宙に浮いていた右足を左足で踏み込んだ力を乗せて一気に振り抜き、蹴り飛ばす！

この独楽のような連撃を受けた彼女はぐるぐる回転しながら吹き飛び、仰向けになった

「……………勝ったか……………？」

「……………《ムクツ》」

「なっ……………！？ まだ立てるのか……………！？」

勝利を確信したが詰めが甘かった

彼女は俯きながらムクリと立ち上がる

「……………疾っ！」

「《パキヤァン！》ぐうあはっ！！！」

しかし彼女は俺の視界から消えた

驚いた途端に顎に強烈な衝撃が襲い、口の中が切れ血が飛び出した顎を打ち抜いたのは彼女の掌底、しかも油断していた俺は衝撃を流すことも出来ずクリーンヒット

顎の衝撃が脳に伝わり、一瞬意識を失いかけるが彼女の攻撃は止まらない

「ていつ！《ドゴオツ！》《ガシッ》せりゃあー！！」

「《ドボオツ！》ゴハツ！ 《ドバァン！》かは……っ！！」

顎に掌底を喰らったせいで上を向き、がら空きになった腹に正拳をもろに喰らい、前に上半身を倒した俺の腕を掴み、彼女に俺は一本背負いされた

受け身もとれずに叩きつけられた衝撃を全身に受けたせいで肺は吸い込んだ空気を全て吐き出した

意識が遠のく、少しの間目も朦朧気だったのだが元に戻り、最初に見えたのは……俺の目の前で停止する彼女の手刀だった

「……………参り……………ましたあ……………！！」

「……………ふう、ありがとございましたー！！」

『パチパチパチパチパチパチパチパチパチ！』

「よく健闘したな坊主！！」

「中々見ごたえのある闘いでしたよ！」

「しかしお嬢にダメージを与えるとは、感服したぞ！」

観戦していた方々から拍手と賛辞を受ける

仰向けに倒れている俺に彼女が手を差しのべる

その手を握り、立ち上がろうとするが足が笑ってしまっただけでバランスが取れない

そんな俺を察してくれたのか彼女は肩をかしてくれた

「ボロボロだな。一刀」

「いやはや、流石は北郷さんのお孫さんじゃ。まさか“戒那”がそこまでやられるとは」

そんな俺達に歩み寄る二人、じいちゃんと道場主さん

“戒那”それが彼女の名前らしい

見た目からして俺と変わらない歳（この時の一刀は十三歳）だともう

「いや、彼女も流石です。少し悔しいけど、やっぱり敵いませんでした」

「当然じゃろう。戒那ちゃんはお前が剣術をならいだした時の歳よ

り早くから“ 巖凱 ”さんに拳闘を習っておったんじゃない」

俺がおじさんに返したらじいちゃんが彼女のことを話してくれた

その会話の最中に聞こえた名前“ 巖凱 ”それが道場主さんの名前らしい

「そういうが北郷さん、一刀君はまだ拳闘を始めて三月半なのに戒那に攻撃を与えられるなど才能じゃろう。しかも我流なんだろう？」

「さ、三ヶ月半で、がががが我流 ！！？」

『《ざわ……ざわ、ざわ……！》』

じいちゃんの説明に巖凱さんがお返しと言わんが如く次は俺のことを話した

それを聞いた戒那さんは俺が我流なのを大層驚いた。口に出してまでだ

その声はお弟子さん方にも聞こえたようでどこぞの人生逆転ゲームのようにどよめいている

「随分様になつた構えだったからどこかの流派なのかと思っちゃった。ごめんね、我流とはわからなかったから本気でいっちゃった」

それを理解した彼女は我流の俺に本気できたことを謝り出した

どちらかというと俺は感謝する方なのに

「いえ、始めて少ししかも経っていないけど貴女に勝つ気で行きま
した……………結局負けましたけど。でも貴女はそんな俺の慢心を砕い
てくれた。それに、謝罪なんて止めてください。どちらかと言えば
本気でかかってきてくれたことと慢心を砕いてくれたことに対して
俺は感謝を述べるべきなんですから」

「えっ……………？」

「そうじゃぞ戒那。お前は武をたしなむ者としての当然を果たした
に過ぎん。逆になめてかかって負けただけのほざいておったらな儂が
灸をすえてやるところだ」

「は……………はい……………《ジィ〜〜〜〜》」

「な、何？」

自分の意見を述べて、巖凱さんに叱られた戒那さんは、少しの間を
とって返事をしたのだが、何故だかジィ〜〜ツと俺を見つめる戒那
さん

疑問符を出して返事を待つが、戒那さんはいきなりニッコリと笑み
を浮かべ、俺に手を出す

その手は握手を求めるものだど理解し、俺も自然に手を出す

ギョツと手を握り合い、お互いの目を見て自己紹介を

「私は戒那。氷里戒那^{ひよつりかいな}。戒那って呼んでね」

「俺は一刀。北郷一刀。一刀で結構です」

自己紹介を終えて手も離れたのだが戒那さんはぶくうつと頬を膨らませ、前屈みになりながら両腰に手をあて

「んもう。戒那って呼び捨てなのに敬語は無いんじゃないかな？ そっちがその気なら私だって一刀じゃなくて一刀ちゃんって呼ぶわよ?。」

「是非とも止めてください……! …………… わかった、確かに同世代だしね。よろしく、戒那」

「……………ぶぶっ!。」

「??? ど、どうした?。」

了承したのだが、何故か戒那は吹き出した

両手で口を抑えて笑いを堪えている

あつ、もしかして同い年じゃなかったのか？ 確かに可愛い人だし、もしかしたら年下なのか。……………あれ？ 確かにじいちゃん
は俺が剣術を習い出した歳より小さい時から習い始めたって言う
たし、年下はないか……………?

じゃあ年上？ 可愛いしいお姉さんとかもいるし、二歳位かな、歳の差は

戒那は笑いが治まったのか「ふう……………」と息を整えて口を開く

「私はおじいちゃんに拳闘を五歳の時から習って、現在拳闘歴十三

年の高校三年生！」

「……………えっ？」

高三、五歳から習って十三年。つまり……………十八歳

「……………え、嘘だ」

「ホントよ、失礼ね。拳闘を習ってたおかげで大学に推薦入学できる受験に悩むこともない立派な高校三年生よ！」

「……………」

思考が……………停止した

周りの皆さま方はクスクスと笑ったりガハハハと笑ったりしている

そんな俺をみて気を悪くしたのかぶうたれ顔の戒那さん

「ぶー、ぶー、悪かったわね、歳に似合わず魅力なくて」

「……………いいいいいいえ、かかか可愛らしい方だなあとおおお思いますてえ！」

やばいやばいやばいやばいやばい！ じいちゃんに目上や年上の方には礼儀正しくしろって言われてるのに生意気言ってた！！

また……………またじいちゃんに……………うわあ……………！！！！

……………ででででも、相手が良いつて言っただから怒

「ね？ 戒那さんの行動一つでこんなに笑顔が出来てるんだ。人つてさ、嫌いな人の前では中々笑顔にならないんだ。だから、戒那さんは魅力タップリの可愛い女性だよ」

「一刀……………」

笑顔で諭す

戒那さんはお弟子さん方から視線を俺に移し、俺の名前を呼ぶ

それを笑顔で迎え、俺の考えを話す。……………戒那さんの顔の赤みは抜けてないけど

「……………嘘じゃないの？ ホントにホントに？ 《キュッ》」

「《キュッ》ホントにホントに。それとも、俺のこと信じられない？」

「うっうん。一刀とは拳を交えてわかる。一刀は嘘はつかないって」

俺の道着の袖をキュッと掴みながらの質問をする戒那さん

見上げるようにする戒那さんに笑顔で答え俺からも質問、その返事に戒那さんもニコニコ笑顔で頭を振り、答える

「なら、信じてください。友達として」

「うん。信じる、でも友達なら敬語はいらない。名前だって呼び捨てでいい。だから……………」

袖から力が抜ける。そしてその手は俺の目の前に

「これからも、よろしく」

「……………ああ。「こちらこそ」

《パァン!》

勢い良くその手に自分の手を。快い音と共に手と手が繋がれて、本日二度目の握手を交す

「でも……………ちょっと惜しいなあ」

「何が?」

「だって私、後半月でここから出ていくからさ。大学、都会にあるから」

「そうなんだ……………。でも心配は無いね。こんなに強いんだもん、誰かにちょっかい出されても逆に返り討ちにできるんだし」

「むう……………後三年遅く生まれてたらもつと長く一刀と過ごせたのに」

握手を止めて、戒那の話しを聞いてて思ったことを率直に話すと、
またもやむっくりむくれる戒那

後半月かあ……………つまり、俺が拳闘に戒那と一緒に費やせるのはそれまでか……………うん、決めた

じいちゃんと巖凱さんが何かを話しているが聞いてみる

「……………ねえ、じいちゃん、戒那があっちに行っちゃうまで拳闘習っていいかな？」

「む……………いいじやろう。巖凱さん、よろしいかな？」

「応。まだまだ未熟なところは儂らが正してやるっ」

「よし決定！ じゃあ戒那、少しの間よろしくな」

「……………一刀本気？ 貴方剣術もしてるのよ？」

じいちゃんが少しの間をとって考えた後、巖凱さんは速攻で承諾

意気込む俺に戒那は心配そうな目で尋ねる

「俺には時間が有るけど、戒那にはない。だったら答えは一つ、それに、俺だって戒那に勝ちたいもん。なら、拳闘を少しでも習って強くなる。戒那が帰ってきた時、胸を張れるように」

「……………あゝもう！ 嬉しいこと言ってくれるじゃない、年下のくせに……………！ 《ガバアツ！》」

「《ガシツ、グイツ！》ぐうええ！ ちよっ！ 戒那！ キマってるキマってる！ ハッ！？ でも何だか心地よい柔らかい何か！ 戒那さん！？ わかってらっしゃいますの！！？？」

「当てるのよー！…」

『良いぞもつとやれ!』

意思をしつかり戒那に告げる

するとどうだろう、少しずつ赤くなつた戒那はふるふる震えたと思つたら後ろに回り込み、首に手を回して締める

それが地味にキマって息苦しくなるが、肩辺りに感じる気持ちの良
い感触

背が小さいせいかな肩に当たるそれを注意するがまさかの故意

それを聞いて親父雰囲気全開放出の中年の方々

………気持ち良いなあ、戒那って結構大きいんだあ、道着だからわ
からなかった………ハッ!? 殺気!!?

殺気のする方向に視線を移す、そこには背中から黒紫色のオーラを
纏う青年の方々茶化す中年の方々

「《だらだらだら》か、かかかか戒那さん! お願い離して!
!」

「だゝめっ、今日は付き合ってもらつんだから離さないわよ! そ
れに、私弟が欲しかったのよねえ………まあ、予想外だけど」

「とても嬉しいんだけど、今はそんなことじゃなくてえっ!」

青年の方々から更なる殺気があつ! もうあれ黒紫じゃないよ!

今の自分の心の色を聞いたら間違いなく、「黒だよ……真つ黒！
！」って言うよあれ！！

「……………どうじゃ？ 巖凱さん《ボソツ》」

「……………ふむ、申し分無い。あれならば更に強くなれるじやろう《
ボソツ》」

小さく耳に届く話し声

よく聞き取れなかったけど、これだけはわかる……………半月、とても
忙しくなる、と……………

あれから、青年の方々からとてつもない扱きを喰らい、中年の方々
からは茶化され（戒那との日々に対して、中々中学生には衝撃が強
い下ネタで）戒那にはコテンパンにされたり仲良く教えあったり、
巖凱げんがいさんにじいちゃん並に扱かれたり

そんな日々を過ごし、戒那は出ていった

最後に戦ったけど、やっぱり敵わなくて、でも約束した。必ず勝つ、
と……………

「約束は、守らないとな……………」

やろう、久しぶりに

ここだと迷惑だろう、中庭に行こう

そうして扉に手をかける

しかし俺は忘れていた。ここは……………違う国なんだって

「《ギイイイイ》……………え？」

「……………《グルルルル》……………！》」

中庭に白と黒の虎模様の生物がいた

……………え？ 虎？ しかも白虎？ 英語でいうとホワイトタイガー？

しかも彼（？）はその鋭い目で俺を捉えた

……………ここで皆に質問。よだれだらだら虎を見たら、あなたはど
うしますか？

もちろん俺は……………逃げる！！

「う、うわわ……………！《ダッ！》」

「グル……………ガアア！！《タタアン》」

雷火で走る

無いよりましだ！ 捕まったら確実に殺られる！

後ろを振り向く。かわらずよだれだらだら白虎が追いかけてくる。やはり速いつー！

「くそ！ 死ぬるものかよ！！《ズダァン！！》」

「ガァァァー！！！！」

走る走り走る！

安定しない雷火と、自分自身の脚力を信じて！

廊下を俺と白虎が駆け抜ける

時々出会う兵が驚きながら壁にへばりつき、回避した後俺が通った後を駆けていく

願わくば、孫策達を呼んできてくれと願わずにはいられないが今は逃げるしかない！！

『これはこれは、逞しい限りじゃのお』

また頭の中に島津さんの記憶が現れる

檻の中には今俺を追いかけてくる白虎より大きな白虎がいて、グルグルと喉を鳴らしている

『よし、檻を開けんしゃい。こやつをもっと見たかね!』

『し、島津様! 危険ですからそのようなことは!』

『エエから開けんしゃい! 安心しなはれ、別に悪くはせんぞ』

『は、はい……………《ガチャ》』

家来の人が檻の鍵を開ける

『ガアア!!』

白虎が飛び出し、島津さんにのし掛かる

『島津様! おい! 火縄銃を』

『いらんことはやめんしゃい!! 今はオイとこいつの真剣勝負じゃ!』

『し、島津様!』

虎は変わらず島津さんを下敷きにしてのし掛かり、肩を自分の大きな手で抑えグルルと島津さんに顔を寄せる

「……………」

「ガアアッ!!」

立ち止まって、俺は白虎に向き合い、島津さんと同じ状況になる

『……………』

『「グルルルル」』

島津さんが白虎に手を伸ばす。それと共に動かされるように俺の手が伸びる

『「……………いい目だ」』

『「グルルルル……………《ペロペロ》」』

白虎の顎を撫で、白虎も気持ち良さそうに喉を鳴らして顔を舐めてくる

島津さん……………やっぱり貴方って偉大ですね

城内の森で白虎にのし掛かれながら顎を撫でる妙な空間が広がっている

そんな俺達に射す影

「《グルルルル》」

「……………え？」

その影の正体は……………これまた白黒の毛なんだが、四足歩行する生物

その生物はいきなり二足歩行になって寄ってきて、白虎に飛びかかった

もう一つの武、白虎と熊猫との遭遇、二つの記憶（後書き）

注 一刀はこの世界にきて一ヶ月強しか経ってません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7386m/>

真・恋姫†無双 ~鬼の一刀~

2011年1月30日12時26分発行